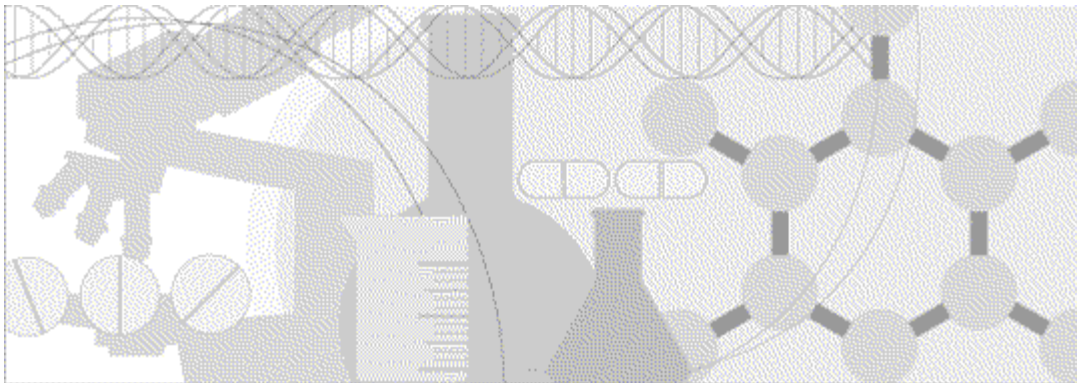


# インストールガイド

Oracle Health Sciences InForm 6.0



ORACLE®

Part number : E37409-01

Copyright © 2013, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントの両方を含む）には専有情報が含まれています。このプログラムは使用および開示に関する制限を含むライセンス契約の下で提供され、著作権および特許、その他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定されている場合を除き、このプログラムのリバース エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

ここに含まれている情報は予告なしに変更される場合があります。当社は、このドキュメントに誤りがないことの保証は致しかねます。誤りを見つけた場合は、書面で当社に報告してください。ライセンス契約で明記的に許諾されている場合を除き、このプログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software -- Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核または航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかえる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、当社は一切責任を負いかねます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。Oracle は、第三者の Web サイトで提供されるコンテンツに関しては責任を負いかねます。かかるコンテンツの使用に関連する危険はすべて使用者の責任となります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。Oracle は (a) 第三者の製品またはサービスの質、もしくは (b) 製品またはサービスの提供および購入された製品またはサービスに関連する保証義務を含む第三者との契約の履行の責任を一切負いません。Oracle は 第三者との取引に起因する損失または損害には責任を負いません。

Oracle は、Oracle Corporation および／またはその関連会社の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標である可能性があります。

このドキュメントは、以前 Phase Forward Inc. 社により提供されていた材質、サービス、製品について記載している場合があります。材質、サービス、製品によっては提供を終了したものがあります。本書にかかる記載がある場合、Oracle およびその関連会社は一切その責任を負いかねます。

# 目次

このガイドについて	vii
このガイドの概要	viii
対象とする読者	viii
関連情報	ix
ドキュメント	ix
サポートが必要な場合	xii
<b>パート 1: データベースサービスの準備</b>	<b>1</b>
<b>インストールの準備</b>	<b>3</b>
InForm 6.0 製品イメージファイル	4
InForm ソフトウェアコンポーネント	5
InForm システムアーキテクチャの概要	5
アプリケーションサーバのオプション	8
データベース設定のオプション	9
外部でホストされているスタディ	12
複数のスタディのためのリソースの決定	13
リソースを決定するためのガイドライン	13
サーバのサイズ設定	13
クライアントコンピュータの構成	15
Internet Explorer のブラウザ設定	15
Apple Safari のブラウザ設定	15
Firefox のブラウザ設定	16
Google Chrome のブラウザ設定	16
Windows エクスプローラの設定	17
[システムのプロパティ] でのパフォーマンスオプションの設定	18
<b>Oracle データベースソフトウェアのインストール</b>	<b>19</b>
Oracle データベースソフトウェアのインストールについて	20
Oracle データベースソフトウェアのインストール - SameDB	21
Oracle データベースソフトウェアのインストール - DiffDB	22
<b>Oracle データベースソフトウェアの設定</b>	<b>23</b>
Oracle データベースソフトウェアの設定について	24
データベースインスタンスの作成	25
データベースインスタンスの作成手順 — SameDB	25
データベースインスタンスの作成手順 — DiffDB	25
Oracle データベースインスタンスの作成	25
データベースインスタンスの初期化パラメータの設定	28
複数のデータベース環境でのアーカイブログモード	31
データベースユーザの作成	32
データベースユーザの作成手順 — SameDB および DiffDB	32
必要な InForm のデータベースアカウント	32
Cognos 8・BI Content Store データベースのユーザの作成	33
DiffDB 環境での InForm データベースサーバおよびレポーティングデータベースサーバへの rptinstall ユーザの作成	34
Content Store データベースサーバへの PFCapAdmin ユーザの作成	34

複数のスタディの表領域 .....	36
InForm スタディ表領域の分散 .....	36
INFORM_LOB 表領域の作成 .....	39
Oracle XA トランザクションサポートのセットアップ .....	40
<b>Oracle データベースクライアントのインストールと設定</b> .....	<b>41</b>
Oracle データベースクライアントのインストールと設定の手順 .....	42
Oracle データベースクライアントの National Language Support レジストリ設定の更新 .....	43
データベース接続の設定 .....	44
データベース接続の検証 .....	45
<b>パート 2：アプリケーションサーバの準備</b> .....	<b>47</b>
<b>InForm アプリケーションサーバの準備</b> .....	<b>49</b>
InForm アプリケーションサーバの準備の手順 .....	50
ステップ 1：InForm アプリケーションサーバの Oracle データベースクライアントの検証 .....	51
ステップ 2：InForm アプリケーションサーバへの InForm コアソフトウェアのインストール .....	52
ステップ 3：InForm アプリケーションサーバの AuthenticationFilter レジストリキーの DomainSuffix エントリの更新 - オプション .....	59
ステップ 4：InForm アプリケーションサーバの SSL の有効化 - オプション .....	61
インストール結果の検証 .....	62
検証のための必要条件 .....	62
サンプルスタディユーザのパスワードの変更 .....	62
Admin-ユーザテスト .....	63
Admin-権限テスト .....	64
Admin-施設テスト .....	65
Admin-グループテスト .....	65
Admin-ユーザおよびグループテスト .....	66
CRC/CRA のテスト .....	67
<b>Reporting アプリケーションサーバの準備</b> .....	<b>73</b>
Reporting アプリケーションサーバの準備について .....	74
Oracle ディレクトリサーバの準備 .....	75
Oracle ディレクトリサーバの準備の手順 .....	75
ステップ 1：Oracle ディレクトリサーバのインストール .....	75
ステップ 2：Oracle ディレクトリサーバへの ORACLEHS 組織単位 (OU) と crnsysadmin ユーザの作成 .....	76
Cognos Content Manager サーバの準備 .....	78
Cognos Content Manager サーバの準備の手順 .....	78
ステップ 1：アプリケーションサーバの Oracle データベースクライアントの検証 .....	79
ステップ 2：ステップ 2：Cognos Content Manager サーバへの Cognos ソフトウェアと 更新のインストール .....	79
ステップ 3：ステップ 3：Cognos Content Manager サーバの JRE のセットアップ .....	80
ステップ 4：Oracle JDBC ドライバのセットアップ .....	80
ステップ 5：Cognos Content Manager サーバでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行 .....	80
ステップ 6：Cognos Content Manager サーバでの ORACLEHS LDAP ネームスペース の作成 .....	80
ステップ 7：MotioCAP_informcap.properties ファイルの変更または 新規作成 - オプション .....	81
ステップ 8：Cognos Content Manager サーバの Cognos 8 BI 電子メール設定のカ スタマイズ .....	82
ステップ 9：Cognos Content Manager サーバの SSL の有効化 - オプション .....	82

Cognos Report サーバの準備 .....	83
Cognos Report サーバの準備の手順 .....	83
ステップ 1: Cognos Report サーバの Oracle データベースクライアントの検証 .....	84
ステップ 2: Cognos Report サーバへの Cognos ソフトウェアと更新のインストール .....	84
ステップ 3: Cognos Report サーバの JRE のセットアップ .....	84
ステップ 4: Oracle JDBC ドライバのセットアップ .....	85
ステップ 5: Cognos Report サーバでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行 .....	85
ステップ 6: Cognos Report サーバの SSL の有効化 - オプション .....	85
Cognos ゲートウェイサーバの準備 .....	86
Cognos ゲートウェイサーバの準備の手順 .....	86
ステップ 1: Cognos ゲートウェイサーバへの Cognos ソフトウェアと更新のイ ンストール .....	87
ステップ 2: Cognos ゲートウェイサーバの JRE のセットアップ .....	87
ステップ 3: Cognos ゲートウェイサーバでの Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig\setup.exe) の実行 .....	87
ステップ 4: Cognos ゲートウェイサーバの AuthenticationFilter レジストリキーの DomainSuffix エントリの更新 - パブリックゲートウェイのみ .....	92
ステップ 5: ステップ 5: Cognos ゲートウェイサーバでの SSL の有効化 - オ プション .....	93
Reporting アプリケーションサーバの一般的な手順 .....	94
Cognos ソフトウェアおよび更新 — Cognos Content Manager/Cognos Report サーバ /Cognos ゲートウェイサーバ .....	94
JAVA_HOME 環境変数への JRE の追加 .....	98
Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行 - Cognos Content Manager/Cognos Report サーバ .....	99
ORACLEHS LDAP ネームスペースの作成 .....	107

## Secure Socket Layer (SSL) の有効化 109

Secure Socket Layer (SSL) の有効化について .....	110
SSL をサポートする環境のセットアップ .....	111
すべてのサーバに対して実行する手順 .....	111
SameDB 設定で Reporting を使用する場合に実行すべき追加手順 .....	114
各スタディの SSL の有効化 .....	116
InForm 管理ユーザインターフェイスを使った SSL の有効化 .....	116
MedML による SSL の有効化 .....	116

## パート 3: インストール後のタスク 117

### インストール後のタスク 119

分散した Cognos 8・BI ソフトウェアコンポーネント間の通信の有効化 .....	120
複数サーバ環境での臨床モデル生成の有効化 .....	121
Cognos 8・BI サーバの起動 .....	122
カンマ区切り値 (CSV) レポート出力の設定 .....	123
レポート用 CSV の設定 .....	123

### スタディの展開 125

スタディの展開 .....	126
---------------	-----

### ソフトウェアコンポーネントの アンインストール 127

ソフトウェアコンポーネントのアンインストールについて .....	128
Cognos Customization for InForm および Cognos Gateway Customization for InForm ウ ィザードの アンインストール .....	129

Cognos 8・BI ソフトウェアのアンインストール.....	130
Oracle ディレクトリサーバ のアンインストール.....	131
InForm ソフトウェア のアンインストール.....	132
<b>コマンドとスクリプトのリファレンス</b>	<b>133</b>
admindb .....	134
configandcheckdiffdb.....	135
configdiffdb.sql .....	137
create_cap_table.sql.....	138
deinstall_reporting_diffdb .....	139
grant_dba_privs.sql.....	141
grant_user_privs.sql.....	142
informprepora.vbs .....	143
install_reporting_diffdb .....	144
mtsora102.vbs .....	146
oramtsadmin.sql.....	148
pfadmin .....	149
pfcognosconfig.....	162
pfrinit.....	165
remove_streams_setup_info_diffdb .....	168
<b>トラブルシューティング</b>	<b>169</b>
インストールの問題 .....	170
Oracle MTS 設定が無効.....	170
XA ビュー：無効 (XA Views:INVALID) .....	170
データベース接続.....	171
InForm サービス起動時のパスワードエラー .....	171
アンインストールの問題 .....	172
レポートスキーマの削除時にエラーが発生する .....	172
<b>サイレントモードでの Cognos Customization ウィザードの実行</b>	<b>173</b>
サイレントモードで Cognos Customization ウィザードを実行する手順.....	174
記録モードでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行.....	174
サイレントモードでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行.....	175
記録モードでの Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig\setup.exe) の実行.....	175
サイレントモードでの Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig\setup.exe) の実行.....	176

# このガイドについて

## この序章の内容

このガイドの概要 .....	viii
関連情報 .....	ix
サポートが必要な場合 .....	xii

## このガイドの概要

インストールガイドでは、InForm アプリケーションと Cognos Reporting のソフトウェアのインストールと環境の構成方法について説明しています。

## 対象とする読者

このガイドは InForm ソフトウェアと Cognos 8 Business Intelligence ソフトウェアのインストールおよび構成を担当するデータベース管理者とシステム管理者を対象にしています。



## 関連情報

### ドキュメント

すべてのドキュメントは Oracle Software Delivery Cloud (<https://edelivery.oracle.com>) および Download Center (<https://extranet.phaseforward.com>) から入手できます。

InForm ドキュメント	
ドキュメント	説明
リリースノート	リリースノートでは、今回のリリースで導入された拡張機能と修正された問題、アップグレードの注意事項、リリース履歴、およびその他の最新情報について説明しています。
既知の問題	<p>既知の問題では、このリリースに含まれる既知の問題に関する詳細な情報とその回避策（存在する場合）を説明しています。</p> <p><b>注：</b> 既知の問題に関する最新のリストは、Oracle Extranet で入手できます。</p> <p>Extranet にサインインするには、<a href="http://www.phaseforward.com">www.phaseforward.com</a> に移動して <b>[Customer Login]</b> をクリックします。電子メールアドレスとパスワードを入力して、<b>[Known Issues]</b> セクションに移動します。製品を選択して、検索条件を入力します。</p>
インストールガイド	『インストールガイド』では、ソフトウェアをインストールし、環境を InForm アプリケーションおよび Cognos 8 Business Intelligence 用に設定する方法について説明します。
スタディとレポート設定ガイド	『スタディとレポート設定ガイド』では、InForm スタディをセットアップし、レポーティングと分析モジュールをスタディ用に設定するために必要なタスクを実行する方法について説明します。
ユーザガイド	<p>ユーザガイドでは、多言語でのスタディ、ユーザインタフェースのナビゲート方法、また、アプリケーションを使用してスタディ実施時に標準的な業務を遂行する方法などの詳細を含む、InForm アプリケーションの概要について説明しています。</p> <p>このドキュメントは、ドキュメンテーション CD および InForm ユーザインタフェースからも参照できます。</p>

InForm ドキュメント	
ドキュメント	説明
レポーティングと分析ガイド	<p>『レポーティングと分析ガイド』では、レポーティングと分析モジュールの概要について説明します。このガイドでは、レポーティングと分析のインタフェースの概要、アドホックレポーティング機能にアクセスする方法、およびレポートに使用できるスタディ管理と臨床データパッケージについて解説します。また、インストールに含まれる各標準レポートについても詳しく説明します。</p> <p>このドキュメントは、ドキュメンテーション CD から参照できます。</p>
ユーティリティガイド	<p>ユーティリティガイドでは、以下のユーティリティについての情報とその使用手順を説明します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• PFConsole ユーティリティ</li> <li>• MedML インストラユーティリティ</li> <li>• InForm データエクスポートユーティリティ</li> <li>• InForm データエクスポート</li> <li>• InForm Performance Monitor ユーティリティ</li> <li>• InForm Report Folder Maintenance ユーティリティ</li> </ul> <p>このガイドには、MedML エlement、および InForm アプリケーション上のデータをインポートおよびエクスポートするために使用されるスクリプトオブジェクト、およびデータインポートXML のサンプルに関する参照情報も含まれています。</p> <p>このドキュメントは、ドキュメンテーション CD から参照できます。</p>
Reporting Database Schema Guide	<p>『Reporting Database Schema Guide』では、レポーティングと分析データベーススキーマについて説明します。</p>
Portal 管理ガイド	<p>『Portal 管理ガイド』では、InForm Portal ソフトウェアのセットアップと、InForm Portal アプリケーションの設定および管理の手順について説明します。</p> <p>このドキュメントは、ドキュメンテーション CD および InForm Portal ユーザインターフェイスからも参照できます。</p>

InForm ドキュメント	
ドキュメント	説明
MedML インストーラ ユーティリティ オンラインヘルプ	<p>MedML インストーラユーティリティのオンラインヘルプでは、スタディコンポーネントを定義する XML を InForm データベースにロードするために使用される MedML インストーラユーティリティの使用方法を順を追って説明します。</p> <p>このガイドには、MedML エlement、および InForm アプリケーション上のデータをインポートおよびエクスポートするために使用されるスクリプトオブジェクト、およびデータインポート XML のサンプルに関する参照情報も含まれています。</p> <p>このドキュメントは、ユーザインタフェースからも参照できます。</p>
InForm データ エクスポート オンラインヘルプ	<p>InForm データエクスポートのオンラインヘルプでは、InForm データエクスポートの使用方法について、順を追って説明します。InForm データエクスポートは、InForm アプリケーションからデータを以下の形式にエクスポートするために使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>顧客定義データベース (CDD; Customer-Defined Database)</li> <li>コントロール名/値のペア</li> </ul> <p>このドキュメントは、ユーザインタフェースからも参照できます。</p>
InForm データ エクスポート ユーティリティ オンラインヘルプ	<p>InForm データエクスポートユーティリティのオンラインヘルプでは、InForm データエクスポートユーティリティの使用方法について、順を追って説明します。InForm データエクスポートユーティリティは、InForm アプリケーションにデータをインポートするために使用されます。</p> <p>このドキュメントは、ユーザインタフェースからも参照できます。</p>

## サポートが必要な場合

My Oracle Support にアクセスするとサポートを受けることができます。詳細については <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> を参照するか、耳が不自由な方は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

# パート **1** : データベースサービスの準備



# 第 1 章 インストールの準備

## この章の内容

InForm 6.0 製品イメージファイル .....	4
InForm ソフトウェア コンポーネント .....	5
複数のスタディのためのリソースの決定 .....	13
クライアントコンピュータの構成 .....	15
「システムのプロパティ」でのパフォーマンスオプションの設定 .....	18

## InForm 6.0 製品イメージファイル

InForm 製品イメージファイルには、次のものを格納したフォルダが含まれています。

- ネイティブインストーラ - ネイティブインストーラフォルダには、InForm ソフトウェアおよび InForm Portal ソフトウェアの実行に必要な基本製品をインストールするセットアップファイルが含まれています。
- カスタマイゼーションウィザード - カスタマイゼーションウィザードフォルダには、レポートینگと分析モジュールのインストールに必要なカスタマイゼーションを適用するためのセットアップファイルが含まれています。カスタマイゼーションウィザードフォルダは、レポートینگと分析モジュールをインストールする場合にのみ使用します。

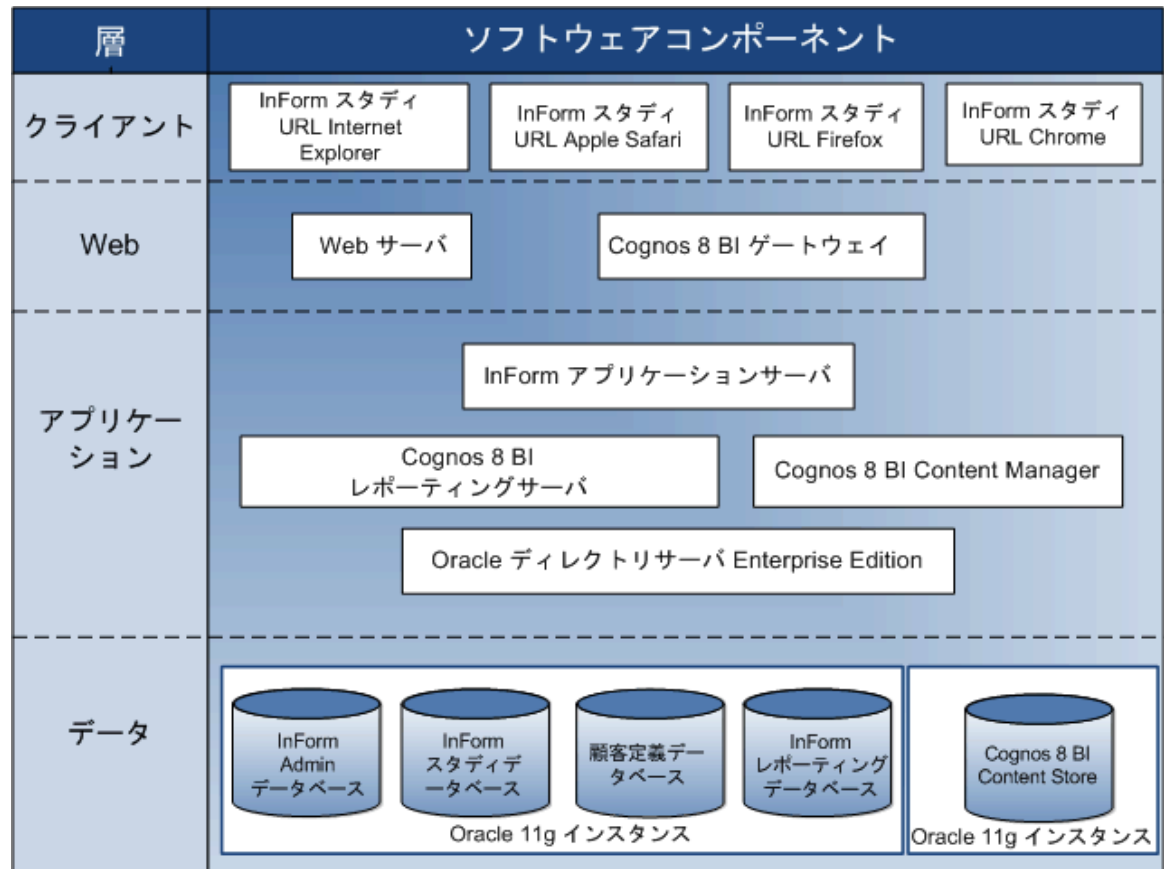
フォルダ	説明
InForm	InForm コアおよび InForm Portal インストールソフトウェアが含まれています。
CRNConfig	Cognos Customization for InForm ウィザードを実行するためのファイルが含まれています。
CRNGatewayConfig	Cognos Gateway Customization for InForm ウィザードを実行するためのファイルが含まれています。



# InForm ソフトウェアコンポーネント

## InForm システムアーキテクチャの概要

InForm ソフトウェアは、次の 4 層で構成されています。次の図は、システムアーキテクチャの論理表現を例示したものです。



層	各層でホストされているソフトウェアコンポーネント	説明
クライアント	Web ブラウザ	スタディのページを表示し、ユーザがデータを入力できます。  注：Cognos 8.4.1 は、Internet Explorer 9.0 および Google Chrome、Apple Safari をサポートしていません。
Web	Web サーバおよびゲートウェイソフトウェア (MS-IIS)	Web ブラウザに対する、または Web ブラウザからのサービス要求。

層	各層でホストされているソフトウェアコンポーネント	説明
クライアント	Web ブラウザ	<p>スタディのページを表示し、ユーザがデータを入力できます。</p> <p><b>注：</b> Cognos 8.4.1 は、Internet Explorer 9.0 および Google Chrome、Apple Safari をサポートしていません。</p>
	Cognos 8・BI Gateway	Web サーバから別のサーバへの情報の転送を管理します。Cognos 8 Business Intelligence (Cognos 8・BI) サーバへセキュリティで保護されたアクセスを提供します。
アプリケーション	InForm アプリケーションサーバ	InForm サービスの下で、InForm スタディに対し、トランザクションマネージャとして機能する論理サーバ。InForm サーバは、キャッシングおよび Microsoft Transaction Server (MTS) のパッケージを処理します。各スタディは 1 つの InForm スタディアプリケーションサーバに関連付けられます。
	Cognos 8・BI レポートイングサーバ	オペレーティングシステムサービスに対するレポートイング関連の要求を実行します。Cognos 8・BI サービスは、物理サーバマシン 1 台につき 1 つ存在します。
	Cognos Content Manager	セキュリティやコンフィギュレーションデータ、モデル、指標、レポート仕様、レポート出力などを含む、顧客アプリケーションデータの保存を管理します。Content Manager は、パッケージの公開、レポート仕様の取得/保存、スケジューリング情報の管理、Cognos ネームスペースの管理に必要です。
	Oracle ディレクトリサーバ	InForm レポートデータベースへセキュリティで保護された管理アクセスを提供します。

層	各層でホストされているソフトウェアコンポーネント	説明
クライアント	Web ブラウザ	スタディのページを表示し、ユーザがデータを入力できます。  <b>注：</b> Cognos 8.4.1 は、Internet Explorer 9.0 および Google Chrome、Apple Safari をサポートしていません。
データ	Oracle データベース インスタンス	<ul style="list-style-type: none"> <li>• InForm データベース - スタディコンポーネントとスタディデータを保存します。スタディは通常、InForm Admin スキーマと Oracle データベースのインスタンスを共有します。</li> <li>• InForm Admin データベース - 物理マシン上ですべてのスタディを管理するために、InForm サービスにより使用されます。InForm Admin データベースは、InForm サービス 1 つにつき 1 つ存在します。</li> <li>• InForm レポートイングデータベース - レポートイングと分析モジュールを介して、Cognos レポートイングのビューを保存します。InForm レポートイングデータベースは、Oracle データベースのインスタンスを InForm Admin およびスタディデータベースと共有できます。また、個別の Oracle データベースインスタンスに保存することも可能です。Cognos レポートイングを使用する際のインストールでは、それぞれの InForm スタディデータベースに対応する InForm レポートデータベースが存在します。</li> <li>• Cognos 8・BI Content Store - フォルダ、保存したレポート、保存したビューなど、ユーザが作成したレポートオブジェクトを保存します。Content Store は、通常、別の Oracle インスタンスにあります。</li> </ul>

## Cognos プライベートゲートウェイについて

レポートイングと分析モジュールをインストールする場合、プライベートゲートウェイもインストールする必要があります。プライベートゲートウェイは、InForm ユーザインターフェイスでは使用できない Cognos 8 Business Intelligence ソフトウェアの一定の管理タスクへの安全なアクセスを実現します。

プライベートゲートウェイは、Cognos 8 Business Intelligence ソフトウェアの管理権限を持つ限定された数のユーザのみがアクセス可能な専用のセキュアサーバ (Cognos プライベートゲートウェイサーバ) になければなりません。詳細については、「**Cognos ゲートウェイサーバの準備**」(86ページ) を参照してください。

## アプリケーションサーバのオプション

環境に最適化させるために、複数のアプリケーションサーバ間でソフトウェアコンポーネントを分散させることができます。次の配置オプションのいずれかを使用できます。

- **最小サーバ配置** — 可能な限り最小数のサーバに InForm ソフトウェアとレポーティングと分析モジュールをインストールします。
- **複数サーバ配置** — 複数のサーバに InForm ソフトウェアとレポーティングと分析モジュールをインストールします。
- **分散配置** — 別々のサーバに InForm ソフトウェアとレポーティングと分析モジュールをインストールします。

### 最小サーバ配置

最小のサーバ展開に 4 台のサーバが必要です。

- InForm アプリケーション サーバ
- Cognos コンポーネントをホストするサーバおよび Oracle ディレクトリサーバ
  - レポートアプリケーション
  - Content Manager
  - Gateway
  - Oracle ディレクトリサーバ
- プライベートゲートウェイ
- すべてのデータベースインスタンス用のサーバ

### 複数サーバ配置

複数サーバ構成の場合、InForm サーバ、Cognos 8 Business Intelligence サーバ、およびスタディデータベースとレポーティングデータベースを、InForm のハードウェア要件およびソフトウェア要件に準拠する 6 台以上のサーバマシンに配置します。

複数サーバ配置では、たとえば、次のような 8 台のサーバマシンで構成することが可能です。

- Cognos ゲートウェイサーバマシン 1 台
- Cognos プライベートゲートウェイサーバマシン 1 台
- 以下を含む Cognos サーバマシン 1 台：
  - Cognos Report サーバ

- Cognos Content Manager サーバ
- InForm アプリケーションサーバサーバマシン 1 台
- Oracle ディレクトリサーバマシン 1 台
- 次を示す Oracle データベースサーバ専用マシン 3 台：
  - InForm スタディ
  - InForm レポーティング。
  - Cognos 8・BI Content Store。

注：InForm アプリケーションサーバと Cognos 8・BI アプリケーションサーバは同じドメインに設定する必要があります。

## 分散サーバ配置

分散サーバ配置では、InForm アプリケーションサーバ、Cognos Report サーバ、Cognos Content Manager サーバ、Cognos ゲートウェイサーバ、Oracle ディレクトリサーバ、スタディデおよびレポーティングのデータベースが、InForm のハードウェア要件およびソフトウェア要件に準拠する個別のマシンに配置されます。

分散サーバ配置では、たとえば、次のような 9 台以上のサーバマシンで構成することが可能です。

- InForm アプリケーションサーバサーバマシン 1 台
- Cognos ゲートウェイサーバ 1 台
- Cognos プライベートゲートウェイサーバ 1 台
- Cognos Report アプリケーションサーバ 1 台
- Cognos Content Manager サーバ 1 台
- Oracle ディレクトリサーバマシン 1 台
- 次を示す Oracle データベースサーバ専用マシン 3 台：
  - InForm データベースインスタンス
  - InForm レポーティングデータベースインスタンス
  - Cognos 8・BI Content Store データベースインスタンス

## データベース設定のオプション

InForm ソフトウェアをインストールする場合、データベースインスタンスの異なる設定を使用できます。次のいずれかを選択できます。

- **SameDB** — InForm データベースと InForm レポーティングデータベースは、単一データベースインスタンス上にインストールされます。
- **DiffDB** — InForm データベースと InForm レポーティングデータベースは、個別のデータベースインスタンス上にインストールされます。
- **分散配置** — データベースインスタンスは、複数のデータベースサーバ間で表領域を分散するように設定されます。詳細については、「**複数のスタディの表領域**」(36ページ) を参照してください。

## SameDB—InForm と Cognos レポーティングソフトウェアに 単一データベースインスタンスを使用

Oracle では、デフォルト設定として InForm ソフトウェアとレポーティングと分析モジュールを同じデータベースインスタンスにインストールし、特定の限られた場合にのみ別々のデータベースインスタンスにインストールすることを推奨しています。

- スタディに対し、同時ユーザ数が 70 名以下、同時レポーティング接続が 8 つ以下の場合、同一のデータベースインスタンスにインストール可能です。レポーティングへの 8 つの接続には、アドホッククエリ、標準/カスタムレポート、レポートジョブの実行の任意の組み合わせが数に含まれます。
- スタディに対し 70 名を超える同時ユーザ、8 つを超える同時レポーティング接続が必要な場合でも、同一のデータベースインスタンスにインストールすることが可能ですが、InForm ソフトウェアとレポーティングと分析モジュールを別々のデータベースインスタンスにインストールすることを検討してください。
- スタディに対し 16 以上の同時レポーティング接続が必要な場合、Oracle では別々のデータベースインスタンスにインストールを行うことを推奨しています。

InForm ソフトウェアとレポーティングと分析モジュールを同一のデータベースインスタンスに設定する場合は、次のアーキテクチャルールに従ってください。

- スタディスキーマごとにレポーティング環境は 1 つのみ許容されます。
- 1 つのデータベースに複数のレポーティングスキーマを保持できます。
- スタディスキーマとレポーティングスキーマは、Cognos 8 Business Intelligence の Content Store データベースと同じデータベースにはインストールできません。スタディデータベースまたはレポートデータベースに、CIS ソフトウェアや Clintrial ソフトウェアのような他の Oracle 製品が先に存在していたり、これらを後から追加したりすることがないようにしてください。
- InForm スタディデータベースおよびレポートデータベースは、アーカイブログモードで実行する必要はありません。

## DiffDB - InForm および Cognos レポーティングソフトウェア用の個別データベースインスタンス

InForm と Cognos レポーティングソフトウェアを個別のデータベースインスタンスにインストールする場合、次のそれぞれに個別のデータベースインスタンスを使用できます。

- InForm Admin スキーマと複数の InForm スタディスキーマを含む各 InForm サーバ
- InForm レポーティングスキーマ
- Cognos 8・BI Content Store スキーマ
- PFCap Admin スキーマ

**注：** PFCap Admin スキーマは、Cognos 8・BI Content Store スキーマと同じインスタンスまたは別のインスタンスに存在できます。

次のアーキテクチャルールに従ってください。

- レポーティングと分析環境（InForm レポートデータベース）はスタディのインスタンスとは異なるデータベースインスタンスにインストールする必要があります。
- InForm アプリケーションサーバと Cognos 8・BI アプリケーションサーバは同じドメインに設定する必要があります。
- レポートデータベースインスタンスのレポーティングスキーマの Oracle ユーザ名は、スタディデータベースインスタンスのスタディスキーマの Oracle ユーザ名と同じである必要があります。異なるデータベースインスタンスのユーザとなるため、異なるパスワードを使用できます。
- スタディスキーマごとにレポーティング環境は 1 つのみ許容されます。
- 1 つのレポートデータベースには複数のレポーティングスキーマを保持できます。これらのレポーティングスキーマに関連付けられたスタディスキーマは、1 つの、または複数のスタディデータベースに存在する可能性があります。
- スタディスキーマとレポーティングスキーマは、Cognos 8 Business Intelligence の Content Store データベースと同じデータベースにはインストールできません。スタディデータベースまたはレポートデータベースに、CIS ソフトウェアや Clintrial ソフトウェアのような他の Oracle 製品が先に存在していたり、これらを後から追加したりすることがないようにしてください。
- スタディスキーマを作成するときはアーカイブログモードを有効にしておく必要があります。

詳細については、「**複数のデータベース環境でのアーカイブログモード**」(31ページ)を参照してください。

## 分散配置のオプション

同一サーバの複数のディスクパーティション間、または複数のデータベースサーバ間にスタディとレポーティングデータベースを分散できます。詳細については、「**複数のスタディの表領域**」(36ページ)を参照してください。

**注：** SameDB および DiffDB のデータベースは、分散環境で配置可能です。

## 外部でホストされているスタディ

外部でホストされているスタディは、次の要件を満たしている必要があります。満たしていない場合は、認証の問題が発生します。

- InForm アプリケーションサーバと Cognos 8・BI アプリケーションサーバは同じドメインに設定する必要があります。
- サイトにアクセスするには、完全修飾ドメイン名 (FQDN) を使用する必要があります。



## 複数のスタディのためのリソースの決定

InForm アプリケーションサーバまたは物理サーバ上に 1 つ以上のスタディをインストールできます。サーバの構成を決める場合は、次の項目について考慮してください。

- 各物理サーバマシン上の InForm アプリケーションサーバの数。
- 各 InForm アプリケーションサーバ上のスタディの数。

**注：**実稼動環境の場合は、**1** つの InForm アプリケーションサーバにインストールするスタディを **1** つに制限することをお勧めします。

- 目的の InForm アプリケーションサーバのサイズ（各サーバには 40 ～ 50 MB のメモリが必要）
- サーバマシンで実行するスタディ数
- システム可用性要件
- サーバと施設の地理的な距離

## リソースを決定するためのガイドライン

リソースを決定するには、次の基本ガイドラインに従います。

- 実稼動のスタディは、テストおよびトレーニングに使用するスタディとは異なるサーバマシンに配置する。
- それぞれの InForm アプリケーションサーバに設定されている複数の小規模なスタディ（特にフェーズ 1 のスタディ）は、1 台のサーバマシンを使用するように検討する。
- 大規模なスタディ（特にフェーズ 3 のスタディ）は、個別のサーバマシンを使用する。サーバを複数にすると、追加リソースおよび追加コストが必要となる場合がありますが、信頼性と安定性が向上します。

サーバマシンを個別にすると、リスクを軽減できます。1 台のサーバマシンに複数のスタディを配置した場合、セットアップ時または設定時にエラーがあると、そのサーバに存在するすべてのスタディに影響が及びます。

## サーバのサイズ設定

InForm アプリケーションサーバのサイズを設定する場合は、すでに使用されているリソースに注意します。スタディ中はサーバを監視するようにしてください。サーバのサイズを設定する場合は、次の平均数を考慮します。

- 施設
- 施設ごとの症例
- CRF（フォーム）
- データアイテム
- ユーザ

スタディごとに、次のことも考慮します。

- スタディの Good Clinical Practice（GCP）ステータス（GCP または非 GCP）
- スタディのフェーズ
- スタディの期間
- 登録率
- サーバと施設の地理的な距離
- システム可用性要件
- 施設の数
- ユーザの数
- 症例の数
- ユニークフォーム数
- フォームごとのアイテムの最大数
- フォームごとのアイテムの平均数
- フォームごとのルール of 最大数
- フォームごとのルール of 平均数
- 症例ごとのフォームの合計数

# クライアントコンピュータの構成

## Internet Explorer のブラウザ設定

Internet Explorer に次の設定を行い、InForm アプリケーションおよびレポーティングと分析モジュールにアクセスできるようにします。

Internet Explorer 9.0 は レポーティングと分析 モジュールではサポートされていません。

- ブラウザの優先言語を指定します。
- レポートを Microsoft Excel 形式で表示するには、次の手順を実行します。
  - InForm とレポーティングと分析のウェブサイトドメインを信頼できるサイトとして設定します。
  - ファイルをダウンロードする際のダイアログ表示を有効にします。
  - ダウンロード完了時の通知を有効にします。
- InForm およびレポーティングと分析のウェブサイトドメインのポップアップを許可するようにポップアップブロックを設定します。
- パスワードのオートコンプリートを無効化します。
- 暗号化ファイルをディスクに保存するように指定します。
- 保存しているページに新しいバージョンがあるかどうか、自動的に確認するよう設定します。
- 使用するディスク領域を 6 MB に設定します。
- HTTP および SSL オプションで、それぞれ HTTP 1.1 と SSL 3.0 を使用するように設定します。
- 背景の色とイメージを印刷するオプションを有効にします。
- セキュリティ設定の変更：
  - ページの自動読み込みを許可します。
  - アクティブスクリプトを有効にします。
- 新しいタブでリンクを開くように、タブブラウジングを設定します。

詳細については、Internet Explorer のオンラインヘルプを参照してください。

## Apple Safari のブラウザ設定

次の Apple Safari 設定を行い、InForm アプリケーションにアクセスできるようにします。

Apple Safari はレポーティングと分析モジュールではサポートされていません。

- ブラウザの優先言語を指定します。
  - InForm アプリケーション Web サーバのポップアップを許可するようにポップアップブロックを設定します。
  - Safari のパスワードのオートコンプリートを無効化します。
  - セキュリティ設定を変更して、Cookie を受け入れるようにします。
  - 新しいタブでリンクを開くように、タブブラウジングを設定します。
- 詳細については、Apple Safari のオンラインヘルプを参照してください。

## Firefox のブラウザ設定

Firefox に次の設定を行い、InForm アプリケーションおよびレポーティングと分析モジュールにアクセスできるようにします。

- ブラウザの優先言語を指定します。
- InForm およびレポーティングと分析のウェブサイトドメインのポップアップを許可するようにポップアップブロックを設定します。
- 保存されているパスワードの使用を防止します。
- SSL 3.0 を使用するように SSL オプションを設定します。
- セキュリティ設定を変更して、Cookie を受け入れるようにします。
- 新しいタブでリンクを開くように、タブブラウジングを設定します。

詳細については、Firefox のオンラインヘルプを参照してください。

## Google Chrome のブラウザ設定

次の Google Chrome 設定を行い、InForm アプリケーションにアクセスできるようにします。

Google Chrome はレポーティングと分析モジュールではサポートされていません。

- ブラウザの優先言語を指定します。
- InForm および レポーティングと分析 のウェブサイトドメインのポップアップを許可するようにポップアップブロックを設定します。
- 保存されているパスワードの使用を防止します。
- SSL 3.0 を使用するように SSL オプションを設定します。
- セキュリティ設定を変更して、Cookie を受け入れるようにします。
- 新しいタブでリンクを開くように、タブブラウジングを設定します。

詳細については、Chrome のオンラインヘルプを参照してください。

## Windows エクスプローラの設定

Windows エクスプローラに次の設定を行い、InForm アプリケーションおよびレポートと分析モジュールにアクセスできるようにします。

- 拡張子が XLS および XLSX のファイルは、同じウィンドウで表示しないように設定します。
- XLS および XLSX の拡張子を持つファイルは、Microsoft Excel スプレッドシートソフトウェアに関連付けてください。

## 「システムのプロパティ」でのパフォーマンスオプションの設定

InForm アプリケーションサーバがスタディデータベースインスタンスのデータベースサーバでもある場合、**プロセッサスケジューリング**のシステム設定が「Adjust for best performance of Programs (プログラムのパフォーマンスを最適に調整する)」に設定されていなければ、スタディのインストールの際、キャッシュの初期化に関連するエラーが発生することがあります。

- 1 InForm アプリケーションとデータベースのサーバ上で、「システムのプロパティ」ダイアログボックスを開き、「詳細設定」を選択します。
- 2 「パフォーマンス」セクションの「設定」をクリックします。  
「パフォーマンスオプション」ダイアログボックスが表示されます。
- 3 「詳細設定」をクリックします。
- 4 「Processor scheduling (プロセッサスケジューリング)」セクションで「Programs (プログラム)」をクリックします。
- 5 両方のダイアログボックスで、「OK」をクリックします。

**注：** InForm アプリケーションサーバとデータベースサーバが別々のマシンである場合には、「システムのプロパティ」>「パフォーマンスオプション」ダイアログボックスの「**Processor scheduling (プロセッサスケジューリング)**」のシステム設定は、デフォルト値の「バックグラウンドサービス」である必要があります。

## 第 2 章

# Oracle データベースソフトウェアのインストール

### この章の内容

Oracle データベースソフトウェアのインストールについて .....	20
Oracle データベースソフトウェアのインストール - SameDB.....	21
Oracle データベースソフトウェアのインストール - DiffDB .....	22

## Oracle データベースソフトウェアのインストールについて

Oracle データベースソフトウェアをインストールするには、Oracle データベースドキュメントを参照してください。

インストールが正常に行われるよう、環境が正しく設定されていることを確認してください。ハードウェアおよびソフトウェアの要件については、「リリースノート」を参照してください。



## Oracle データベースソフトウェアのインストール - SameDB

SameDB 設定を使用する場合、以下に Oracle データベースソフトウェアをインストールする必要があります。

- InForm データベースサーバ
- Cognos Content Manager データベースサーバ

SameDB 設定に関する詳細は、以下をご覧ください。

- データベースインスタンスの作成手順 — *SameDB* (25ページ)
- データベースユーザの作成手順 — *SameDB* および *DiffDB* (32ページ)

## Oracle データベースソフトウェアのインストール - DiffDB

DiffDB 設定を使用する場合、以下に Oracle データベースソフトウェアをインストールする必要があります。

- InForm データベースサーバ
- InForm レポーティングデータベースサーバ
- Cognos Content Manager データベースサーバ

DiffDB 設定に関する詳細は、以下をご覧ください。

- **データベースインスタンスの作成手順 — *DiffDB*** (25ページ)
- **データベースユーザの作成手順 — *SameDB* および *DiffDB*** (32ページ)

## 第 3 章

# Oracle データベースソフトウェアの 設定

### この章の内容

Oracle データベースソフトウェアの設定について .....	24
データベースインスタンスの作成.....	25
データベースユーザの作成 .....	32
複数のスタディの表領域.....	36
Oracle XA トランザクションサポートをセットアップします。 .....	40

## Oracle データベースソフトウェアの設定について

Oracle データベースを設定するには、以下を作成する必要があります。

- データベースインスタンスと表領域

詳細については、「**Oracle データベースインスタンスの作成**」(25ページ)を参照してください。

- データベースユーザ

詳細については、「**データベースユーザの作成**」(32ページ)を参照してください。

# データベースインスタンスの作成

## データベースインスタンスの作成手順 —SameDB

SameDB 設定を使用している場合、以下を実行する必要があります。

- 1 次の場所にインスタンスを作成します。
  - InForm データベースサーバ
  - Cognos Content Manager データベースサーバ詳細については、次を参照してください。
  - **Oracle データベースインスタンスの作成** (25ページ)
  - **Cognos 8・BI Content Store のデータベースインスタンスの作成** (33ページ)
- 2 InForm データベースサーバのデータベースインスタンスの初期化パラメータを設定します。

詳細については、「データベースインスタンスの初期化パラメータの設定」(28ページ) を参照してください。

## データベースインスタンスの作成手順 —DiffDB

DiffDB 設定を使用している場合、以下を実行する必要があります。

- 1 次の場所にインスタンスを作成します。
  - InForm データベースサーバ
  - InForm レポーティングデータベースサーバ
  - Cognos Content Manager データベースサーバ詳細については、次を参照してください。
  - **Oracle データベースインスタンスの作成** (25ページ)
  - **Cognos 8・BI Content Store のデータベースインスタンスの作成** (33ページ)
- 2 InForm、Reporting、Content Store データベースサーバのデータベースインスタンスの初期化パラメータを設定します。

詳細については、次を参照してください。

  - **データベースインスタンスの初期化パラメータの設定** (28ページ)
  - **スタディデータベースのパラメータ - 異なるデータベースインスタンス** (30ページ)
  - **複数のデータベース環境でのアーカイブログモード** (31ページ)

## Oracle データベースインスタンスの作成

ご使用の設定に必要なインスタンスを作成するには Oracle ツールを使用してください。

InForm および Reporting、Content Store インスタンスに対しては、次のキャラクタセットを適用します。

- データベースキャラクタセット - AL32UTF8。
- 各国キャラクタセット - AL16UTF16。

キャラクタセット設定を確認するには、次の手順を実行します。

- 1 SQL\*Plus にログインし、次を入力します。

```
sqlplus <system_userid>@<connection_string>
```

入力を求められたら、システムユーザのパスワードを入力します。

- 2 次のコマンドを実行します。

```
select * from nls_database_parameters
where parameter =
any('NLS_CHARACTERSET','NLS_NCHAR_CHARACTERSET');
```

**InForm** データベースインスタンスを作成します。

- 1 Oracle データベースインスタンスをセットアップします。
- 2 InForm データベースサーバのデータベースインスタンスに次の表領域を入力します。
  - SYSAUX
  - SYSTEM
  - UNDOTBS1
  - USERS
  - TEMP
  - TEMPBIG
  - TRIAL\_INDEX\_TS
  - TRIAL\_TABLE\_TS
  - INFORM
  - INFORM\_LOB
- 3 InForm アプリケーションサーバにある tnsnames.ora ファイルを更新してデータベースサーバへの接続を確立するエイリアスを含めます。

レポーティングデータベースインスタンスを作成します。

- 1 Oracle データベースインスタンスをセットアップします。
- 2 **SameDB 環境の場合** — レポーティングデータベースは InForm データベースインスタンスを使用します。  
**DiffDB 環境の場合** — レポーティングデータベースサーバの、スタディデータベースに使用されたものと同じの表領域名を持つレポーティングデータベースインスタンスを使用します。
- 3 tnsnames.ora ファイルを更新してデータベースサーバへの接続を確立するエイリアスを含めます。
  - **SameDB 環境の場合**、tnsnames.ora ファイルは InForm アプリケーションサーバにあります。
  - **DiffDB 環境の場合**、tnsnames.ora ファイルは Cognos Report サーバにあります。

## Cognos 8・BI Content Store のデータベースインスタンスの作成

- Content Store データベースサーバに Oracle データベースインスタンスを設定します。

## データベースインスタンスの初期化パラメータの設定

ご使用の環境に応じて、1～3 個のデータベースインスタンスが必要になることがあります（スタディ、レポーティングと分析モジュール、Cognos 8・BI がそれぞれ 1 つずつインスタンスを使用する場合があります）。

各 InForm の Oracle インスタンスを作成する際には、Init.ora ファイルに含まれる次の初期化パラメータを使用します。

**注：** ご使用のインストールに DiffDB 環境の Cognos 8・BI およびレポーティングと分析モジュールが含まれ、ご使用のスタディとレポートデータベースが別のデータベースインスタンスに置かれている場合は、追加のパラメータ設定が必要になります。詳細については、「スタディデータベースのパラメータ - 異なるデータベースインスタンス」（30ページ）を参照してください。

パラメータ	実稼動サーバの値	開発サーバの値
memory_target	平均的なトライアル： 1500MB 大規模なトライアル：10GB 超大規模なトライアル： 25GB	最大で 80% のメモリを Oracle データベースで 使用可能
cursor_sharing	exact	exact
db_block_size	16384	16384
db_file_multiblock_read_count	16	16
db_cache_size	0	0
<b>注 1 を参照</b>		
db_files	データベースに依存。	データベースに依存。
open_cursors	150	150
<b>注 1 を参照</b>		
processes	150（または並行処理の 最大数）	50
<b>注 1 を参照</b>		
session_cached_cursors	150	150
shared_pool_reserved_size	5M	3.5M
streams_pool_size	200M	200M



パラメータ	実稼動サーバの値	開発サーバの値
job_queue_processes	最小 5 : スタディごとに 1 ジョブ (各スタディスキーマの PF_HEARTBEAT テーブルを毎分更新するジョブ) およびプロパゲーションごとに 1 ジョブ、さらにストリームの最低要件は 2 ジョブ、Oracle MTS に 1 ジョブ必要	最小 5 : スタディごとに 1 ジョブ (各スタディスキーマの PF_HEARTBEAT テーブルを毎分更新するジョブ) およびプロパゲーションごとに 1 ジョブ、さらにストリームの最低要件は 2 ジョブ、Oracle MTS に 1 ジョブ必要
statistics_level	Typical	Typical
workarea_size_policy	自動	自動
_optimizer_cost_based_transformation	Off	Off
<b>注 2</b> を参照		
sec_case_sensitive_logon	False	False
_push_join_predicate	False	False
deferred_segment_creation (11g のみ)	False	False
skip_unusable_indexes	TRUE	TRUE
undo_retention	900	900
parallel_max_servers	3	3

**注 1 :** これらのパラメータは、**InForm** アプリケーションとストリームによって作成されるデータベースへの要求に応じて調整が必要になることがあります。

**注 2 :** データベースの問題 **5382842** に対して **Oracle** が提供する回避策。

## スタディデータベースのパラメータ - 異なるデータベースインスタンス

DiffDB 環境では、レポーティングと分析モジュールで一部のスタディデータベースパラメータを追加または変更する必要があります。次の表は、これらのパラメータに必要な調整を示しています。すべての設定が、実稼動サーバと開発サーバの両方に必要です。

さらに、**processes** パラメータと **sessions** パラメータはレポーティングと分析のインストールには必須ではありませんが、確認することをお勧めします。

詳細については、Oracle データベースのドキュメントである『*Oracle Streams Recommendations*』を参照してください。

パラメータ	値	コメント
AQ_TM_PROCESS	1	スタディデータベースとレポーティングデータベースの両方で設定される必要があります (0 に設定されていると、ストリームの処理がハングする可能性があります)。
global_names	TRUE	
job_queue_processes	4 以上 (最初のレポーティングスキーマ用の 2 を含む)	最小 5: トライアルごとに 1 ジョブ (各トライアルスキーマの PF_HEARTBEAT テーブルを毎分更新するジョブ) およびプロパゲーションごとに 1 ジョブ、さらにストリームの最低要件は 2 ジョブ、Oracle MTS に 1 ジョブ必要
log_archive_dest	アーカイブログが書き込まれるターゲット	少なくとも 1 つの書き込み先を選択してください。
log_archive_dest_state_1	ENABLE	アーカイブログの書き込み先 (log_archive_dest_1) を有効にします。書き込み先ごとに状態を入力する必要があります。
open_links	4 以上	ストリームの Oracle 推奨値は 4 以上。
parallel_max_servers	10	最小必要条件: 平行適用または取得プロセス (もしくはその両方) の数に応じて 3。
timed_statistics	TRUE	ストリームの経過時間情報を収集する場合の Oracle 推奨設定
undo_retention	900 (最小値)	
_job_queue_interval	1	ストリームの Oracle 推奨値。
deferred_segment_creation	False (11g のみ)	

## 複数のデータベース環境でのアーカイブログモード

DiffDB 設定を使用している場合は、アーカイブログモードを有効にして、スタディデータベースを作成する必要があります。スクリプトまたは Oracle Database Configuration Assistant ユーティリティを使用して、データベースを作成できます。

- スクリプト - `archive` を `create database` ステートメントの一部として指定します。
- Oracle Database Configuration Assistant - [アーカイブ] タブで、初期化パラメータ手順の実行中に [アーカイブログモード] チェックボックスを選択します。

注 : Oracle Database Configuration Assistance ユーティリティの詳細については、Oracle データベースドキュメントである、使用するプラットフォーム用の『**Oracle Administrator's Guide**』を参照してください。

# データベースユーザの作成

## データベースユーザの作成手順 —SameDB および DiffDB

SameDB または DiffDB 設定を使用している場合、以下を実行する必要があります。

- 1 InForm データベースサーバに InForm データベースユーザを作成します。  
詳細については、次を参照してください。
  - **必要な InForm のデータベースアカウント** (32ページ)
- 2 Cognos Content Store データベースサーバに Cognos PFCapAdmin および Content データベースユーザを作成します。  
詳細については、次を参照してください。
  - **Cognos 8・BI Content Store データベースのユーザの作成** (33ページ)
  - **Content Store データベースサーバへの PFCapAdmin ユーザの作成** (34ページ)
- 3 DiffDB 設定を使用している場合は、レポーティングデータベースサーバに rptinstall ユーザも作成する必要があります。  
詳細については、「**DiffDB 環境での InForm データベースサーバおよびレポーティングデータベースサーバへの rptinstall ユーザの作成**」(34ページ)を参照してください。

## 必要な InForm のデータベースアカウント

次のデータベースアカウントは InForm サービスの各インスタンスに必要です。

- InForm ソフトウェアの DBA ユーザ。このユーザのデフォルト名は pfdbadmin です。
- InForm Admin データベースに接続できるユーザ。このユーザのデフォルト名は informadmin です。

これらのアカウントの作成方法として、InForm インストールウィザードでこれらを作成するオプションを選択することをお勧めします。いずれかのアカウントを別のタイミングで作成する必要がある場合は、スクリプトから実行できます。

デフォルト アカウント名	[インストールウィザード] チェックボックス	スクリプトおよび情報の入手先
pfdbadmin	Prep Oracle  詳細については、「 <b>ステップ 2 : InForm アプリケーションサーバへの InForm コアソフトウェアのインストール</b> 」(52ページ)を参照してください。	<b>informprepora.vbs</b> (143ページ)  詳細については、「 <b>スタディとレポート設定ガイド</b> 」を参照してください。

デフォルト アカウント名	[インストールウィザード] チェックボックス	スクリプトおよび情報の入手先
informadmin	Admin DB のインストール  詳細については、「 <b>ステップ 2 : InForm アプリケーション サーバへの InForm コア ソフトウェアのインストール</b> 」 (52ページ) を参照してください。	<b>admindb</b> (134ページ)  詳細については、『 <b>スタディと レポート設定ガイド</b> 』を参照してください。

InForm ソフトウェア を複数のサーバにインストールしている場合、InForm ソフトウェアがインストールされている各サーバに pfdbadmin アカウントと informadmin アカウントを作成します。

**注 :** pfadmin ユーザを作成する必要があるのはデータベースインスタンスごとに、**1 度**のみです。そのため、同一データベースインスタンスで InForm ソフトウェア をアンインストール後、再インストールする場合は、**2 度**目のインストール時、**[Prep Oracle]** チェックボックスをオフにしておきます。

## Cognos 8 ・ BI Content Store データベースのユーザの作成

- Content Store のキャラクタセットが Unicode であることを確認します。
- ユーザを作成し、次の役割と権限を付与します。
  - 役割
    - CONNECT
    - RESOURCE
  - 権限
    - CREATE ANY VIEW
    - UNLIMITED TABLESPACE
- 次のように入力して Cognos 8 ・ BI サーバからのデータベース接続を検証します。

**sqlplus** <contentuser\_userid>@<tnsnames\_alias>

入力を求められたら、コンテンツユーザのパスワードを入力します。

テストが正常に終了すると、Content Store のデータベースユーザとしてデータベースサーバにログオンしたことを示す SQL プロンプトが表示されます。テストが正常に終了しなかった場合は ORA エラーが生成されます。エラーのトラブルシューティングでサポートが必要な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

## DiffDB 環境での InForm データベースサーバおよびレポーティングデータベースサーバへの rptinstall ユーザの作成

- 1 コマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 2 スタディデータベースに SYSDBA 権限を持つユーザとしてログインします。  
as sysdba 句を使用して接続できることを確認します。
- 3 次のコマンドを実行します。

```
create user rptinstall identified by <dbauser_study_password> default
tablespace <tablespace_name> temporary tablespace <tablespace_name>
```

<dbauser\_study\_password> — rptinstall のパスワード、スタディのデータベースユーザ。  
このパスワードでは大文字と小文字が区別されます。

<tablespace\_name> - データベース内の有効な表領域名。Oracle では、デフォルト表領域に SYSTEM 表領域を使用しないことをお勧めします。

**注：** rptinstall ユーザはオブジェクトを所有しないため、デフォルトの表領域では、オブジェクト用に追加のスペースを必要としません。

- 4 SQL\*Plus のプロンプトに次のように入力します。

```
@grant_dba_privs rptinstall
```

grant\_dba\_privs.sql スクリプトは、<Installation\_Directory>\InForm\bin\YDBOra folder にあります。

詳細については、「*grant\_dba\_privs.sql*」(141ページ)を参照してください。

## Content Store データベースサーバへの PFCapAdmin ユーザの作成

- 1 Content Store データベースサーバに PFCapAdmin ユーザを作成し、次の役割と権限を付与します。
  - 役割
    - CONNECT
    - RESOURCE
- 2 create\_cap\_table.sql スクリプト (<Installation\_Directory>\InForm\bin\YDBOra folder にあります)を実行し、TRIAL\_URLS within this user/schema という名前の表を作成します。  
詳細については、「*create\_cap\_table.sql*」(138ページ)を参照してください。

**注：** CAP スキーマは、Content Store データベースインスタンスまたは個別のデータベースインスタンスに存在できます。

- 3 次のように入力して Cognos 8・BI サーバからのデータベース接続を検証します。

**sqlplus** *<contentuser\_userid>@<connection\_string>*

入力を求められたら、コンテンツユーザのパスワードを入力します。

テストが正常に終了すると、PFCapAdmin ユーザとしてデータベースサーバにログオンしたことを示す SQL プロンプトが表示されます。テストが正常に終了しなかった場合は ORA エラーが生成されます。エラーのトラブルシューティングでサポートが必要な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

## 複数のスタディの表領域

デフォルトでは、スタディオブジェクトはすべて INFORM 表領域に作成されます。実稼動環境では、パフォーマンスの改善および保守や監視の観点から、複数の表領域に各スタディを分散してください。実稼動サーバにスタディをインストールする前に、スタディ固有の表領域をセットアップします。

次の表に、作成する Oracle の表およびインデックスの表領域を、必要なパラメータと共に示します。表領域はすべてローカルで管理する必要があります。

**注：** スタディの表領域を作成する場合は、次の表にリストされている名前を使用します。

表の表領域	インデックスの表領域	サイズ (MB)
%STUDY_NAME%_REF	%STUDY_NAME%_REF_IDX	120
%STUDY_NAME%_HIGH_TXN1	%STUDY_NAME%_HIGH_TXN1_IDX	300
%STUDY_NAME%_HIGH_TXN2	%STUDY_NAME%_HIGH_TXN2_IDX	500
%STUDY_NAME%_HIGH_TXN3	%STUDY_NAME%_HIGH_TXN3_IDX	600
%STUDY_NAME%_HIGH_TXN4	%STUDY_NAME%_HIGH_TXN4_IDX	500
%STUDY_NAME%_TXN	%STUDY_NAME%_TXN_IDX	250

上記の各表領域の残りの構文は次のとおりです。

```
AUTOEXTEND ON NEXT 50M
EXTENT MANAGEMENT LOCAL AUTOALLOCATE;
```

**注：** テーブルスペースの **STUDY\_NAME** の部分は、**Oracle** の命名基準に従っている必要があります。数字で開始すること、特殊文字を使用することはできません。また、**Oracle** にはテーブルスペース名に **30** 文字の内部制限があるため、スタディの名前は **16** 文字以内にする必要があります。

Oracle は、表領域を 1～5 台のディスクに分散する設定例を示しています。

## InForm スタディ表領域の分散

実稼動環境では、Oracle は複数のディスクに表領域を分散することを推奨しています。次の表は推奨されるモデルを示したものです。どの設定においても、C: パーティション（C ドライブ）にオペレーションシステムを割り当て、データベースコンポーネントとアプリケーションコンポーネントを残りのパーティションに分散することをお勧めします。システムを監視して、最適な設定を決定してください。



- C: および D: は同じディスクに存在するパーティションです。
- INFORM、SYSTEM、TEMPBIG は表領域です。

注： **TEMPBIG** は **InForm** アプリケーションの一時的な表領域で、デフォルトの一時的な保存場所です。

物理 ディスク	0	1	2	3	4
論理 ディスク	C:	D:	E:	F:	G:
1 ディスク	Windows 2008	Oracle INFORM SYSTEM スタディの テーブル スタディの インデック ス TEMPBIG REDO ログ UNDOTBS アーカイブ ログ			
2 ディスク	Windows 2008	Oracle INFORM SYSTEM スタディの テーブル REDO ログ	スタディの インデック ス TEMPBIG REDO ログ UNDOTBS アーカイブ ログ		
3 ディスク	Windows 2008	Oracle INFORM SYSTEM REDO ログ	スタディの インデック ス TEMPBIG REDO ログ UNDOTBS アーカイブ ログ	スタディ のテーブ ル	

物理 ディスク	0	1	2	3	4	
論理 ディスク	C:	D:	E:	F:	G:	H:
4 ディスク	Windows 2008	Oracle INFORM SYSTEM REDO ログ	TEMPBIG REDO ログ UNDOTBS アーカイブ ログ	スタディ のテーブ ル	スタディ のイン デックス	
5 ディスク	Windows 2008	Oracle SYSTEM REDO ログ	INFORM REDO ログ UNDOTBS	スタディ のテーブ ル	スタディ のイン デックス	TEMPBIG アーカイブ ログ

**注：** Linux データベースサーバでは、ディスク名とパーティション名をこれらの環境の命名規則に従って付けます。

## INFORM\_LOB 表領域の作成

InForm をインストールする場合、INFORM\_LOB 表領域は省略可能です。INFORM\_LOB 表領域を作成するには、次の構文を使用します。

```
CREATE TABLESPACE INFORM_LOB
DATAFILE '<path_to_data_file>' SIZE <initial_size>
AUTOEXTEND ON NEXT
EXTENT MANAGEMENT LOCAL AUTOALLOCATE;
```

表領域名	初期サイズ/ 必要な自動 拡張サイズ	ファイル拡張 サイズ／ファイル 最大サイズ	コメント
INFORM_LOB	200M	初期サイズは 200MB、 AUTOEXTEND を 設定、MAXSIZE に は UNLIMITED を 設定	この表領域は使用しなくても かまいませんが、使用する 場合は、この表領域に INFORM_LOB という名前を 指定する必要があります。 この表領域を使用すると、 大規模なオブジェクトを保持 できます。

## Oracle XA トランザクションサポートのセットアップ

MTS トランザクションコンポーネントをサポートするよう、Oracle データベースをセットアップするには、Oracle XA トランザクションサポートを有効にします。開発環境と実稼動環境の両方の Oracle XA トランザクションサポートを有効にする必要があります。

- 1 InForm インストール中に **[Prep Oracle]** チェックボックスをオンにします。詳細については、「**ステップ 2: InForm アプリケーションサーバへの InForm コアソフトウェアのインストール**」(52ページ)を参照してください。

または

Oracle のインストール中またはインストール後に **mtsora102.vbs** スクリプトを実行します。

mtsora102.vbs スクリプトは XA トランザクションサポートを手動で設定するときのみ実行する必要があります。

詳細については、「**mtsora102.vbs**」(146ページ)を参照してください。

**注：** 複数層に分けた環境では InForm インストールを各 InForm アプリケーションサーバにインストール中、**[Prep Oracle]** チェックボックスをオンにして、各 InForm データベースサーバで **mtsora102.vbs** を実行します。スクリプトによって **MSDTC¥Security** または **MSDTC¥XADLL** レジストリキーが変更される場合は、サーバを再起動します。

- 2 Oracle クライアントホーム (Oracle Services for Microsoft Transaction Server のインストール場所) にある **¥oramts¥admin** から **oramtsadmin.sql** コマンドを実行します。

SYSDBA 権限を持つ SYS ユーザとして実行する必要があります。InForm アプリケーションサーバに接続するすべての Oracle インスタンスに対してこのスクリプトを実行します。

詳細については、「**oramtsadmin.sql**」(148ページ)を参照してください。

## 第 4 章

# Oracle データベースクライアントのインストールと設定

### この章の内容

Oracle データベースクライアントのインストールと設定の手順.....	42
Oracle データベースクライアントの National Language Support レジストリ設定の更新.....	43
データベース接続の設定 .....	44
データベース接続の検証 .....	45

## Oracle データベースクライアントのインストールと設定の手順

- 1 以下に Oracle データベースクライアントをインストールします。

- InForm アプリケーションサーバ
- Cognos Content Manager サーバ
- Cognos Report サーバ

詳細については、Oracle データベースドキュメントを参照してください。

- 2 Oracle データベースクライアントをインストールした各サーバのレジストリ設定を更新します。

詳細については、「**Oracle データベースクライアントの *National Language Support* レジストリ設定の更新**」(43ページ)を参照してください。

- 3 データベース接続を設定します。

詳細については、「**データベース接続の設定**」(44ページ)を参照してください。

- 4 データベース接続を検証します。

詳細については、「**データベース接続の検証**」(45ページ)を参照してください。

## Oracle データベースクライアントの National Language Support レジストリ設定の更新

次のレジストリ設定は、InForm アプリケーションサーバおよび Cognos Report サーバ、Cognos Content Manager サーバの Oracle Client Home に必要です。

エントリは次の Windows レジストリキーにあります。

HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE\<Oracle\_client\_home\_key>

オプション	値
NLS_LANG	American_America.AL32UTF8
NLS_SORT	JAPANESE_M

## データベース接続の設定

InForm アプリケーションサーバおよび Cognos Report サーバ、Cognos Content Manager サーバに Oracle クライアントを設定して、データベースサーバに接続するには、次の操作を実行します。

- アプリケーションサーバにある **tnsnames.ora** ファイルを更新してデータベースサーバへの接続の確立に使用するエイリアスを含めます。

**注：** InForm ソフトウェアのインストール中、**tnsnames.ora** ファイルに指定されたエイリアスを、データベース接続文字列として入力してください。



## データベース接続の検証

InForm アプリケーションサーバおよび Cognos Report サーバ、Cognos Content Manager サーバからデータベース接続を検証するには、次の操作を実行します。

- Windows コマンドプロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
sqlplus pfdadmin_userid@tnsnames_alias
```

入力を求められたら、pfdadmin のパスワードを入力します。

pfdadmin データベースアカウントのデフォルトのユーザ名は pfdadmin です。

テストが正常に終了すると、pfdadmin ユーザとしてデータベースサーバにログオンしたことを示す SQL プロンプトが表示されます。テストが正常に終了しなかった場合は ORA エラーが生成されます。エラーのトラブルシューティングでサポートが必要な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

**注：2** つのノードを持つ単一の **Ethernet** カードが搭載されたデータベースサーバが接続エラーの原因となっている可能性もあります。通常は、カードからいずれかのポートを無効にすることでこの問題は解決します。エラーの解決でサポートが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。



## パート **2**: アプリケーションサーバの 準備



## 第 5 章

# InForm アプリケーションサーバの準備

### この章の内容

InForm アプリケーションサーバの準備の手順 .....	50
ステップ 1 : InForm アプリケーションサーバの Oracle データベース クライアントの検証 .....	51
ステップ 2 : InForm アプリケーションサーバへの InForm コアソフトウェアの インストール .....	52
ステップ 3 : InForm アプリケーションサーバの AuthenticationFilter レジストリ キーの DomainSuffix エントリの更新 - オプション .....	59
ステップ 4 : InForm アプリケーションサーバの SSL の有効化 - オプション ...	61
インストール結果の検証 .....	62

## InForm アプリケーションサーバの準備の手順

すべての InForm インストールで InForm アプリケーションサーバが使用されます。

InForm アプリケーションサーバの準備を行うには、次の操作を実行します。

- 1 Oracle データベースクライアントを検証します。

詳細については、「**Oracle データベースクライアントのインストールと設定の手順**」(42ページ)を参照してください。

- 2 InForm コアソフトウェアをインストールします。

詳細については、「**ステップ 2 : InForm アプリケーションサーバへの InForm コアソフトウェアのインストール**」(52ページ)を参照してください。

- 3 AuthenticationFilter レジストリキーの DomainSuffix エントリを更新します。

詳細については、「**ステップ 3 : InForm アプリケーションサーバの AuthenticationFilter レジストリキーの DomainSuffix エントリの更新 - オプション**」(59ページ)を参照してください。

Reporting を使用している場合は、Cognos ゲートウェイサーバの DomainSuffix エントリも更新する必要があります。詳細については、「**ステップ 4 : Cognos ゲートウェイサーバの AuthenticationFilter レジストリキーの DomainSuffix エントリの更新 - パブリックゲートウェイのみ**」(92ページ)を参照してください。

- 4 SSL を有効化します (オプション)。

詳細については、「**セキュアソケットレイヤー (SSL) の有効化について**」(110ページ)を参照してください。

- 5 インストール結果を検証します。

詳細については、「**インストール結果の検証**」(62ページ)を参照してください。

## ステップ 1 : InForm アプリケーションサーバの Oracle データベースクライアントの検証

開始する前に、「**Oracle データベースクライアントのインストールと設定**」(41ページ)の指示のとおり InForm アプリケーションサーバの次の要件が満たされていることを確認します。

- Oracle データベースクライアントがインストールされている。
- 言語レジストリ設定が更新されている。
- データベース接続が設定および検証されている。

## ステップ 2 : InForm アプリケーションサーバへの InForm コアソフトウェアのインストール

InForm アプリケーションサーバにのみ、InForm コアソフトウェアをインストールします。

- 1 Oracle Download Center から InForm ソフトウェアをダウンロードして抽出します。
- 2 ダウンロードしたイメージのインストールファイルが格納されている場所に移動し、**setup.exe** をダブルクリックします。

〔設定言語の選択〕 ページが表示されます。

- 3 インストール時にウィザードで使用する言語として、[英語] または [日本語] を選択します。

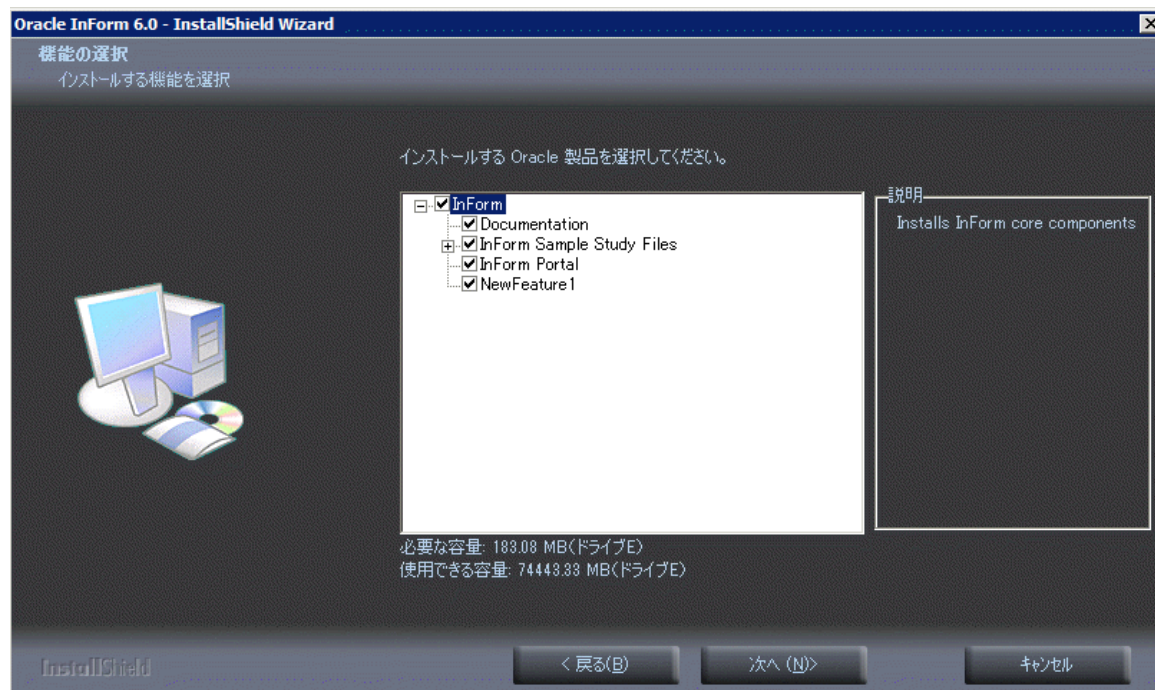
**注：** アプリケーション ページで使用する言語は、インストールの後に設定します。

- 4 [次へ] をクリックします。  
〔セットアップの準備〕 の進捗ページが表示されます。セットアップが完了したら、  
[ようこそ] ページが表示されます。
- 5 [次へ] をクリックします。  
〔ユーザ情報〕 ページが表示されます。
- 6 [ユーザ名] と [会社名] を入力します。
- 7 [次へ] をクリックします。  
〔インストール先の選択〕 ウィンドウが表示されます。
- 8 デフォルトのロケーションを受け入れるか、[変更] をクリックして、ロケーション  
を選択します。
- 9 [次へ] をクリックします。  
〔セットアップタイプ〕 ページが表示されます。
- 10 次のオプションのいずれかを選択し、[次へ] をクリックします。
  - 完全 - アプリケーション のすべてのコンポーネントをインストールします  
(デフォルト)
  - 最小 - 必要な アプリケーション コンポーネントと MedML インストーラ  
ユーティリティ のみをインストールします。InForm Portal およびサンプル  
スタディ、その他ユーティリティはインストールされません。
  - カスタム - インストールするコンポーネントを選択できます。



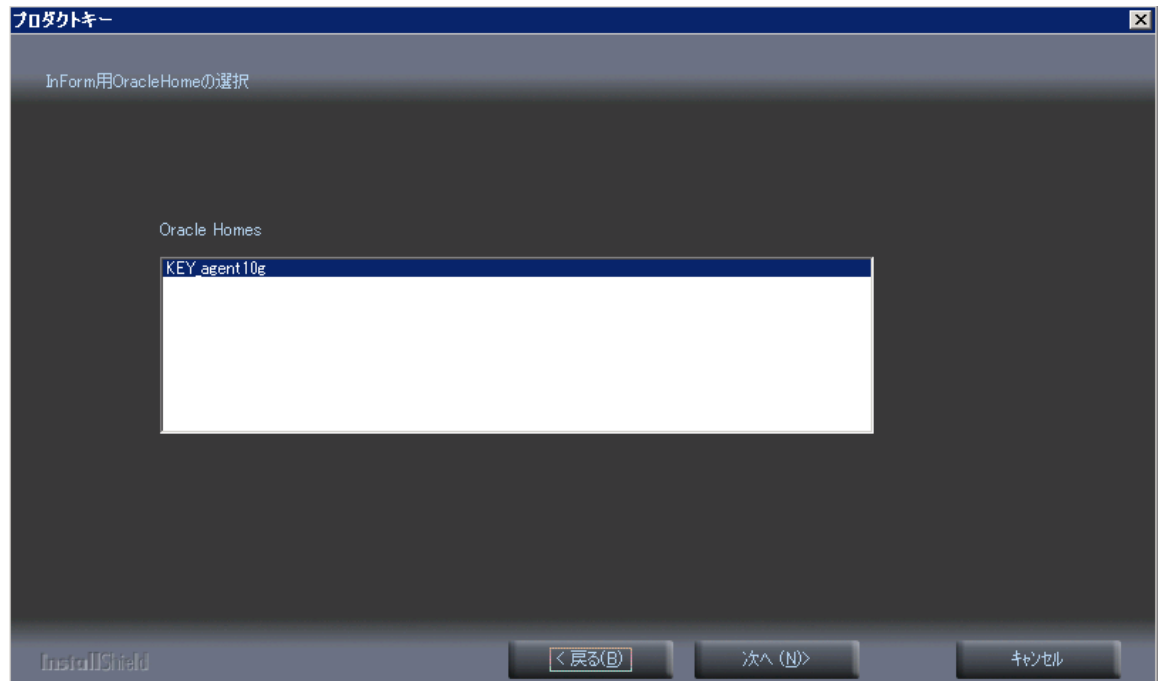
「完全」または「最小」を選択した場合は、「プロダクトロケール」ページが表示されます。

「カスタム」を選択した場合は、「機能の選択」ページが表示されます。オプションを選択し、「次へ」をクリックします。



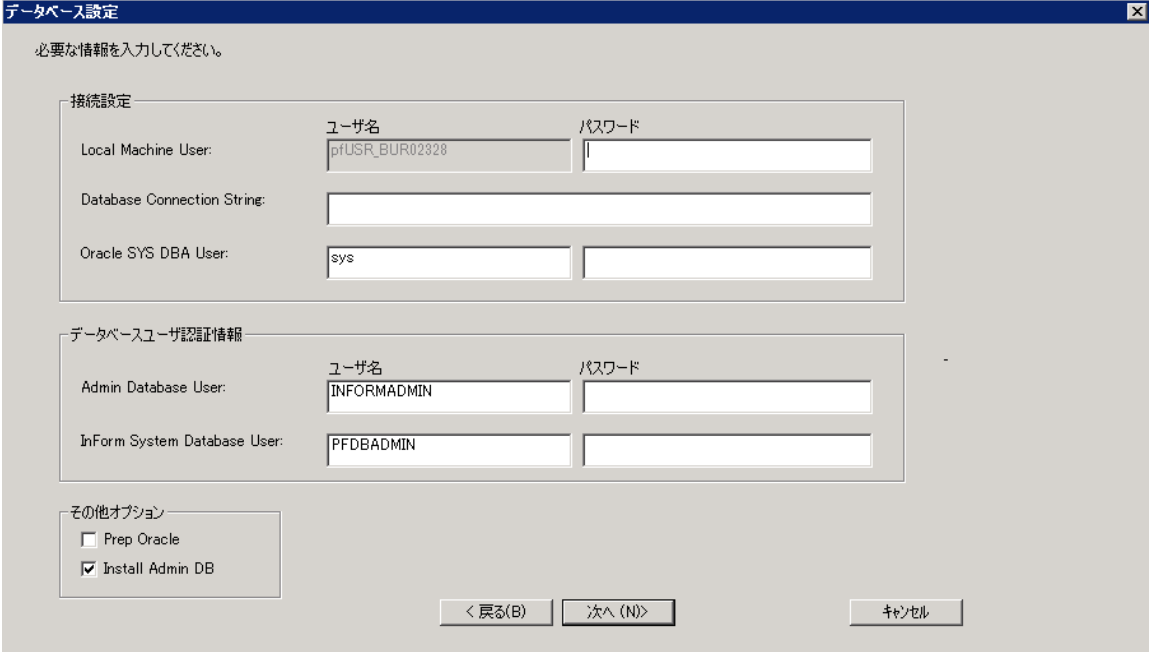
- 11 インストールの初期プロダクトロケールに「英語」または「日本語」を選択します。  
これにより、インストール後、InForm アプリケーションページに表示される言語が決まります。
- 12 「次へ」をクリックします。  
「認証スキームの選択」ページが表示されます。
- 13 「ネイティブ認証」を選択します。
- 14 「次へ」をクリックします。

InForm 用の Oracle Home の選択ページが表示されます。Oracle のインストール中に設定した Oracle Home は Windows のレジストリキーを示す **KEY\_** という接頭辞が付いたページに表示されます。



- 15 クライアント Oracle Home のレジストリキーの入力を選択します。
- 16 「次へ」をクリックします。  
[データベース設定] ページが表示されます。

**注：**このページのデフォルトは、**Oracle** データベースを構成すると設定されます。インストールに必要な値は異なる場合があります。実稼動サーバへのインストール時、**Oracle** ではこのウィザードの実行後に **pfdbadmin** のパスワードを変更することをお勧めします。パスワード選択のガイドラインについては、『**Secure Configuration Guide**』を参照してください。



データベース設定

必要な情報を入力してください。

**接続設定**

Local Machine User: ユーザ名: pfUSR\_BUR02328 パスワード:

Database Connection String:

Oracle SYS DBA User: sys

**データベースユーザ認証情報**

Admin Database User: ユーザ名: INFORMADMIN パスワード:

InForm System Database User: PFDBADMIN

**その他オプション**

☐ Prep Oracle

☒ Install Admin DB

< 戻る(B)    次へ (N) >    キャンセル

- 17 設定フィールドに値を入力するか、デフォルト値をそのまま使用し、[次へ] をクリックします。

いずれかの情報が不正確な場合（たとえば、データベース接続文字列や InForm ユーザ名の内容が誤っている場合など）は、データベース設定エラーウィンドウが表示されます。詳細については、「**Oracle MTS 設定が無効**」（170ページ）を参照してください。

フィールド	説明
ローカルマシンユーザ	ローカルマシンユーザの名前。デフォルトは pfUSR_<machinename> です。
ローカルマシンユーザのパスワード	ローカルマシンユーザのパスワード。 <b>注：</b> ローカルマシンユーザのパスワードは、ドメインのパスワードポリシーで定義されたパスワード要件に従う必要があります。
Database Connection String:	InForm サーバでスタディの Oracle インスタンスに接続するために使用される文字列。
Oracle SYS DBA ユーザ	Oracle SYS アカунトの名前。この値は pfdbadmin アカунトを作成するために [Prep Oracle] チェックボックスを選択した場合にのみ使用されます。
Oracle SYS DBA パスワード	Oracle SYS アカунトのパスワード。デフォルトは <b>oracle</b> です。この値は pfdbadmin アカунトを作成するために [Prep Oracle] チェックボックスを選択した場合にのみ使用されます。

フィールド	説明
AdAdmin Database Username:	管理データベースにアクセスするために必要なユーザ名。デフォルトは <b>informadmin</b> です。Oracle は、複数階層サーバへのインストールでは情報アカウントのユーザ ID にサーバ名を含めることをお勧めします。
Admin Database Password:	管理データベースにアクセスするために必要なパスワード。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。パスワードには、ハイフン (-) を使用しないでください。
InForm System Username:	スタディデータベースのユーザ名。デフォルトは <b>pfdbadmin</b> です。InForm の新規インストール時、またはインストール中にデフォルトのユーザ名を変更した場合には、 <b>[Prep Oracle]</b> チェックボックスを選択してください。これにより、InForm ソフトウェア のインストール時に指定したユーザ名とパスワードで InForm アカウントを作成します。
InForm System Password:	スタディデータベースのパスワード。パスワードでは大文字と小文字が区別されます。パスワードには、ハイフン (-) を使用しないでください。  <b>注：</b> Oracle では InForm ソフトウェア をインストールした後に InForm システムパスワードを変更することをお勧めします。詳細については、『 <i>Secure Configuration Guide</i> 』を参照してください。
Install Admin DB	選択した場合、次のものが作成されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>informadmin ユーザ、管理データベースのユーザ名とパスワードを使用。</li> <li>ユーザ、施設、設定情報など、スタディデータ以外の InForm 管理データベース。</li> </ul> <b>注：</b> インストールおよびアップグレードの両方の場合にこのチェックボックスをオンにする必要があります。

フィールド	説明
Prep Oracle	<ul style="list-style-type: none"> <li>選択した場合： <ul style="list-style-type: none"> <li><b>informprepora.vbs</b> スクリプトを実行します。このスクリプトは、InForm システムのユーザ名と InForm システムのパスワードを使用して、スタディデータベースユーザを作成します。</li> <li><b>mtsora102.vbs</b> スクリプトを実行します。このスクリプトは、Oracle XA トランザクションサポートをセットアップし、MTS タイムアウトを最低 300 秒に設定します。</li> </ul> </li> <li>選択しなかった場合： <ul style="list-style-type: none"> <li>スタディのデータベースユーザとパスワードを確認します。</li> </ul> </li> </ul> <p><b>注：</b> インスタンスに初めて InForm ソフトウェア をインストールする場合にのみ、<b>[Prep Oracle]</b> チェックボックスをオンにする必要があります。</p>

- 18 [データベース設定エラー] ウィンドウが表示されたら、[戻る] をクリックし、[データベース設定] ページに戻って間違った情報を修正します。修正が完了したら、[次へ] をクリックします。  
[プログラムのインストール準備完了] ページが開きます。  
インストールは .NET framework と ODAC の両方をチェックし、アップグレードバージョンが必要な場合にはメッセージを表示します。
- 19 .NET framework または ODAC をアップグレードする必要がある場合は、[キャンセル] をクリックして必要な変更を行い、[セットアップの終了] ダイアログボックスが表示されたら [はい] をクリックします。
- 20 前の手順でインストールを終了した場合は、.NET Framework または ODAC のバージョンをアップグレードし、インストールウィザードを再起動します。
- 21 [インストール] をクリックします。  
[セットアップステータス] ページが表示されます。インストールの進行状況が画面に表示されます。
- 22 必要なハードウェアまたはソフトウェアコンポーネントがシステムにない場合、[Requirements Not Met] と表示されます。[Cancel] をクリックして必要な修正を行い、[セットアップの終了] ダイアログボックスが表示されたときには、[はい] をクリックします。
- 23 前の手順でインストールを終了した場合は、必要なハードウェアまたはソフトウェアのコンポーネントに応じてサーバを更新し、インストールウィザードを再起動します。
- 24 セットアップが終了したら、[Oracle InForm 6.0 Reboot] ページが表示されます。
- 25 次のいずれかが当てはまる場合は、システムを再起動する必要があります。
  - インストールプロセスで ODAC をアップグレードした

- PATH 環境変数を変更した
- インストール時にロックされたファイルへのアクセスを試みた

26 [はい] または [いいえ] を選択して、今すぐ再起動するかどうかを指定し、[完了] をクリックします。

再起動後、最終設定プロセスを続行します。

システムの設定が終了すると、[InstallShield Wizard の完了] ページが表示されます。

27 [完了] をクリックします。

## ステップ 3 : InForm アプリケーションサーバの AuthenticationFilter レジストリキーの DomainSuffix エントリの更新 - オプション

Cognos レポーティングをインストールする際に、InForm アプリケーションサーバで、次のいずれかが当てはまる場合、Oracle の AuthenticationFilter レジストリキーの DomainSuffix エントリを更新する必要があります。

- Cognos ゲートウェイサーバと InForm アプリケーションサーバにプロキシサーバを使用している。
- いずれかのサーバの完全修飾ドメイン名 (FQDN) の末尾が共通ドメインサフィックスではない。

InForm アプリケーションサーバと Cognos ゲートウェイサーバのインストール中に、FQDN が Oracle AuthenticationFilter DomainSuffix エントリに登録された。両方のインストールの FQDN の末尾が共通ドメインサフィックス (**.net**、**.com**、**.org**、**.edu**、**.gov** など。 **.uk** や **.au** などの国名は付いていてもいなくてもよい) であれば、プロキシサーバを使用しない限り、レジストリキーを更新する必要はありません。

- FQDN が 2 つのレベルのみで構成されている (例: <servername>.com)。

**注：** Cognos ゲートウェイサーバの DomainSuffix エントリも更新する必要があります。詳細については、「**ステップ 4 : Cognos ゲートウェイサーバの AuthenticationFilter レジストリキーの DomainSuffix エントリの更新 - パブリックゲートウェイのみ**」(92ページ)を参照してください。

Cognos ゲートウェイサーバと InForm アプリケーションサーバの両方で DomainSuffix 設定を実行します。いずれのマシンでも DomainSuffix に対して同一の AuthenticationFilter エントリが必要です。

- 1 [Windows レジストリ エディタ] で、次の Windows Registry キーに移動します。

HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE\HS\AuthenticationFilter

- 2 **DomainSuffix:** のエントリを更新します。

- a エントリを右クリックして、[修正] を選択します。

[文字列の編集] ダイアログボックスが表示されます。

- b [値のデータ] フィールドに新しい値を入力し、次のエントリを編集します。

- プロキシサーバを使用しているか、どちらかのサーバの完全修飾ドメイン名の末尾が共通ドメインサフィックスではない場合、2 つのコンピュータ間で異なるドメインサフィックス部分をすべて削除します。たとえば、FQDN に「<servername>.<companyname>.co.uk」が含まれる場合、編集後のエントリは「<companyname>.co.uk」になります。
- InForm ソフトウェア と Cognos 8・BI が同一マシン上にインストールされていて、FQDN に <servername>.com のように 2 つのノードしかない場合はエントリにサーバ名とドメインサフィックスを含める必要があります。上の

例では、エントリは `<servername>.co.uk` になります。

- c [OK] をクリックします。
- 3 [Windows レジストリ エディタ] を終了します。
- 4 IIS を再起動します。
- 5 InForm アプリケーションサーバで InForm サービスを再起動します。



## ステップ 4 : InForm アプリケーションサーバの **SSL** の有効化 - オプション

SSL の有効化はオプションです。詳細については、「**セキュアソケットレイヤー (SSL) の有効化について**」(110ページ) を参照してください。

## インストール結果の検証

インストール結果を検証することにより、スタディが正常にインストールされたことを確認します。検証プロセスは、InForm アプリケーションの基本機能を実行する管理およびスタディ関連の一連のテストで構成されます。テストは、管理テストと CRC/CRA テストに分かれています。

### 検証のための必要条件

- InForm ソフトウェアがインストールされている。詳細については、「**ステップ 2: InForm アプリケーションサーバへの InForm コアソフトウェアのインストール**」(52ページ)を参照してください。
- サンプルスタディ PFST60 がインストールされ、サーバとスタディが実行中である。詳細については、「**スタディとレポート設定ガイド**」を参照してください。
- **pfadmin setserver** コマンドを使用して、**システムユーザ**を有効にし、パスワードを割り当ててある。詳細については、「**pfadmin**」(149ページ)を参照してください。

注：次の例では、システムユーザのパスワードとして **manager** が使用されています。

- **dobrien** ユーザと **lhill** ユーザのパスワードがに変更されている。詳細については、「**サンプルスタディユーザのパスワードの変更**」(62ページ)を参照してください。

注：次の例では、**dobrien** および **lhill** のパスワードとして **InForm** が使用されています。

### サンプルスタディユーザのパスワードの変更

- 1 **system/manager** として PFST60 スタディにログインします。
- 2 [管理] をクリックします。
- 3 **dobrien** ユーザと **lhill** ユーザの場合：
  - a ユーザの [アカウント名] をクリックします。
  - b [ユーザ] ページで、[ユーザアクティブ] チェックボックスをオフにします。
  - c [サブミット] をクリックし、メッセージボックスの **[OK]** をクリックします。
  - d [パスワードの変更] をクリックします。
  - e [パスワードの変更] ページで、[新しいパスワード] フィールドおよび [新しいパスワードの確認] フィールドに「**InForm**」と入力します。
  - f [サブミット] をクリックし、メッセージボックスの **[OK]** をクリックします。
  - g [戻る] をクリックします。
  - h [ユーザ] ページの基本情報で、[ユーザアクティブ] チェックボックスをオンにします。

- i [サブミット] をクリックし、メッセージボックスの **[OK]** をクリックします。
- 4 ログアウトします。

## Admin-ユーザテスト

合格／ 不合格	手順	説明
	1	<b>system/manager</b> としてログインします。
	2	[管理] をクリックします。
	3	次の設定をそれぞれ選択します。[ユーザ]、[権限]、 [グループ]、[施設]、[設定]、[イベント]、[ルール]、 [システム]。
	4	[ユーザ] をクリックして、次のユーザが登録されていることを 確認します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• lhill</li> <li>• dobrien</li> <li>• mcarlson</li> </ul>
	5	[ユーザ] ページで [ユーザの追加] をクリックします。
	6	[ユーザ名] フィールドに X を入力します。 <p>[ユーザは次回ログオン時にパスワードを変える必要があります] フィールドで、[いいえ] を選択します。</p> <p>[プロダクトロケール] および [優先するスタディロケール] フィールドで値を選択します。</p> <p>[サブミット] をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p>
	7	[戻る] をクリックします。 ユーザ X がリストに表示されていることを確認します。
	8	[アカウント名] をクリックし、ユーザ X の [グループ] タブ をクリックします。 <p>1 つの権限グループと 2 つのユーザ関連施設を割り当てます。</p> <p>[サブミット] をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p>
	9	[戻る] をクリックします。 ユーザ X の任意のリンクをクリックします。

合格／ 不合格	手順	説明
	10	<p>[パスワードの変更] をクリックします。</p> <p>ユーザ X に 6 文字以上のパスワードを割り当てます。</p> <p>[サブミット] をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p>
	11	<p>[戻る] をクリックします。</p> <p>[ユーザアクティブ] を選択します。</p> <p>[サブミット] をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p> <p>ログアウトします。</p>
	12	<p>手順 10 で割り当てたパスワードを使用して、ユーザ X としてログオンします。</p> <p>[症例] をクリックします。</p> <p>[施設] ドロップダウンリストに、手順 8 で選択した施設のみが含まれていることを確認します。</p>
	13	ログアウトします。

## Admin-権限テスト

合格／不合格	手順	説明
	1	<b>system/manager</b> としてログインします。
	2	<p>[権限] を選択します。</p> <p>[権限グループの追加] をクリックします。</p>
	3	<p>新しい権限グループの情報を入力します。</p> <p>[サブミット] をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p>
	4	<p>[戻る] をクリックします。</p> <p>作成した権限グループがリストに表示されていることを確認します。</p>

## Admin-施設テスト

合格／不合格	手順	説明
	1	<p>〔施設〕を選択します。</p> <p>〔施設の追加〕をクリックします。</p> <p>新しい施設情報を入力します。〔施設名〕、〔施設の略名〕、および〔スタディオケール〕フィールドが必要です。</p> <p>〔サブミット〕をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p>
	2	<p>〔戻る〕をクリックします。</p> <p>作成した施設がリストに表示されていることを確認します。</p>

## Admin-グループテスト

合格/不合格	手順	説明
	1	<p>〔グループ〕を選択します。</p> <p>〔新しいグループの追加〕をクリックします。</p> <p>〔グループタイプ〕ドロップダウンリストから <b>[署名]</b> を選択して、グループ情報を入力します。</p> <p>〔サブミット〕をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p>
	2	<p>ユーザ X のリンク (〔プロパティ〕以外) をクリックし、〔ユーザアクティブ〕を選択します。</p> <p>作成した署名グループがリストに表示されていることを確認します。</p>
	3	<p>〔新しいグループの追加〕をクリックします。</p> <p>〔グループタイプ〕ドロップダウンリストから <b>[クエリ]</b> を選択して、グループ情報を入力します。</p> <p>〔サブミット〕をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p>
	4	<p>ユーザ X のリンク (〔プロパティ〕以外) をクリックし、〔ユーザアクティブ〕を選択します。</p> <p>作成したクエリグループがリストに表示されていることを確認します。</p>

## Admin-ユーザおよびグループテスト

合格／不合格	手順	説明
	1	<p>「グループ」を選択します。</p> <p>Admin-グループテストセクションで作成された署名グループの「メンバー」カラムで、「変更」をクリックします。</p> <p>詳細については、「Admin-グループテスト」（65ページ）を参照してください。</p>
	2	<p>「登録できるメンバ」リストでユーザ X を選択します。</p> <p>「追加」をクリックします。</p>
	3	<p>「登録済メンバ」（署名グループ）リストにユーザ X が含まれていることを確認します。</p> <p>「サブミット」をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p>
	4	<p>「戻る」をクリックします。</p> <p>署名グループの「メンバー数」カラムが 0 ではなく 1 になっていることを確認します。</p>
	5	<p>Admin-グループテストセクションで作成されたクエリグループの「メンバー」カラムで、「変更」をクリックします。</p> <p>詳細については、「Admin-グループテスト」（65ページ）を参照してください。</p>
	6	<p>「登録できるメンバ」リストでユーザ X を選択します。</p> <p>「追加」をクリックします。</p>
	7	<p>「登録済メンバ」（クエリグループ）リストにユーザ X が含まれていることを確認します。</p> <p>「サブミット」をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p>
	8	<p>「戻る」をクリックします。</p> <p>クエリグループの「メンバー数」カラムが 0 ではなく 1 になっていることを確認します。</p>
	9	ログアウトします。

## CRC/CRA のテスト

- 1 次の URL を使用して、2 つのブラウザウィンドウを開きます。  
[http://machine\\_name/pfst60](http://machine_name/pfst60)
- 2 一方のセッションに **dobrien** (CRC) としてログインし、もう一方に **lhill** (CRA) としてログオンします。
- 3 CRC/CRA テストを実行します。

### dobrien として (CRC)

合格/不合格	手順	説明
	1	<p><b>[症例登録]</b> をクリックします。</p> <p><b>[症例候補の追加]</b> をクリックします。質問ウィンドウが表示されます。</p>
	2	<p>症例情報を入力します。</p> <p><b>[サブミット]</b> をクリックします。</p>
	3	<p>入力した症例の <b>[スクリーニング番号]</b> をクリックします。</p> <p>いずれかのフィールドを編集し、変更理由を入力します。</p> <p><b>[サブミット]</b> をクリックし、編集したフィールドが変更されていることを確認します。</p>
	4	<p>ユーザ X のリンク (<b>[プロパティ]</b> 以外) をクリックし、<b>[ユーザアクティブ]</b> を選択します。</p>
	5	<p><b>[登録済]</b> 列で、<b>[登録]</b> リンクをクリックします。</p>
	6	<p>症例番号を入力します (施設 ID にハイフンと 3 桁の数字が続きます)。</p> <p><b>[サブミット]</b> をクリックします。</p> <p><b>[症例登録]</b> ページに、<b>[症例はすべての登録基準をみたしています]</b> という見出しが表示されます。</p>
	7	<p>ページの下 <b>[登録]</b> をクリックします。</p> <p>症例の <b>[スケジュール]</b> (ビジットカルキュレーター) ページが表示されます。このページでは、現在の日付がデフォルトのベースライン日付として示されています。</p>
	8	<p><b>[開始日]</b> を変更します。</p> <p>関連する日付が適切に更新されていることを確認します。</p>
	9	<p><b>[最初のビジットへ移動]</b> をクリックします。</p>


合格/不合格	手順	説明
	10	<p>[DOV] フォームを完成させます。</p> <p><b>[OK]</b> をクリックします。</p> <p>最初のビジットのフォームリストが表示されます。</p> <p>最初のビジットの各フォームに移動します。</p>
	11	<p>ビジットルーラの左端にある治験の矢印をクリックします。</p> <p>[イベントスケジュール] を表示して、新しい症例のすべてのビジットを確認します。</p>
	12	<p>ベースビジットのステータスアイコンをクリックします。</p> <p>症例背景フォームのステータスアイコンをクリックします。</p> <p>フォームにデータを入力し、[サブミット] をクリックします。</p>
	13	<p>ユーザ X のリンク ([プロパティ] 以外) をクリックし、[ユーザアクティブ] を選択します。</p> <p>バイタルサインフォームのステータスアイコンをクリックします。</p> <p>[体温] アイテムの値として華氏 200.5 度を入力します。</p> <p>[サブミット] をクリックし、自動クエリが生成されていることを確認します。(質問の背景がピンクになり、エラーメッセージが赤で表示されます)。</p>
	14	<p>アイテムの右側のカラムのコメントアイコンをクリックし、[コメント] フィールドにコメントを追加します。</p> <p>[サブミット] をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p>
	15	<p>ユーザ X のリンク ([プロパティ] 以外) をクリックし、[ユーザアクティブ] を選択します。</p> <p>クエリテキストをクリックします。</p> <p>[クエリ] 詳細ページで、[データを更新してクエリに回答] をクリックします。</p> <p>体温の値を 98.6 に変更し、変更理由を追加します。</p> <p>[サブミット] をクリックし、メッセージボックスの <b>[OK]</b> をクリックします。</p>
	16	<p>自動クエリに回答されたことを確認します (質問の背景がピンクから灰色に変わります)。</p>





合格/不合格	手順	説明
	17	データがあるフォームのステータスアイコンをクリックします。  [操作の選択] リストから <b>[SDV 実施可とする]</b> を選択して、 <b>[実行]</b> をクリックします。
	18	症例背景フォームのステータスアイコンをクリックします。  [操作の選択] リストから <b>[プレビュー]</b> を選択して、 <b>[実行]</b> をクリックします。フォームのプレビューが表示されることを確認します。  <b>[印刷]</b> をクリックします。
	19	正しい情報が記されたレポートが印刷されたことを確認します。
	20	<b>[ヘルプ]</b> アイコンをクリックし、 <b>[InForm とレポーティング]</b> を選択します。  『InForm ユーザガイド』がインストールされ、機能していることを確認します。

## dobrien (CRC) および Ihill (CRA) として

**注：**次に示す一連の手順をより簡単に実行するには、ブラウザを **2** つ開いて操作してください。

合格/不合格	手順	説明
	1	<p><b>Ihill</b> として：</p> <p>[症例] をクリックします。</p> <p>[症例] カラムで、CRC テストで dobrien が作成した症例のリンクをクリックします。</p> <p>ベースビジットのステータスアイコンをクリックします。フォームリストが表示されます。</p> <p>症例背景フォームのステータスアイコンをクリックします。</p> <p>dobrien で入力した項目にオープンクエリを作成します。</p> <p>項目に対するクエリアイコン () をクリックし、[クエリの作成] をクリックします。[対応] リストから <b>[オープンステータスでクエリを作成]</b> を選択し、理由を選択します。</p> <p>[サブミット] をクリックし、アイテムの下のピンクのボックスにクエリテキストが赤で表示されていることを確認します。</p>

合格／不合格	手順	説明
	2	<p><b>dobrien</b> として：</p> <p>[症例] をクリックします。</p> <p>[症例] カラムで、CRC テストで dobrien が作成した症例のリンクをクリックします。</p> <p>症例背景フォームのステータスアイコンをクリックします。</p> <p>クエリに回答します。</p> <p>クエリアイコンまたは赤字のクエリテキストをクリックしてください。</p> <p>[現在の値] セクションで [クエリに回答] をクリックします。</p> <p>[クエリ] セクションに、クエリの回答を入力します。</p> <p>[サブミット] をクリックして、クエリがフォームに表示されていないことを確認します。</p>
	3	<p><b>lhill</b> として：</p> <p>症例背景フォームをリフレッシュ：[CRF 履歴] アイコン () をクリックし、症例背景フォームを選択します。</p> <p>回答済のクエリを再発行します。</p> <p>クエリアイコンをクリックし、[現在の値] セクションで [オープンステータスでクエリを再発行] をクリックします。</p> <p>[クエリ] セクションで、理由を選択します。</p> <p>[サブミット] をクリックしてクエリが再表示されることを確認します。</p>
	4	<p><b>dobrien</b> として：</p> <p>症例背景フォームをリフレッシュ：[CRF 履歴] アイコン () をクリックし、症例背景フォームを選択します。</p> <p>クエリに再度回答します。</p> <p>[サブミット] をクリックして、クエリがフォームに表示されていないことを確認します。</p>

合格／不合格	手順	説明
	5	<p><b>ihill</b> として :</p> <p>症例背景フォームをリフレッシュ : <b>[CRF 履歴]</b> アイコン () をクリックし、症例背景フォームを選択します。</p> <p>クエリを閉じます。</p> <p>クエリアイコンをクリックし、<b>[現在の値]</b> セクションで <b>[クエリをクローズ]</b> をクリックします。</p> <p><b>[クエリ]</b> セクションで、理由を選択します。</p> <p><b>[サブミット]</b> をクリックして、クエリがフォームに表示されていないことを確認します。</p>
	6	両方のブラウザセッションからログアウトします。



## 第 6 章

# Reporting アプリケーションサーバの 準備

### この章の内容

Reporting アプリケーションサーバの準備について .....	74
Oracle ディレクトリサーバの準備 .....	75
Cognos Content Manager サーバの準備 .....	78
Cognos Report サーバの準備 .....	83
Cognos ゲートウェイサーバの準備 .....	86
Reporting アプリケーションサーバの一般的な手順 .....	94

## Reporting アプリケーションサーバの準備について

InForm アプリケーションでレポーティングサーバを使用するには、特定の一連の手順を実行する必要があります。手順には、すべてのサーバで同じものもあれば、特定のサーバタイプに固有のものもあります。

- Oracle ディレクトリサーバ

詳細については、「**Oracle ディレクトリサーバの準備の手順**」(75ページ)を参照してください。

- Cognos Content Manager サーバ

詳細については、「**Cognos Content Manager サーバの準備の手順**」(78ページ)を参照してください。

- Cognos Report サーバ

詳細については、「**Cognos Report サーバの準備の手順**」(83ページ)を参照してください。

- Cognos ゲートウェイサーバ

詳細については、「**Cognos ゲートウェイサーバの準備の手順**」(86ページ)を参照してください。

# Oracle ディレクトリサーバの準備

## Oracle ディレクトリサーバの準備の手順

Oracle ディレクトリサーバ は、Reporting を使用する場合にのみ必要となります。

Oracle ディレクトリサーバを準備するには、次の手順を実行します。

- 1 Oracle ディレクトリサーバをインストールします。

詳細については、「**ステップ 1: Oracle ディレクトリサーバのインストール**」(75ページ) を参照してください。

- 2 Oracle ディレクトリサーバに ORACLEHS ネームスペースと crnsysadmin ユーザを作成します。

詳細については、「**ステップ 2: Oracle ディレクトリサーバ での ORACLEHS 組織管理単位 (OU) および crnsysadmin ユーザの作成**」(76ページ) を参照してください。

**注：** Cognos Content Manager サーバにも、ORACLEHS ネームスペースと crnsysadmin ユーザを作成する必要があります。詳細については、「**ORACLEHS LDAP ネームスペースの作成**」(107ページ) を参照してください。

## ステップ 1: Oracle ディレクトリサーバのインストール

- 1 Oracle ディレクトリサーバをダウンロードしてインストールします。
- 2 Oracle ディレクトリサーバを設定し、サポートされている Web サーバに展開します。

詳細については、Oracle Web サイト、Oracle Directory Server Enterprise Edition ドキュメント、またはお手元の Oracle データベースドキュメントを参照してください。

## ステップ 2 : Oracle ディレクトリサーバへの **ORACLEHS** 組織単位 (OU) と **crnsysadmin** ユーザの作成

Reporting を使用している場合は、Cognos Content Manager サーバと Cognos Report サーバにも **ORACLEHS** ネームスペースと **crnsysadmin** ユーザを作成する必要があります。詳細については、「**ORACLEHS LDAP ネームスペースの作成**」(107ページ)を参照してください。

- 1 Oracle ディレクトリサーバがインストールされているサーバで、Cognos Configuration ユーティリティを使用して Cognos 8 Business Intelligence サービスが停止していることを確認します。
- 2 Oracle ディレクトリサーバの URL を入力し、Oracle Directory Service Control Center にログインします。
- 3 [Directory Server] タブを選択します。[Directory Server] リストで、サーバ名をクリックします。  
[Server Operations] タブが開きます。
- 4 [Entry Management] タブを選択します。
- 5 [Browse Data] リストから DN を選択し、[New Entry] をクリックします。  
[New Entry] ウィザードページに、[Specify Entry Location] ページが表示されます。
- 6 [Entry Parent DN] に間違いがないことを確認し、ウィザードの次に進むボタンをクリックします。  
[Choose Object Class] ページが表示されます。
- 7 [Entry Type] のドロップダウンリストから [Organizational Unit - (organizationalUnit)] を選択し、ウィザードの次に進むボタンをクリックします。  
[Configure Attributes] ページが表示されます。
- 8 [Organizational Unit (ou)] フィールドに「**ORACLEHS**」(すべて大文字) と入力し、ウィザードの次に進むボタンをクリックします。  
[Summary] ページが表示されます。
- 9 情報を確認します。間違いがない場合は、ウィザードの完了ボタンをクリックします。  
[Browse Data] リストに **ORACLEHS** ノードが追加されます。
- 10 [Entry Management] タブで、[Browse Data] リストの「ou=**ORACLEHS**」を右クリックし、[New Entry] をクリックします。  
[New Entry] ウィザードに、[Specify Entry Location] ページが表示されます。
- 11 [Entry Parent DN] に間違いがないことを確認し、ウィザードの次に進むボタンをクリックします。  
[Choose Object Class] ページが表示されます。
- 12 [Entry Type] のドロップダウンリストから [User - (inetOrgPerson)] を選択し、ウィザードの次に進むボタンをクリックします。



[Configure Attributes] ページが表示されます。

13 ORACLEHS ネームスペースの新しいユーザを次のように作成します。

- **Full Name (cn)** — crnsysadmin
- **Last Name (sn)** — crnsysadmin
- **User ID (uid)** — crnsysadmin
- **Password (userPassword)** — *<crnsysadmin password>*
- **Confirm Password** — *<crnsysadmin password>*

14 ウィザードの次に進むボタンをクリックします。

[Summary] ページが表示されます。

15 情報を確認します。間違いがない場合は、ウィザードの完了ボタンをクリックします。

[Entry Management] タブの [Browse Data] リストに uid=crnsysadmin ノードが表示されます。

## Cognos Content Manager サーバの準備

### Cognos Content Manager サーバの準備の手順

Reporting を併用するすべての InForm のインストールで、Cognos Content Manager サーバが使用されます。

Cognos Content Manager サーバを準備するには、次の操作を実行します。

- 1 Oracle データベースクライアントを検証します。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**ステップ 1 : Cognos Content Manager サーバの Oracle データベースクライアントの検証**」(79ページ)を参照してください。

- 2 Cognos ソフトウェアと更新をインストールします。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**ステップ 2 : Cognos Content Manager サーバへの Cognos ソフトウェアと更新のインストール**」(79ページ)を参照してください。

- 3 JRE をセットアップします。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**ステップ 3 : Cognos Content Manager サーバの JRE のセットアップ**」(80ページ)を参照してください。

- 4 Oracle JDBC ドライバをセットアップします。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**Oracle JDBC ドライバのセットアップ**」(80ページ)を参照してください。

- 5 CRNConfig インストーラを実行します。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**ステップ 5 : Cognos Content Manager サーバでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig¥setup.exe) の実行**」(80ページ)を参照してください。

- 6 Cognos Content Manager サーバに ORACLEHS LDAP ネームスペースを作成します。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**ステップ 6 : Cognos Content Manager サーバでの ORACLEHS LDAP ネームスペースの作成**」(80ページ)を参照してください。

- 7 MotioCAP を設定します (オプション)。

この手順は Cognos Content Manager サーバでのみ実行します。

詳細については、「**ステップ 7: MotioCAP\_informcap.properties ファイルの変更または新規作成 - オプション**」(81ページ)を参照してください。

- 8 Congos 電子メール設定をカスタマイズします。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**ステップ 8: Cognos Content Manager サーバの Cognos 8 BI のカスタマイズ**」(82ページ)を参照してください。

- 9 SSL を有効化します (オプション)。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**ステップ 9: Cognos Content Manager サーバでの SSL の有効化 - オプション**」(82ページ)を参照してください。

## ステップ 1: アプリケーションサーバの Oracle データベースクライアントの検証

開始する前に、「**Oracle データベースクライアントのインストールと設定の手順**」

(42ページ)の指示のとおり Cognos Content Manager サーバの次の要件が満たされていることを確認します。

- Oracle データベースクライアントがインストールされている。
- 言語レジストリ設定が更新されている。
- データベース接続が設定および検証されている。

注: この手順は Cognos Report サーバに対しても実行します。

## ステップ 2: ステップ 2: Cognos Content Manager サーバへの Cognos ソフトウェアと更新のインストール

Cognos Content Manager サーバへの Cognos ソフトウェアと更新をインストールには、次の手順を実行する必要があります。

- Cognos コアソフトウェアをインストールします。
- Fix Pack をアップグレードします。
- ホットサイト更新をインストールします。

この手順は Cognos Report サーバおよび Cognos ゲートウェイサーバに対しても実行します。

詳細については、「**Cognos ソフトウェアおよび更新 — Cognos Content Manager/Cognos Report サーバ/Cognos ゲートウェイサーバ**」(94ページ)を参照してください。

## ステップ 3 : ステップ 3 : Cognos Content Manager サーバの JRE のセットアップ

Cognos ソフトウェアを実行した際に必要な Java コンポーネントを検出できるようにするには、Cognos Content Manager サーバに JAVA\_HOME 環境変数を設定する必要があります。

この手順は Cognos Report サーバおよび Cognos ゲートウェイサーバに対しても実行します。

詳細については、「*JAVA\_HOME 環境変数への JRE の追加*」(98ページ)を参照してください。

## ステップ 4 : Oracle JDBC ドライバのセットアップ

Cognos Customization for InForm ウィザードを実行する前に、Content Manager Server サーバに Oracle JDBC ドライバを設定する必要があります。

- 1 Oracle サポートウェブサイトから ojdbc6.jar ファイルをダウンロードします。
- 2 **ojdbc6.jar** ファイルを <Cognos\_Installation\_Directory>\webapps\p2pd\WEB-INF\lib フォルダにコピーします。

## ステップ 5 : Cognos Content Manager サーバでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行

Cognos Customization ウィザードは、カスタマイズファイルをコピーし、Cognos 8・BI ソフトウェアを InForm アプリケーション用にカスタマイズするために必要なファイルを変更します。

この手順は Cognos Report サーバに対しても実行します。

詳細については、「*Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行 - Cognos Content Manager/Cognos Report サーバ*」(99ページ)を参照してください。

## ステップ 6 : Cognos Content Manager サーバでの ORACLEHS LDAP ネームスペースの作成

この手順は、Cognos Content Manager サーバに次のネームスペースを設定します。

- ORACLEHS

詳細については、「*ORACLEHS LDAP ネームスペースの作成*」(107ページ)を参照してください。

## ステップ 7 : MotioCAP\_informcap.properties ファイルの変更または新規作成 - オプション

Cognos Customization for InForm ウィザードは、**MotioCAP\_informcap.properties** ファイルを作成します。このファイル内の情報は、Oracle ディレクトリサーバ (LDAP) へのカスタム認証プロバイダの接続を設定するために必要です。

ほとんどの場合、MotioCAP\_informcap.properties ファイルを変更する必要はありません。次の表には、このファイルを変更する必要がある場合の例が示されています。

### ファイルの変更が必要な 必要なアクション 状況

インストール後に LDAP 管理 OU の認証に使用される LDAP プロパティを変更し構成が変化した場合。

- ldap.url - LDAP がインストールされているサーバの URL を入力します。必要に応じて、LDAP ポートの番号を変更します。

例 : ldap.url=ldap://appsru02.north.pf.com:389

- ldap.base.dn - 親ノード識別名を入力します。

例 : ldap.base.dn=dc=north,dc=pf,dc=com

- ldap.bind.username - 管理者識別名を入力します。これは、カスタムセキュリティプロバイダ (CSP) により LDAP へのログオンに使用されます。

例 : ldap.bind.username=uid=admin,ou=Administrators,ou=TopologyManagement,o=NetscapeRoot

- ldap.bind.password - **encrypted** を **unencrypted** に変更し、プレーンテキストでパスワードを設定します。このパスワードは、Cognos Reporting の起動時に暗号化されます。

例 : ldap.bind.password=unencrypted:password

新しいネームスペースが Cognos 8 Business Intelligence 構成の後に追加された。

次のとおり、各ネームスペースのファイルを複製して編集します。

**MotioCAP\_informcap.properties** ファイルをコピーし、元のファイルと同じディレクトリに保存します。新しいコピーに **MotioCAP\_<new\_namespace\_name>.properties** という名前を付け、必要に応じて次のプロパティを編集します。

- ldap.url
- ldap.base.dn
- ldap.bind.username
- ldap.bind.password

### ファイルの変更が必要な 必要なアクション 状況

インストール後にデータ プロパティを以下のように変更します。

ベースユーザやデータ  
ベースユーザパスワード  
が変わった。

- db.user

例 : **db.user=encrypted:<db\_username>**

- db.password

例 : **db.password=encrypted:<db\_user\_password>**

**encrypted** を **unencrypted** に変更し、プレーンテキストでパスワードを設定します。このパスワードは、Cognos Reporting の起動時に暗号化されます。

## ステップ 8 : Cognos Content Manager サーバの Cognos 8 BI 電子メール設定のカスタマイズ

Cognos 8 Business Intelligence のインストールでは、レポート出力通知へのリンクを電子メールで送信する機能が含まれています。通常は、電子メールが Cognos ゲートウェイサーバを指定するように設定します。しかし、ご利用の環境でスイッチへのアクセスに汎用 URL を必要とする F5 スイッチが使用されている場合、正しいアドレスを使用して SMTP サーバを設定する必要があります。

- 1 Cognos Configuration ユーティリティを使用して、SMTP メールサーバを設定します。  
詳細については、『*Cognos 8・BI (Report net の) インストールと設定の手引き*』を参照してください。
- 2 [ファイル] > [上書き保存] を選択します。  
Cognos Configuration ユーティリティにより設定が検証され、構成が保存されます。
- 3 検証チェックが完了したら（すべてのアイテムに緑色のチェックマークが付いたら）、[閉じる] をクリックします。
- 4 [閉じる] をクリックし、Cognos Configuration ユーティリティのウィンドウを閉じます。

## ステップ 9 : Cognos Content Manager サーバの SSL の有効化 - オプション

SSL の有効化はオプションです。詳細については、「**セキュアソケットレイヤー (SSL) の有効化について**」(110ページ) を参照してください。

# Cognos Report サーバの準備

## Cognos Report サーバの準備の手順

Reporting を併用するすべての InForm のインストールで、Cognos Report サーバが使用されます。

Cognos Report サーバの準備を行うには、次の操作を実行します。

- 1 Oracle データベースクライアントを検証します。  
この手順は複数のサーバで実行します。  
詳細については、「**ステップ 1: Cognos Report サーバの Oracle データベースクライアントの検証**」(84ページ)を参照してください。
- 2 Cognos ソフトウェアと更新をインストールします。  
この手順は複数のサーバで実行します。  
詳細については、「**ステップ 2: Cognos Report サーバへの Cognos ソフトウェアと更新のインストール**」(84ページ)を参照してください。
- 3 JRE をセットアップします。  
この手順は複数のサーバで実行します。  
詳細については、「**ステップ 3: Cognos Report サーバの JRE のセットアップ**」(84ページ)を参照してください。
- 4 JDBC ドライバをセットアップします。  
この手順は複数のサーバで実行します。  
詳細については、「**Oracle JDBC ドライバのセットアップ**」(85ページ)を参照してください。
- 5 CRNConfig インストーラを実行します。  
この手順は複数のサーバで実行します。  
詳細については、「**ステップ 5: Cognos Report サーバでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig¥setup.exe) の実行**」(85ページ)を参照してください。
- 6 SSL を有効化します (オプション)。  
この手順は複数のサーバで実行します。  
詳細については、「**ステップ 6: Cognos Report サーバでの SSL の有効化 - オプション**」(85ページ)を参照してください。

## ステップ 1 : Cognos Report サーバの Oracle データベースクライアントの検証

開始する前に、「**Oracle データベースクライアントのインストールと設定の手順**」(42ページ)の指示のとおり Cognos Report サーバの次の要件が満たされていることを確認します。

- Oracle データベースクライアントがインストールされている。
- 言語レジストリ設定が更新されている。
- データベース接続が設定および検証されている。

注： この手順は Cognos Content Manager サーバおよび Cognos ゲートウェイサーバに対しても実行します。

## ステップ 2 : Cognos Report サーバへの Cognos ソフトウェアと更新のインストール

Cognos Report サーバへの Cognos ソフトウェアと更新をインストールには、次の手順を実行する必要があります。

- Cognos コアソフトウェアをインストールします。
- Fix Pack をアップグレードします。
- ホットサイト更新をインストールします。

この手順は Cognos Content Manager サーバおよび Cognos ゲートウェイサーバに対しても実行します。

詳細については、「**Cognos ソフトウェアおよび更新 — Cognos Content Manager/Cognos Report サーバ/Cognos ゲートウェイサーバ**」(94ページ)を参照してください。

## ステップ 3 : Cognos Report サーバの JRE のセットアップ

Cognos ソフトウェアを実行した際に必要な Java コンポーネントを検出できるようにするには、Cognos Report サーバに JAVA\_HOME 環境変数を設定する必要があります。

この手順は Cognos Content Manager サーバおよび Cognos ゲートウェイサーバに対しても実行します。

詳細については、「**JAVA\_HOME 環境変数への JRE の追加**」(98ページ)を参照してください。



## ステップ 4 : Oracle JDBC ドライバのセットアップ

Cognos Customization for InForm ウィザードを実行する前に、Cognos Report サーバに Oracle JDBC ドライバを設定する必要があります。

- 1 Oracle サポートウェブサイトから ojdbc6.jar ファイルをダウンロードします。
- 2 ojdbc6.jar ファイルを <Cognos\_Installation\_Directory>\webapps\p2pd\WEB-INF\lib フォルダにコピーします。

## ステップ 5 : Cognos Report サーバでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行

Cognos Customization ウィザードは、カスタマイズファイルをコピーし、Cognos 8・BI ソフトウェアを InForm アプリケーション用にカスタマイズするために必要なファイルを変更します。

この手順は Cognos Content Manager サーバにも実行します。

詳細については、「*Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行 - Cognos Content Manager/Cognos Report サーバ*」(99ページ)を参照してください。

## ステップ 6 : Cognos Report サーバの SSL の有効化 - オプション

SSL の有効化はオプションです。詳細については、「*セキュアソケットレイヤー (SSL) の有効化について*」(110ページ)を参照してください。

## Cognos ゲートウェイサーバの準備

### Cognos ゲートウェイサーバの準備の手順

Reporting を併用するすべての InForm のインストールで、Cognos ゲートウェイサーバが使用されます。この必須手順は、別記されている場合を除き、プライベートゲートウェイでもパブリックゲートウェイでも同じです。

Cognos ゲートウェイサーバの準備を行うには、次の操作を実行します。

- 1 Cognos ソフトウェアと更新をインストールします。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**ステップ 1: Cognos ゲートウェイサーバへの Cognos ソフトウェアと更新のインストール**」(87ページ)を参照してください。

- 2 Cognos ゲートウェイサーバに JRE をセットアップします。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**ステップ 2: Cognos ゲートウェイサーバの JRE のセットアップ**」(87ページ)を参照してください。

- 3 Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig¥setup.exe) を実行します。

この手順は Cognos ゲートウェイサーバでのみ実行します。

詳細については、「**ステップ 3: Cognos ゲートウェイサーバでの Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig¥setup.exe) の実行**」(87ページ)を参照してください。

- 4 Cognos ゲートウェイサーバの AuthenticationFilter レジストリキーの DomainSuffix エントリを更新します (パブリックゲートウェイのみ)。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**ステップ 4: Cognos ゲートウェイサーバの AuthenticationFilter レジストリキーの DomainSuffix エントリの更新 - パブリックゲートウェイのみ**」(92ページ)を参照してください。

**注:** InForm アプリケーションサーバの DomainSuffix エントリも更新する必要があります。詳細については、「**ステップ 3: InForm アプリケーションサーバの AuthenticationFilter レジストリキーの DomainSuffix エントリの更新 - オプション**」(59ページ)を参照してください。

- 5 SSL を有効化します (オプション)。

この手順は複数のサーバで実行します。

詳細については、「**ステップ 5: Cognos ゲートウェイサーバでの SSL の有効化 - オプション**」(93ページ)を参照してください。

## ステップ 1 : Cognos ゲートウェイサーバへの Cognos ソフトウェアと更新のインストール

Cognos ゲートウェイサーバへの Cognos ソフトウェアと更新をインストールには、次の手順を実行する必要があります。

- Cognos コアソフトウェアをインストールします。
- Fix Pack をアップグレードします。
- ホットサイト更新をインストールします。

この手順は Cognos Content Manager サーバおよび Cognos Report サーバに対しても実行します。

詳細については、「*Cognos ソフトウェアおよび更新 — Cognos Content Manager/Cognos Report サーバ/Cognos ゲートウェイサーバ*」(94ページ)を参照してください。

## ステップ 2 : Cognos ゲートウェイサーバの JRE のセットアップ

Cognos ソフトウェアを実行した際に必要な Java コンポーネントを検出できるようにするには、Cognos ゲートウェイサーバに JAVA\_HOME 環境変数を設定する必要があります。

この手順は Cognos Content Manager サーバおよび Cognos Report サーバに対しても実行します。

詳細については、「*JAVA\_HOME 環境変数への JRE の追加*」(98ページ)を参照してください。

## ステップ 3 : Cognos ゲートウェイサーバでの Cognos Gateway

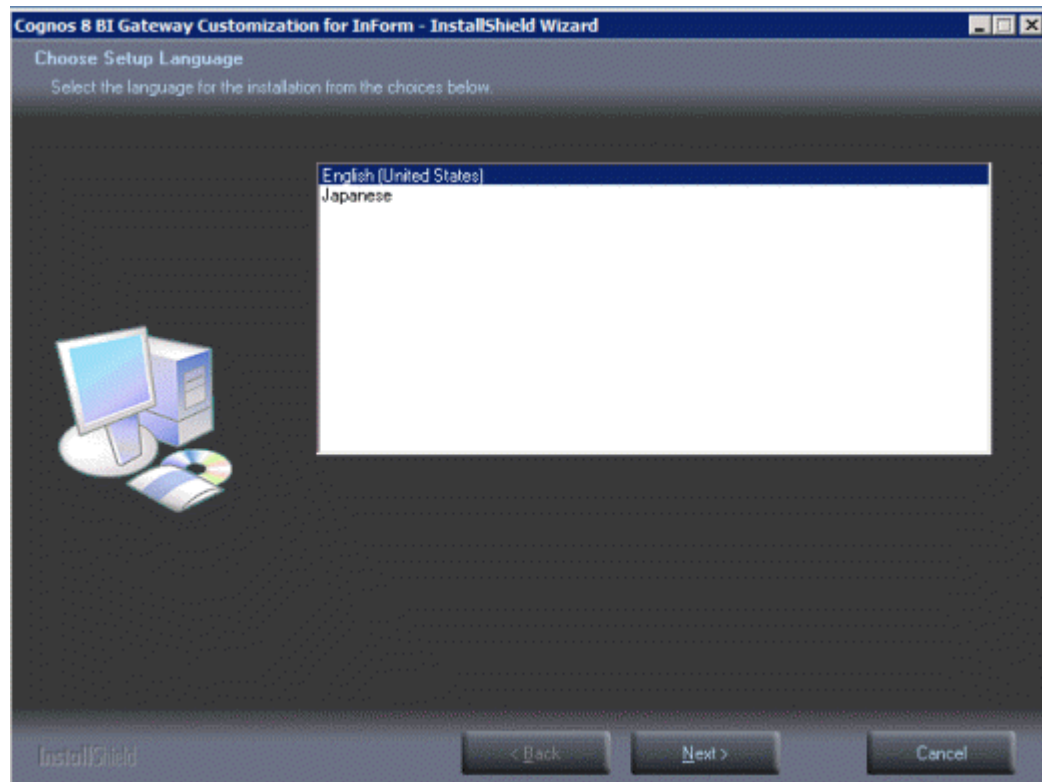
### Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig\setup.exe) の実行

Cognos Gateway Customization for InForm ウィザードは、InForm アプリケーションと連動するように Cognos 8・BI Gateway のサービスコンポーネントを設定します。

**注：** このウィザードを実行して、レポーティングと分析モジュールで使用するパブリックゲートウェイを設定するか、**Cognos 8 Business Intelligence** ソフトウェアへのアクセスを制限するプライベートゲートウェイを設定します。

- 1 InForm インストールイメージから、CRNGatewayConfig フォルダを Cognos ゲートウェイサーバからアクセス可能な場所にコピーします。
- 2 Cognos ゲートウェイサーバで、CRNGatewayConfig\setup.exe プログラムファイルを実行します。

〔設定言語の選択〕 ページが表示されます。



- 3 セットアップ時にウィザードで使用する言語を選択します。英語または日本語を選択します。デフォルトは英語です。〔次へ〕 をクリックします。

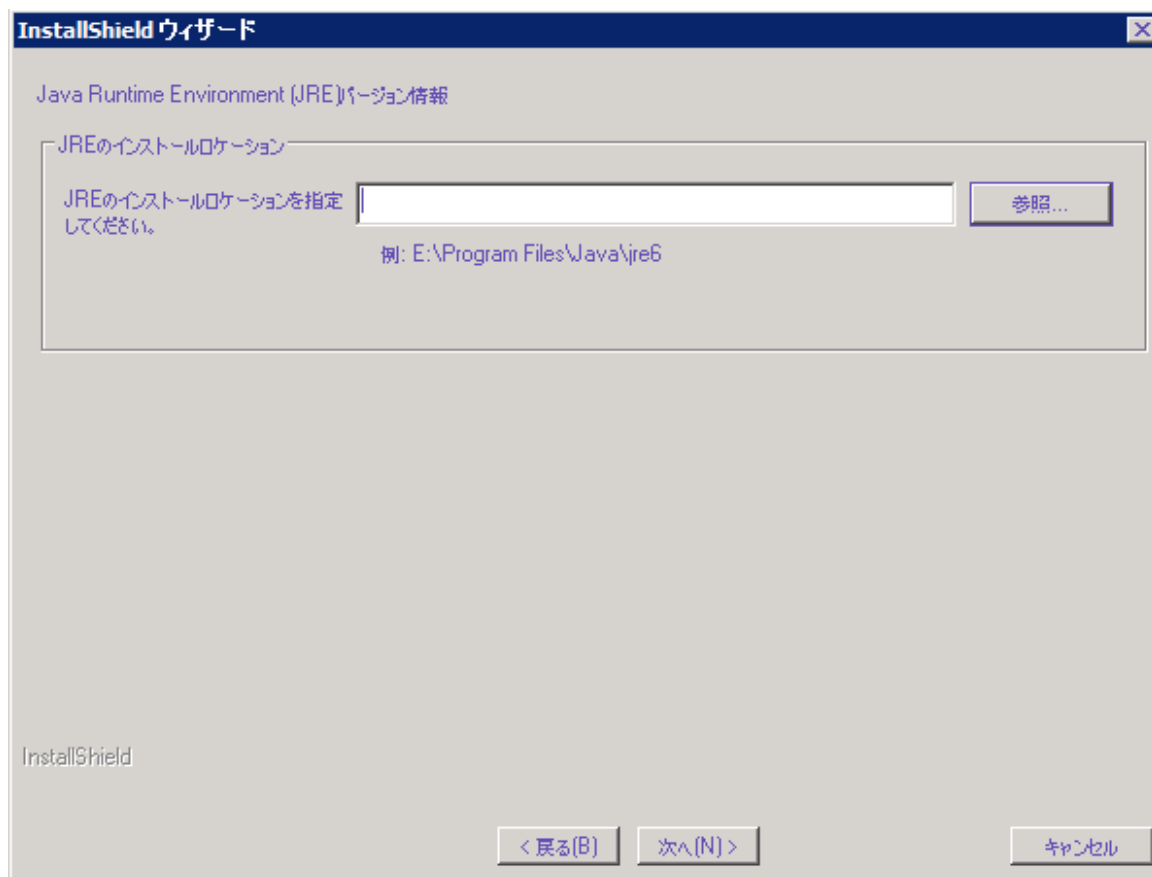
Cognos 8・BI のようこそ画面が表示されます。

- 4 〔次へ〕 をクリックします。

〔Cognos 8・BI のインストール場所〕 ページが表示されます。

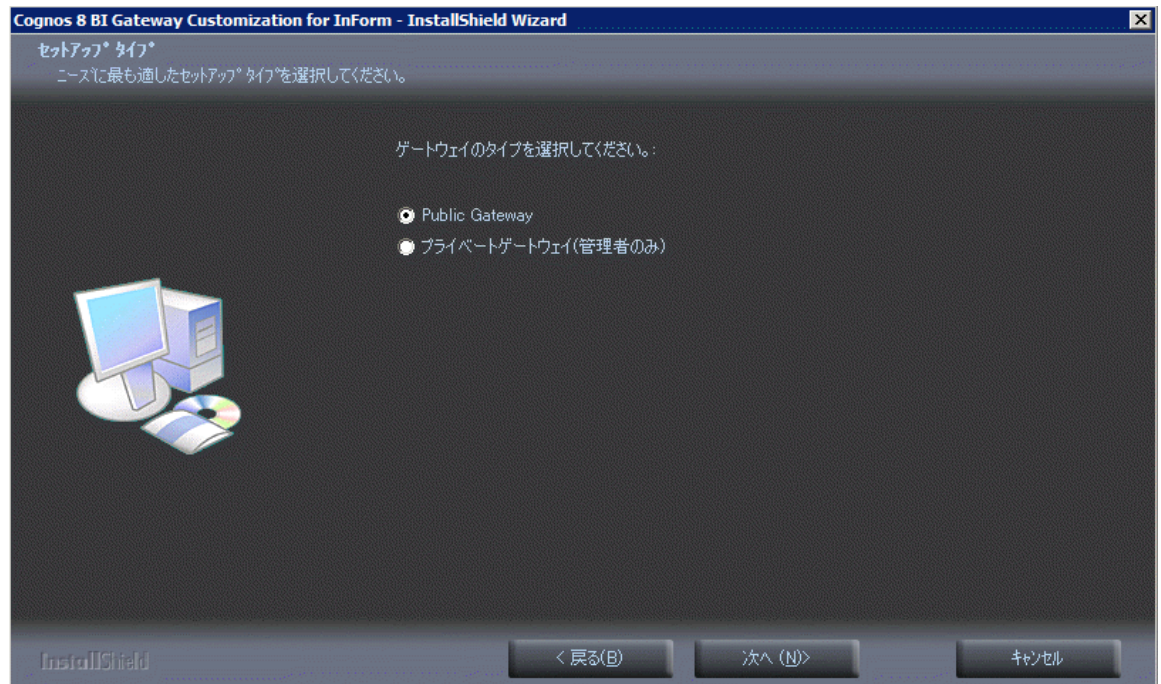
- 5 Cognos 8・BI ソフトウェアがある場所へのパスを指定し、〔次へ〕 をクリックします。

Java Runtime Environment の情報ページが表示されます。



- 6 JRE がインストールされている場所を指定し、[次へ] をクリックします。

[セットアップタイプ] ページが表示されます。

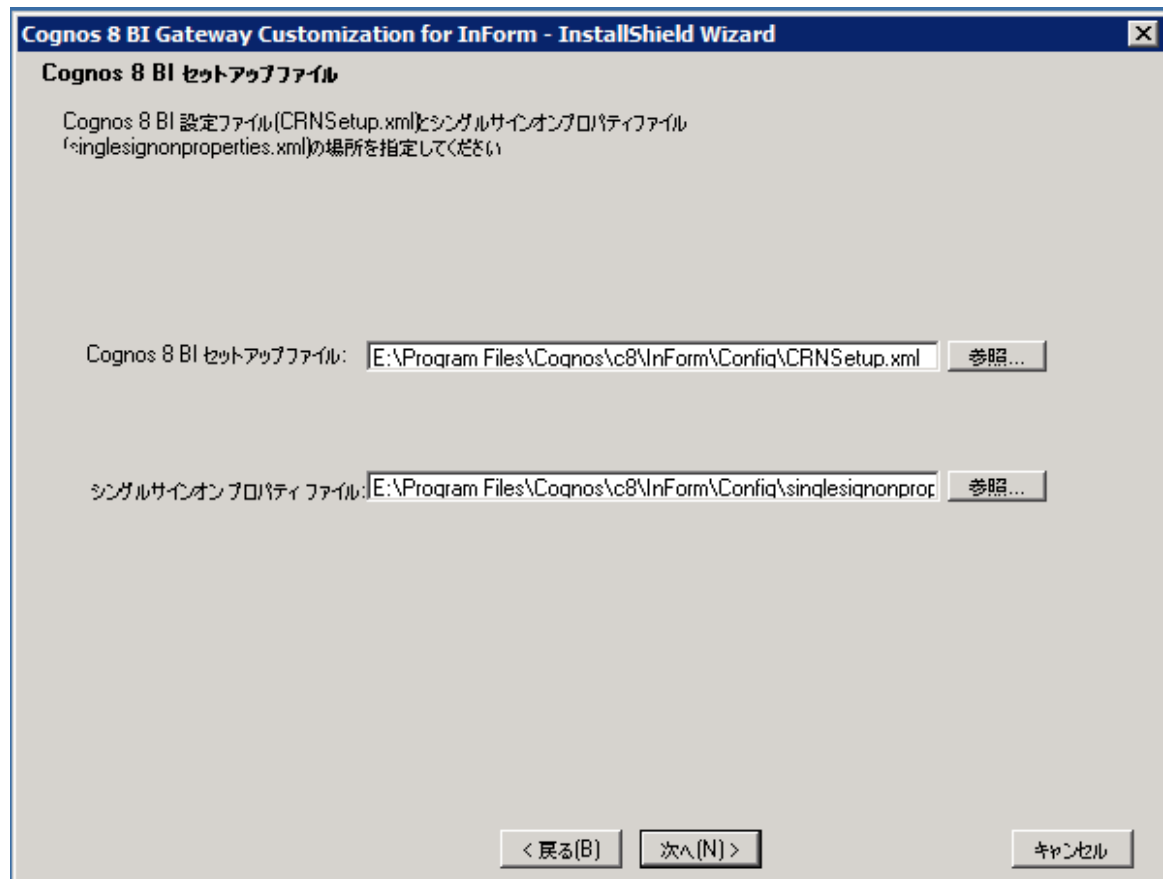


7 次のいずれかを実行し、[次へ] をクリックします。

- パブリックゲートウェイを選択して、InForm アプリケーションとレポーティングと分析モジュール間の通信を管理するゲートウェイを設定する。
- プライベートゲートウェイを選択して (Admin のみ)、Cognos 8 Business Intelligence ソフトウェアに管理機能を実行する。

**注：** プライベートゲートウェイサーバへのアクセスは、**Cognos 8 Business Intelligence** ソフトウェアを管理する必要がある限られたグループのユーザにのみ制限する必要があります。

[Cognos 8・BI セットアップファイルの場所] ページが表示されます。



- 8 Cognos 8・BI Customization for InForm ウィザードで作成された CRNSetup.xml ファイルと singledesignonproperties.xml を参照し、[次へ] をクリックします。  
[プログラムのインストール準備完了] ページが開きます。
- 9 [インストール] をクリックします。  
[セットアップステータス] ページが表示されます。  
プログラムがインストールされ、World Wide Web Publishing Service が再起動します。  
[InstallShield Wizard の完了] ページが表示されます。
- 10 [完了] をクリックします。

## ステップ 4: Cognos ゲートウェイサーバの **AuthenticationFilter** レジストリキーの **DomainSuffix** エントリの更新 - パブリックゲートウェイのみ

Cognos レポーティングをインストールする際に、Cognos ゲートウェイサーバで、次のいずれかが当てはまる場合、Oracle の **AuthenticationFilter** レジストリキーの **DomainSuffix** エントリを更新する必要があります。

- Cognos ゲートウェイサーバと InForm アプリケーションサーバにプロキシサーバを使用している。
- いずれかのサーバの完全修飾ドメイン名 (FQDN) の末尾が共通ドメインサフィックスではない。

InForm アプリケーションサーバと Cognos ゲートウェイサーバのインストール中に、FQDN が Oracle **AuthenticationFilter** **DomainSuffix** エントリに登録された。両方のインストールの FQDN の末尾が共通ドメインサフィックス (**.net**、**.com**、**.org**、**.edu**、**.gov** など。**.uk** や **.au** などの国名は付いていてもいなくてもよい) であれば、プロキシサーバを使用しない限り、レジストリキーを更新する必要はありません。

- FQDN が 2 つのレベルのみで構成されている (例: <servername>.com)。

**注：** InForm アプリケーションサーバの **DomainSuffix** エントリも更新する必要があります。詳細については、「**ステップ 3 : InForm アプリケーションサーバの **AuthenticationFilter** レジストリキーの **DomainSuffix** エントリの更新 - オプション**」(59ページ)を参照してください。

Cognos ゲートウェイサーバと InForm アプリケーションサーバの両方で **DomainSuffix** 設定を実行します。いずれのマシンでも **DomainSuffix** に対して同一の **AuthenticationFilter** エントリが必要です。

- 1 [Windows レジストリ エディタ] で、次の Windows Registry キーに移動します。

HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\ORACLEHS\AuthenticationFilter

- 2 **DomainSuffix:** のエントリを更新します。

- a エントリを右クリックして、[修正] を選択します。

[文字列の編集] ダイアログボックスが表示されます。

- b [値のデータ] フィールドに新しい値を入力し、次のエントリを編集します。

- プロキシサーバを使用しているか、どちらかのサーバの完全修飾ドメイン名の末尾が共通ドメインサフィックスではない場合、2 つのコンピュータ間で異なるドメインサフィックス部分をすべて削除します。たとえば、FQDN に「<servername>.<companyname>.co.uk」が含まれる場合、編集後のエントリは「<companyname>.co.uk」になります。
- InForm ソフトウェア と Cognos 8・BI が同一マシン上にインストールされていて、FQDN に <servername>.com のように 2 つのノードしかない場合はエントリにサーバ名とドメインサフィックスを含める必要があります。上の例では、エントリは <servername>.co.uk になります。



- c [OK] をクリックします。
- 3 [Windows レジストリ エディタ] を終了します。
- 4 IIS を再起動します。
- 5 InForm アプリケーションサーバで InForm サービスを再起動します。

## ステップ 5 : ステップ 5 : Cognos ゲートウェイサーバでの SSL の有効化 - オプション

SSL の有効化はオプションです。詳細については、「**セキュアソケットレイヤー (SSL) の有効化について**」(110ページ) を参照してください。

## Reporting アプリケーションサーバの一般的な手順

### Cognos ソフトウェアおよび更新 —Cognos Content Manager/Cognos Report サーバ/Cognos ゲートウェイサーバ

Cognos 8・BI ソフトウェアインストールプロセスでは、次のものがインストールされます。

- Cognos 8・BI アプリケーション層コンポーネント
- Cognos 8・BI ゲートウェイサービス
- Cognos 8・BI Content Manager

以下の Reporting サーバに Cognos ソフトウェアと更新をインストールします。

- Cognos Content Manager サーバ

詳細については、「**ステップ 2: Cognos Content Manager サーバへの Cognos ソフトウェアと更新のインストール**」(79ページ)を参照してください。

- Cognos Report サーバ

詳細については、「**ステップ 2: Cognos Report サーバへの Cognos ソフトウェアと更新のインストール**」(84ページ)を参照してください。

- Cognos ゲートウェイサーバ

詳細については、「**ステップ 1: Cognos ゲートウェイサーバへの Cognos ソフトウェアと更新のインストール**」(87ページ)を参照してください。

#### Cognos 8.4.1 ソフトウェアをインストールします。

以下のレポーティングサーバに Cognos ソフトウェアをインストールします。

- Cognos Content Manager サーバ
- Cognos Report サーバ
- Cognos ゲートウェイサーバ

1 Oracle Download Center から **BiReportingWin64\_CZAG2ML.tar.gz** ファイルをダウンロードしてアーカイブファイルを解凍し、¥Win32 フォルダの **issetup.exe** ファイルに移動します。

2 **issetup.exe** をダブルクリックします。

インストールウィザードの Welcome ページが表示されます。

3 インストールに使用する言語を選択し、[次へ] をクリックします。

[使用許諾契約] ページが表示されます。

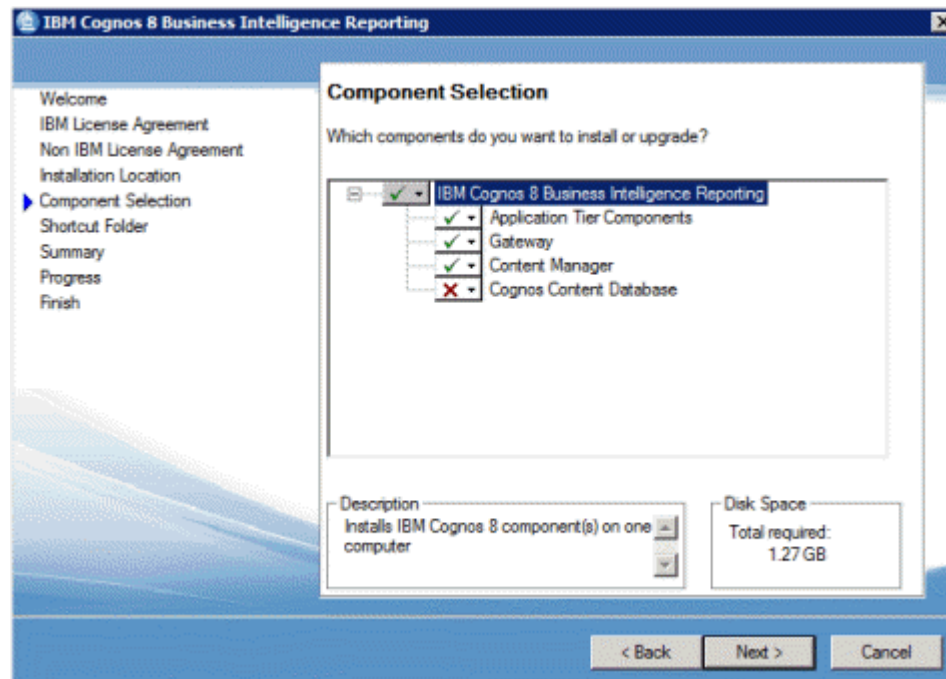
4 使用許諾契約書を読み、[同意する] を選択して、[次へ] をクリックします。

[インストール先] ページが表示されます。

- 5 [インストールディレクトリ] フィールドで、**Cognos 8 Business Intelligence** のドライブとインストール先フォルダ (**E:\cognos\c8** など) を参照または入力し、[次へ] をクリックします。

「ディレクトリが存在しません」というメッセージが表示されたら、[はい] をクリックしてフォルダを作成します。

[コンポーネントの選択] ページが表示されます。



- 6 サーバの設定に応じて適切なコンポーネントを 1 つまたは複数選択します。  
たとえば、分散環境では以下を選択します。

- Cognos Report サーバのアプリケーション層コンポーネント
- Cognos ゲートウェイサーバのゲートウェイ
- Cognos Content Manager サーバの Content Manager

- 7 Cognos コンテンツデータベースが選択されていないことを確認し、[次へ] をクリックします。

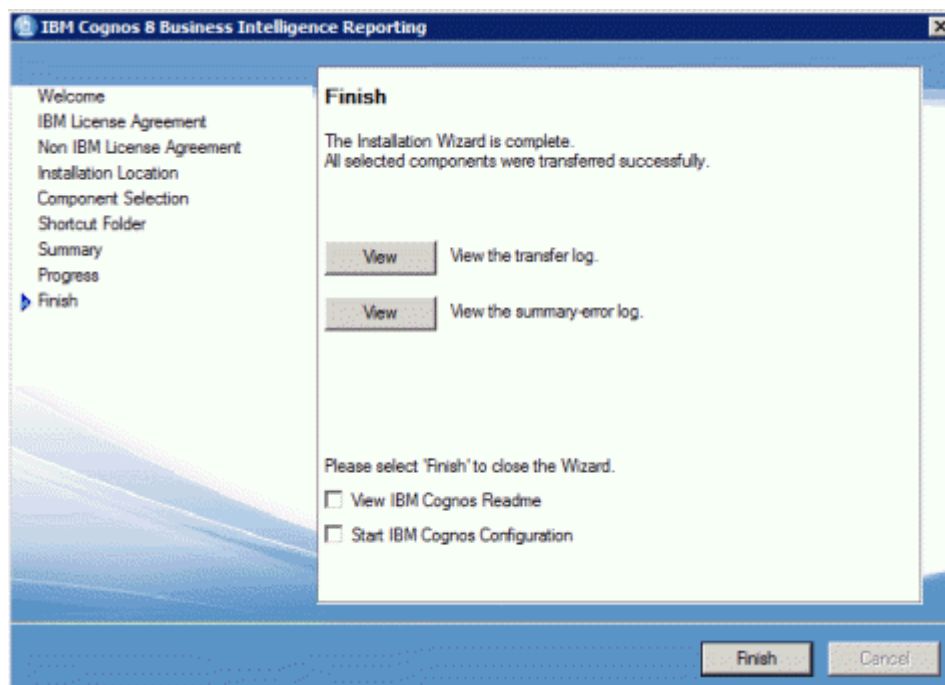
[ショートカット フォルダ] ページが表示されます。

- 8 デフォルトのプログラムフォルダを承認し、[次へ] をクリックします。

[インストールの概要] ページが表示されます。

- 9 インストールの概要を確認し、[次へ] をクリックします。

インストールプログラムが選択されたコンポーネントをインストールします。インストールには数分かかります。コンポーネントのインストールが終了すると、[終了] ページが表示されます。



10 [終了] ページで、次の手順を実行します。

- 転送ログまたはサマリエラーログを表示するには、該当する [**View**] ボタンをクリックします。
- Readme ファイルを参照するには、[**Cognos Readme** を表示] を選択します。
- [**Start Cognos Configuration**] が選択されていないことを確認します。

11 [完了] をクリックします。

### Cognos 8.4.1 ソフトウェアの **Fix Pack 4** へのアップグレード

以下のレポーティングサーバに Cognos ソフトウェアの **Fix Pack** をインストールします。

- Cognos Content Manager サーバ
  - Cognos Report サーバ
  - Cognos ゲートウェイサーバ
- 1 Oracle Download Center から **C8\_BI\_8\_4\_1\_Win64\_FP004.tar.gz** ファイルをダウンロードし、アーカイブファイルを Cognos 8.4.1 ソフトウェアをダウンロードしたフォルダとは別のフォルダに解凍し、¥Win32 フォルダの **issetup.exe** ファイルに移動します。
  - 2 **issetup.exe** をダブルクリックします。

アップグレードウィザードのようこそページが表示されます。

- 3 インストールで使用する言語を選択します。デフォルトは英語です。[次へ] をクリックします。  
[使用許諾契約] ページが表示されます。
- 4 使用許諾契約書を読み、[同意する] を選択して、[次へ] をクリックします。  
[インストール先] ページが表示されます。
- 5 [インストール ディレクトリ] フィールドに、**Cognos 8 Business Intelligence** を最初にインストールしたときに指定したのと同じドライブ名とインストール先フォルダ (例 **C:\cognos\c8** など) を参照または入力して、[次へ] をクリックします。  
次の警告が表示されます。  
このインストールにより、既存のファイルが置換されます。  
置き換えられるすべてのファイルのバックアップを自動で作成するには [はい] を選択します。
- 6 [はい] をクリックします。  
[ショートカット フォルダ] ページが表示されます。
- 7 デフォルトのプログラムフォルダを承認し、[次へ] をクリックします。  
[インストールの概要] ページが表示されます。
- 8 インストールの概要を確認し、[次へ] をクリックします。  
インストールが終了すると、[終了] ページが表示されます。
- 9 転送ログまたは概要ログとエラーログを確認するには、該当する [表示] ボタンをクリックします。
- 10 [完了] をクリックします。

#### 8.4.1 Fix Pack 4 ホットサイト更新のインストール

Cognos 8・BI ソフトウェアの Fix Pack 4 へのアップグレードの他に、以下のホットサイト更新をインストールする必要があります。

- up\_c8bisrvr\_winx64\_8.4.105.1076\_ml.tar.gz
- up\_c8bisrvr\_winx64\_8.4.105.1100\_ml.tar.gz

以下のレポーティングサーバに Cognos ソフトウェアのホットサイト更新をインストールします。

- Cognos Content Manager サーバ
- Cognos Report サーバ
- Cognos ゲートウェイサーバ

- 1 Oracle Download Center から各ホットサイト TAR ファイルをダウンロードし、最初に Cognos 8.4.1 ソフトウェアやその他のホットサイトをダウンロードしたフォルダ

とは別のフォルダに各アーカイブのファイルを抽出します。

ホットサイト更新ごとにこの手順を実行する必要があります。この Cognos インストールでは、次のホットサイトをこの順番でインストールする必要があります。

- a        8.4.105.1076
  - b        8.4.105.1100
- 2 各ホットサイトで ...¥win32 フォルダに移動し、**issetup.exe** をダブルクリックします。  
アップグレードウィザードのようこそページが表示されます。
  - 3 インストールに使用する言語を選択し、[次へ] をクリックします。デフォルトの言語は英語です。  
[使用許諾契約] ページが表示されます。
  - 4 使用許諾契約書を読み、[同意する] を選択して、[次へ] をクリックします。  
[インストール先] ページが表示されます。
  - 5 [インストール ディレクトリ] フィールドに、**Cognos 8 Business Intelligence** ソフトウェアを最初にインストールしたときに指定したのと同じドライブ名とインストール先フォルダ（例 **C:¥cognos¥c8** など）を参照または入力して、[次へ] をクリックします。  
次のメッセージが表示されます。  
このインストールにより、既存のファイルが置換されます。  
置き換えられるすべてのファイルのバックアップを自動で作成するには [はい] を選択します。
  - 6 [はい] をクリックします。  
[ショートカット フォルダ] ページが表示されます。
  - 7 デフォルトのプログラムフォルダを承認し、[次へ] をクリックします。  
[インストールの概要] ページが表示されます。
  - 8 インストールの概要を確認し、[次へ] をクリックします。  
インストールが終了すると、[終了] ページが表示されます。
  - 9 転送ログまたは概要ログとエラーログを確認するには、該当する [表示] ボタンをクリックします。
  - 10 [完了] をクリックします。
  - 11 ステップ 1 で示した各ホットサイトに対してこの手順を繰り返します。

## JAVA\_HOME 環境変数への JRE の追加

以下のレポーティングサーバで、JAVA\_HOME 環境変数を Java Runtime Environment 1.6 へのパス（例 C:¥Program Files¥Java¥jre6）に設定します。

- Cognos Content Manager サーバ

詳細については、「**ステップ 3 : Cognos Content Manager サーバの JRE のセットアップ**」(80ページ)を参照してください。

- Cognos Report サーバ

詳細については、「**ステップ 3 : Cognos Report サーバの JRE のセットアップ**」(84ページ)を参照してください。

- Cognos ゲートウェイサーバ

詳細については、「**ステップ 2 : Cognos ゲートウェイサーバの JRE のセットアップ**」(87ページ)を参照してください。

## Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行 - Cognos Content Manager/Cognos Report サーバ

InForm 環境向けに Cognos 8・BI ソフトウェアをカスタマイズするには、インストールウィザードと設定ウィザードを実行します。

以下のレポーティングサーバで、Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig¥setup.exe) を実行します。

- Cognos Content Manager サーバ

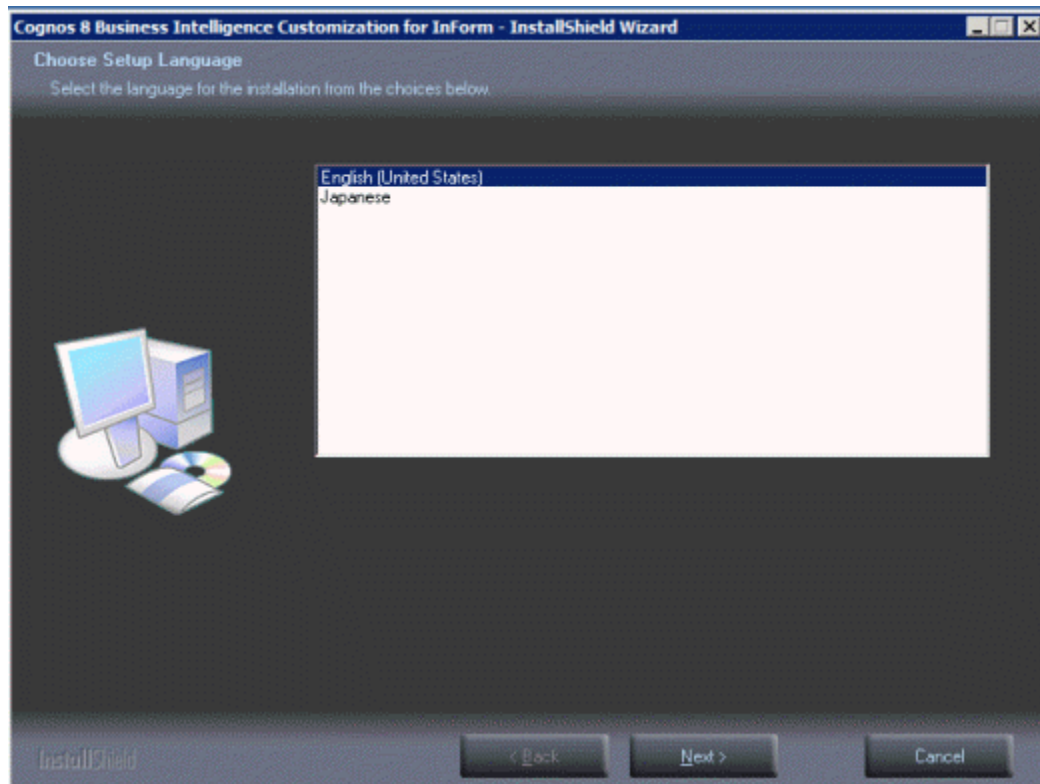
詳細については、「**ステップ 5 : Cognos Content Manager サーバでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig¥setup.exe) の実行**」(80ページ)を参照してください。

- Cognos Report サーバ

詳細については、「**ステップ 5 : Cognos Report サーバでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig¥setup.exe) の実行**」(85ページ)を参照してください。

- 1 InForm インストールイメージから、CRNConfig フォルダを、Cognos Content Manager サーバおよび Cognos Report サーバからアクセス可能な場所にコピーします。
- 2 Cognos Content Manager サーバおよび Cognos Report サーバで **CRNConfig¥setup.exe** プログラムファイルを実行します。

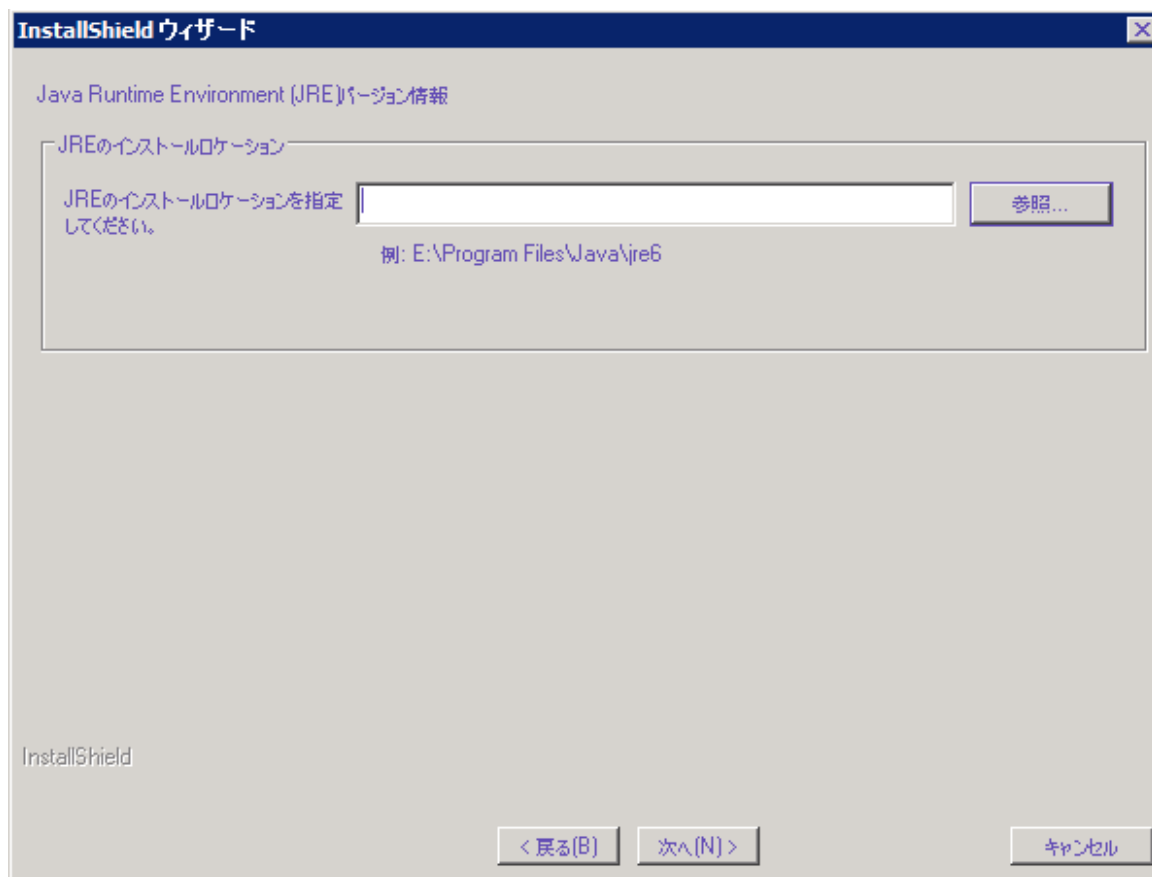
〔設定言語の選択〕 ウィンドウが表示されます。



- 3 セットアップ時にウィザードで使用する言語を選択します。英語または日本語を選択します。デフォルトは英語です。〔次へ〕をクリックします。  
〔ようこそ〕 ページが表示されます。
- 4 〔次へ〕をクリックします。  
〔Cognos 8・BI のインストール場所〕 ページが表示されます。
- 5 Cognos 8・BI Content Manager がインストールされているフォルダを指定して、〔次へ〕をクリックします。

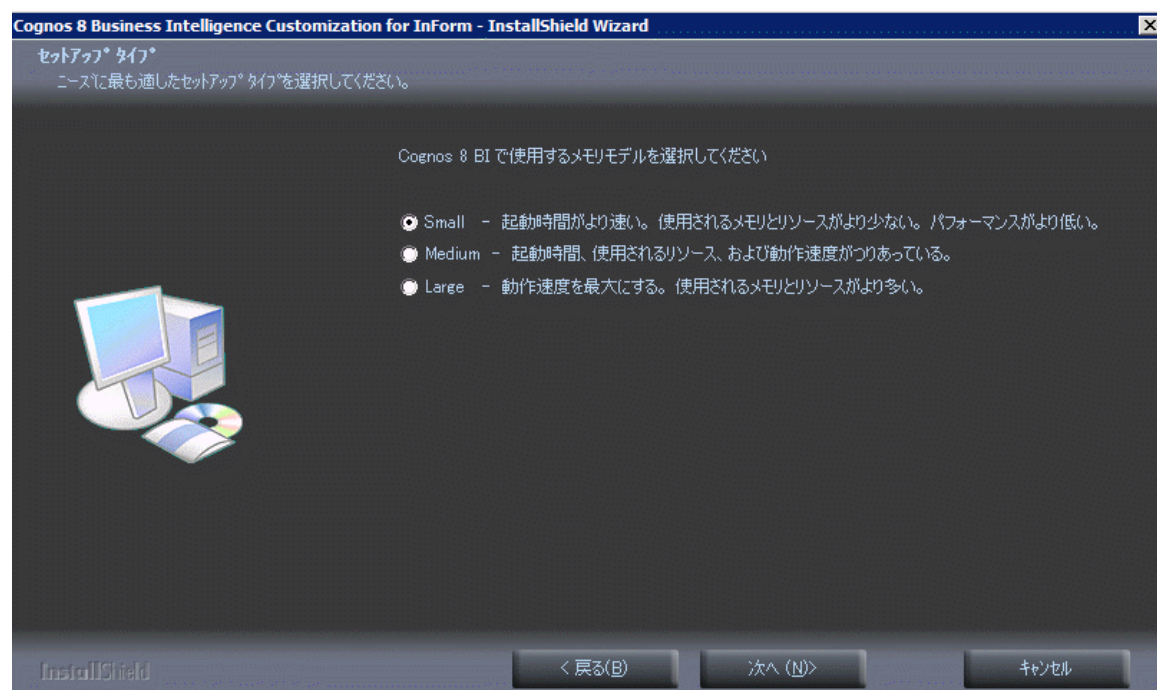


Java Runtime Environment (JRE) のバージョン情報ページが表示されます。



- 6 JRE がインストールされている場所を指定し、[次へ] をクリックします。

[セットアップタイプ] ページが表示されます。



- 7 業務に最適なメモリモデル（Small、Medium、Large のいずれか）を選択し、[次へ] をクリックします。

注：適切でないサイズを選択した場合でも、後で変更できます。

Cognos Content Store と Application Firewall のページが表示されます。

8 次の値を入力します。

フィールド	説明
データベースサーバ	Cognos 8・BI Content Store スキーマがインストールされているデータベースサーバの完全修飾ドメイン名 (FQDN)。
ポート	データベースサーバと通信するポート番号。
SID	データベースサーバと通信する SID。
ユーザ名	Cognos 8・BI Content Store データベース内の Oracle ユーザのユーザ名。このユーザは、Cognos 8・BI Content Store データベースを構成したときに作成しました。
パスワード、パスワードの確認	Cognos Content Manager データベースの Cognos 8・BI ユーザ。
有効なドメインまたはホスト	ドメイン名またはホスト名のカンマ区切りリスト (例: *.company.com, *.companycorp.com)。

9 「次へ」をクリックします。

[カスタム認証プロバイダコンフィギュレーション情報] ページと [Single Sign-on 情報] ページが表示されます。

Cognos 8 Business Intelligence Customization for InForm - InstallShield Wizard

カスタム認証プロバイダ (CAP) 設定とシングルサインオンの情報

カスタム認証プロバイダ (CAP) の認証設定をするために、必要な情報を入力してください。

CAP コンフィギュレーション情報

データベースサーバ: b1234.example.com

ポート: 1123

SID: content1

ユーザ名: PFCAPAdmin

パスワード:

パスワードの確認:

☐ InForm Model Generation Serviceのユーザを信頼する (認証不要)

シングルサインオンの情報

☐ シングルサインオンとのインテグレーション

☐ Cognos Content Managerコンポーネントはこのコンピュータにインストールされています

OAM ASDKのインストールロケーション

参照...

例: E:\OAM\AccessServerSDK11g

< 戻る(B)

次へ(N) >

キャンセル

10 次の値を入力します。

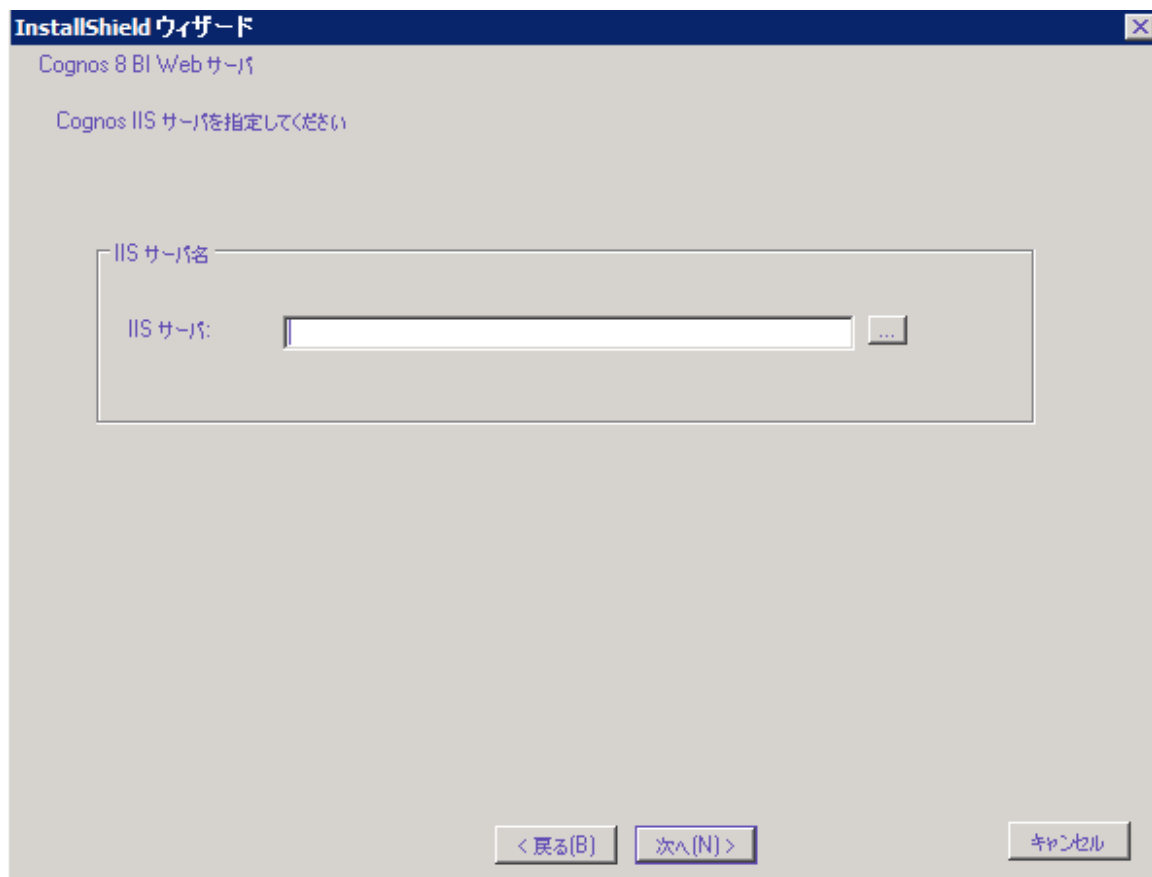
フィールド	説明
データベースサーバ	TRIAL_URLS テーブルを含むユーザの完全修飾ドメイン名。
ポート	データベースサーバと通信するポート番号。
SID	データベースサーバと通信する SID。
ユーザ名	PFCapAdmin ユーザの名前。
パスワード、パスワードの確認	PFCapAdmin ユーザのパスワード。
InForm モデル生成サービスのユーザを信頼する (認証不要)	pfreportinguser に InForm モデル生成サービスへのアクセスを許可する場合に選択します。
Single Sign-on との統合	Single Sign-on を有効化する場合に選択します。

104

InForm 6.0

Cognos Content Manager コンポーネントがコンピュータにインストールされている	SSO を有効化する場合、および Content Manager サーバに CRNConfig ウィザードをインストールする場合に選択します。
OAM ASDK インストール場所	SSO を使用している場合、Oracle Access Management Access SDK の場所へのパスを入力します。

- 11 [InForm モデル生成サービスのユーザを信頼する（認証不要）] を選択します。
- 12 [次へ] をクリックします。  
[Cognos Web サーバの指定]（ゲートウェイまたは IIS サーバ）ページが表示されます。



- 13 Cognos 8・BI ゲートウェイサーバの完全修飾ドメイン名を入力するか、[...] をクリックしてダイアログボックスから選択します。
- 14 [次へ] をクリックします。

[LDAP コンフィギュレーション情報] ページが表示されます。

Cognos 8 Business Intelligence Customization for InForm - InstallShield Wizard

LDAPコンフィギュレーション情報

LDAP から認証を構成するのに必要な情報を入力してください

LDAPコンフィギュレーション情報

LDAPサーバ:

LDAPポート:

管理者 DN:   
(例: uid=admin,ou=Administrators,ou=TopologyManagement,o=NetscapeRoot)

パスワード:

パスワードの確認:

親ノード DN:   
(例: dc=MyDomain,dc=MyCompany,dc=com)

Administrator OU:

< 戻る(B)

次へ(N) >

キャンセル

15 次の値を入力します。

フィールド	説明
LDAP サーバ	Oracle ディレクトリサーバがインストールされているサーバの完全修飾ドメイン名。
LDAP ポート	LDAP サーバとの通信に使用するポート番号。
管理者 DN	サーバの管理者の識別名。フィールドの下に表示された形式と値を使用します。  注：[管理者 DN] の値は、Base Distinguished Name (BDN; ベース識別名) への読み取りおよび検索アクセス権を持つ LDAP ユーザと一致します。BDN は、検索の開始場所となる、ディレクトリ構造の最上位レベルまたはルートを指定します。
パスワード、パスワードの確認	管理者のパスワード。

フィールド	説明
親ノード DN	親ノードの識別名。フィールドの下に表示された形式を使用します（ドメインのパート間のカンマの後にスペースを入力しないでください）。  注：親ノード DN は、ベース識別名（BDN）とも呼ばれます。BDN は、検索の開始場所となる、ディレクトリ構造の最上位レベルまたはルートを指定します。
Cognos 管理 OU	Cognos 管理組織単位。

16 [次へ] をクリックします。

[プログラムのインストール準備完了] ページが開きます。

17 [インストール] をクリックします。

[セットアップステータス] ページが表示されます。

プログラムが必要なファイルをコピーし、Cognos 8 インストールの下にある InForm サブフォルダ（...¥InForm¥Config）に CRNSetup.xml ファイルおよび singlesignonproperties.xml ファイルを作成します。ファイルの名前と場所がメッセージウィンドウに表示されます。Cognos 8・BI Gateway Customization for InForm をインストールする場合、これらのファイルの場所を指定する必要があります。

18 [InstallShield Wizard の完了] ページが表示されます。

19 [完了] をクリックします。

## ORACLEHS LDAP ネームスペースの作成

Cognos Content Manager サーバで ORACLEHS LDAP ネームスペースを作成します。詳細については、「**ステップ 6：Content Manager サーバでの ORACLEHS LDAP ネームスペースの作成**」（80ページ）を参照してください。

この手順は、InForm CRNConfig ウィザードを実行するたびに実行します。

- 1 Cognos 8・BI がインストールされたサーバで、[スタート] > [すべてのプログラム] > [IBM Cognos 8] > [IBM Cognos Configuration] を選択します。

[IBM Cognos Configuration] ウィンドウが表示されます。

- 2 [セキュリティ] ツリーで、[認証] を右クリックして [リソースの新規作成] > [ネームスペース] を選択します。

[リソースを新規作成 - ネームスペース] ダイアログボックスが表示されます。

- 3 次の値を入力します。

- 名前 - ORACLEHS（すべて大文字）
- タイプ - LDAP

- 4 [OK] をクリックします。

- 5 パラメータを次のように入力します。

- **ネームスペース ID** - ORACLEHS
- **ホスト名とポート番号** - `<fullyqualifiedmachinename>:<LDAPServerPort>`  
(たとえば、ポート番号 : 389)
- **基本識別名** - 使用している環境のドメイン名。たとえば、ネットワークドメインが hof.com の場合、ou=ORACLEHS,dc=hof,dc=com

注：ドメインのパート間のカンマの後にスペースを入力しないでください。

- **ユーザ検索** - (uid=\${userID})
- 6 [ファイル] > [上書き保存] を選択します。  
Cognos Configuration ユーティリティにより設定が検証され、構成が保存されます。
  - 7 検証チェックが完了したら (すべてのアイテムに緑色のチェックマークが付いたら)、  
[閉じる] をクリックします。
  - 8 [閉じる] をクリックし、Cognos Configuration ユーティリティのウィンドウを閉じます。



## 第 7 章

# Secure Socket Layer (SSL) の有効化

### この章の内容

Secure Socket Layer (SSL) の有効化について .....	110
SSL をサポートする環境のセットアップ .....	111
各スタディの SSL の有効化 .....	116

## Secure Socket Layer (SSL) の有効化について

Secure Socket Layer (SSL) は、サーバ間のセキュリティで保護された通信を有効にします。

SSL の有効化はオプションです。しかし、Oracle では、すべての InForm インストールに対して SSL を有効化することを推奨しています。

SSL を使用する場合、ご利用の環境のすべてのサーバで SSL をサポートする必要があります。また、各スタディで SSL を有効化しなければなりません。

Cognos Reporting を使用している場合:

- InForm コアソフトウェアをインストールする際に InForm サーバで SSL を有効化できます。
- Reporting サーバをインストール後に SSL を有効化するか、Cognos のインストールが完了してからすべてのサーバに対して SSL を有効化することができます。

## SSL をサポートする環境のセットアップ

InForm で SSL の使用を有効にするには、すべてのサーバで次の手順を実行します。

- 1 キー証明書を作成してセットアップします。
- 2 キー証明書をインストールします。
- 3 キー証明書をインポートします。
- 4 キー証明書のインストールを検証します。

SameDB 設定で Reporting を使用する場合は、InForm アプリケーションサーバと Cognos ゲートウェイサーバに次の追加手順を実行します。

- 1 InForm アプリケーションサーバ の ExternalLoginURL を更新します。

**注：** このステップは、同じアプリケーションサーバに **InForm** と **Reporting** アプリケーションがインストールされている場合にのみ必要です。

- 2 Cognos Report サーバと Cognos Content Manager で SSL を使用するように設定します。
- 3 Cognos ゲートウェイサーバで SSL を使用するように設定します。

**注：** このステップは **Reporting** をパブリックゲートウェイで使用する場合にのみ必要です。

### すべてのサーバに対して実行する手順

SSL を使用する場合は、設定のタイプを問わず、すべてのサーバでキー証明書をセットアップする必要があります。

#### IIS での SSL 用キー証明書の作成およびセットアップ

- 1 インターネットインフォメーションサービス (**IIS**) マネージャを開きます。
- 2 **<machine\_name>** ノードを開きます。
- 3 **[IIS] > [機能ビュー]** に移動し、**[サーバ証明書]** を選択します。
- 4 **[操作] ビューの [機能を開く]** をクリックします。
- 5 続いて表示される **[操作] ビューの [証明書の要求の作成]** を選択します。
- 6 証明書の要求ウィザードが開きます。
- 7 **[証明書の要求]** ページに入力します。**[一般名]** フィールドで、スタディサーバの名前を指定します。指定する名前には、FQDN (例: **<machine\_name>.north.com**) を含みます。
- 8 **[次へ]** をクリックします。
- 9 **[暗号化サービス プロバイダのプロパティ]** の値をすべてデフォルトのままにして、**[次へ]** をクリックします。

- 10 [参照] をクリックします。
- 11 証明書の要求名およびフォルダの詳細を指定します。
- 12 [保存] をクリックします。
- 13 [開く] をクリックします。テキストボックスにファイル名が表示されます。
- 14 [完了] をクリックします。

## IIS でのサーバマシンのキー証明書のインストール

- 1 ブラウザを開き、次のセキュリティ証明書サーバの URL に移動します。  
`http://<Windows_2008_security_certificate_server>/<certificate_request_page>.`
- 2 [証明書を要求する] をクリックします。
- 3 [証明書の要求の詳細設定] をクリックします。
- 4 [Base 64 を使用して証明書の要求を送信する。] をクリックします。
- 5 certreq.txt ファイル内のすべてのテキストを、保存済みの要求の最初のテキストフィールドにコピーします。
- 6 [サブミット] をクリックします。
- 7 [Base 64 エンコード] を選択します。
- 8 [証明書のダウンロード] をクリックします。
- 9 c:\¥certnew.cer に保存します。
- 10 [証明書チェーンのダウンロード] をクリックします。
- 11 c:\¥certnew.p7b に保存します。
- 12 インターネットインフォメーションサービスマネージャに移動して、証明書の要求を完了します。
- 13 <machine\_name> ノードを選択します。
- 14 [機能ビュー] で、IIS グループの [サーバ証明書] を選択します。
- 15 [操作] ビューの [機能を開く] を選択します。
- 16 続いて表示される [操作] ビューの [証明書の要求の完了] を選択します。
- 17 c:\¥certnew.cer を参照し、[フレンドリ名] にマシン名を指定して、[次へ] をクリックします。
- 18 SSL ポートをスタディサーバのポート番号に設定します。デフォルトは 443 です。
- 19 [OK] をクリックします。
- 20 C:\¥ ディレクトリに移動します。c:\¥certnew.p7b を右クリックします。
- 21 [証明書のインストール] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 22 もう一度 [次へ] をクリックし、[完了] をクリックします。
- 23 [セキュリティの設定] ダイアログボックスで [はい] をクリックします。
- 24 確認ダイアログボックスで [OK] をクリックします。

- 25 デフォルトの **Web** サイトのバインドを設定します。
- 26 IIS マネージャに移動します。
- 27 <machine\_name> ノードを選択します。
- 28 [**Web** サイト] ノードを開きます。
- 29 [サイトの編集] ➤ [バインド] をクリックし、[追加] をクリックします。
- 30 証明書タイプとして [**Https**] および [**SSL**] を選択します。
- 31 [表示] をクリックします。証明書の赤の感嘆符がないことを確認します。

## ローカル コンピュータおよび現在のユーザに新しいキー証明書をインポート

- 1 [スタート] ➤ [ファイル名を指定して実行] に移動して、「**mmc**」と入力します。
- 2 コンソール画面から、[ファイル] ➤ [スナップインの追加と削除] に移動します。
- 3 [利用できるスナップイン] ➤ [証明書] ➤ [追加] をクリックします。
- 4 [ユーザアカウント] を選択し、[完了] を選択します。
- 5 [利用できるスナップイン] ➤ [証明書] ➤ [追加] をクリックします。
- 6 [コンピュータ アカウント] を選択し、[次へ] ➤ [完了] を選択して、[**OK**] をクリックします。
- 7 [証明書] ➤ [現在のユーザ] に移動します。
- 8 [信頼されたルート証明機関] を展開します。
- 9 [証明書] を右クリックし、[インポート] を選択します。
- 10 作成した証明書を参照して選択し、すべてデフォルトの設定を使用してウィザードを完了します。
- 11 [証明書] ➤ [ローカル コンピュータ] でステップ 8～10 を繰り返します。

注 : <Windows\_2008\_security\_certificate\_server> が、現在のユーザおよびローカル コンピュータの証明書ストアの信頼されたルートの一覧に表示されていることを確認してください。一覧に表示されていない場合は、それを**現在のユーザ**からエクスポートし、ディスクに保存して、**ローカル コンピュータ**にインポートしてください。

## キー証明書のインストールの検証

- 1 ブラウザウィンドウを開きます。
- 2 次のように入力します。  
`https://<machine_name>.<domain_name>.com`  
 [セキュリティ警告] ウィンドウが表示されます。
- 3 証明書の日付および名前が有効であることを確認します。

## SameDB 設定で Reporting を使用する場合に実行すべき追加手順

InForm ソフトウェアと Cognos Reporting ソフトウェアを同じアプリケーションサーバにインストールした場合に Reporting を使用するには、Cognos ソフトウェアとレポーティングサーバで SSL を使用するように設定する必要があります。

### Cognos 8 BI で SSL を使用するように設定する方法 - Reporting のみ

注： この手順は、**Reporting** を使用する場合にのみ必要となります。

この手順を使用して、[Web コンテンツ URL] エントリと [ゲートウェイ URI] エントリを更新して、SSL をします。この手順は、Cognos 8・BI ゲートウェイサービスがインストールされている Cognos ゲートウェイサーバで実行します。

- 1 Cognos ゲートウェイサーバで、[スタート] > [すべてのプログラム] > [IBM Cognos8] > [IBM Cognos Configuration] をクリックします。
- 2 Cognos Configuration ユーティリティが完全にロードされたら、[Portal Services] を選択して、次のように [Web コンテンツ URI] エントリを更新します。

`https://<servername>.<domainname>:<portnumber>/COGNOS8`

注： ポート番号を **HTTPS** のポートに変更します。

例：

`https://appsrv23.north.com:443/cognos8`

- 3 [環境] を選択して、次のように [ゲートウェイ URI] エントリを更新します。

`https://<servername>.<domainname>:<portnumber>/cognos8/cgi-bin/cognosisapi.dll`

注： ポート番号を **HTTPS** のポートに変更します。

例：

`https://APPSRV23.north.com:443/cognos8/cgi-bin/cognosisapi.dll`

- 4 [ファイル] > [上書き保存] を選択します。  
Cognos Configuration ユーティリティにより設定が検証され、構成が保存されます。
- 5 チェックが完了したら（すべてのアイテムに緑色のチェックマークが付いたら）、[閉じる] をクリックします。
- 6 [閉じる] をクリックし、Cognos Configuration ユーティリティのウィンドウを閉じます。

## Cognos ゲートウェイサーバで **SSL** を使用するように設定する方法 - Reporting のみ

**注：** このステップは **Reporting** とパブリックゲートウェイを使用する場合にのみ必要です。

Cognos 8・BI を専用サーバにインストールする場合、IIS が Windows 2008 で動作するように設定する必要があります。Cognos 8 Business Intelligence ゲートウェイサービスがインストールされているサーバで、次の手順を実行します。

- 1 **【コントロール パネル】>【管理ツール】>【インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ】** を選択し、ローカルコンピュータのノードを展開します。
- 2 **【Web サービス拡張】** を選択します。
- 3 次のオプションが **【許可】** に設定されていることを確認します。
  - すべての不明な CGI 拡張
  - すべての不明な ISAPI 拡張
  - ASP.NET v1.1.4322
  - ASP.NET v2.0.50727
  - FrontPage Server Extensions 2002
  - WebDAV
  - Active Server Pages

## 各スタディの **SSL** の有効化

SSL を使用する場合は、各スタディに対して有効にする必要があります。

InForm のインストールを完了し、SSL をサポートする環境をセットアップした後に、各スタディの SSL 設定オプションを有効にする必要があります。このオプションは、InForm の管理ユーザインターフェイスまたは MedML インストーラユーティリティで設定できます。

### InForm 管理ユーザインターフェイスを使った **SSL** の有効化

- 1 システム管理権限を持つユーザとして InForm アプリケーションにログインします。
- 2 [管理] > [コンフィギュレーション] をクリックします。
- 3 [SSL を有効にする] オプションを [オン] に設定します。
- 4 レポートینگと分析モジュールを設定する場合は、レポートینگサービスフル URL オプションを **https://** から始まるポート番号を含む URL に変更します。
- 5 [更新] をクリックします。
- 6 次のコマンドを使用して、スタディの停止と、再起動を行います。

```
pfadmin stop trial<studyname>
pfadmin start trial <studyname>
```

### MedML による **SSL** の有効化

- 1 次のように入力して XML ファイルを作成します。
- ```
<MEDMLDATA>
<SYSCONFIG CONFIGNAME="SSLFLAG" TYPE="0" VALUE="1" />
<MEDMLDATA/>
```
- 2 レポートینگと分析 モジュールをセットアップする場合は、次の定義を XML ファイルに含め、レポートینگサーバの URL を https:// から始まる URL に変更します。

```
<SYSCONFIG CONFIGNAME="REPORTINGSERVER" TYPE="0" VALUE="https://<url>" />
```

- 3 次のコマンドを使用して、スタディを停止します。
- 4 その構成オプションを、MedML インストーラユーティリティ を使用してインストールします。
- 5 次のコマンドを使用して、スタディを再起動します。

```
pfadmin start trial <studyname>
```



## パート **3** : インストール後のタスク



## 第 8 章 インストール後のタスク

### この章の内容

分散した Cognos 8・BI ソフトウェアコンポーネント間の通信の有効化 .....	120
複数サーバ環境での臨床モデル生成の有効化 .....	121
Cognos 8・BI サーバの起動 .....	122
カンマ区切り値（CSV）レポート出力の設定 .....	123

## 分散した **Cognos 8・BI** ソフトウェアコンポーネント間の通信の有効化

アプリケーション層コンポーネントを別のサーバにインストールする場合、他の Cognos 8・BI レポートングコンポーネントと通信を行えるようにするには、次の手順を実行する必要があります。


- 暗号プロパティを設定する必要があります。
- すべてのコンテンツマネージャの URL を指定します。
- ディスパッチャの URL を指定します。
- 外部アプリケーションのディスパッチャ URI を指定します。
- Cognos Report サーバの Notification Store プロパティが Content Store データベースを指定するように設定します。これは、Cognos Configuration ユーティリティのオンラインヘルプで説明されています。

**注：** これは、**Cognos Report** サーバと **Cognos Content Manager** が別々のサーバにインストールされている複数サーバ環境を使用している場合にのみ必要です。

詳細については、Cognos 8・BI のドキュメントを参照してください。

## 複数サーバ環境での臨床モデル生成の有効化

Cognos 8.4 環境で複数の Cognos サーバを使用している場合は、すべてのディスパッチャを次のように設定します。

- 1 プライベートゲートウェイを使って Cognos サーバにログインします。  
プライベートゲートウェイの詳細については、「**Cognos プライベートゲートウェイについて**」(7ページ) および「**Cognos ゲートウェイサーバの準備**」(86ページ)を参照してください。
- 2 [起動] > [レポート管理] を選択します。  
[管理] ページが表示されます。
- 3 [コンフィギュレーション] タブをクリックします。
- 4 [ディスパッチャおよびサービス] をクリックします。  
Content Manager で登録されているディスパッチャのリストが表示されます。
- 5 各ディスパッチャに、以下の手順を実行します。
  - a [アクション] 列で [プロパティの設定] アイコン () をクリックします。
  - b [設定] タブをクリックします。
  - c [負荷分散モード] プロパティを [クラスタ互換] に設定します。
  - d [OK] をクリックします。

## Cognos 8・BI サーバの起動

Cognos 8・BI のインストールおよび設定手順を完了すると、Cognos 8・BI サーバを起動できます。複数サーバに Cognos 8・BI アプリケーション層コンポーネントを分散させている場合、サーバの具体的な起動順序については、『*Cognos インストールと設定ガイド*』を参照してください。

- 1 Cognos 8・BI サービスがインストールされたサーバで、[スタート] > [すべてのプログラム] > [IBM Cognos8] > [IBM Cognos Configuration] を選択します。

Cognos Configuration ユーティリティが起動します。

- 2 [操作] > [開始] を選択します。
- 3 サーバが起動したら、Cognos Configuration ユーティリティを閉じます。

## カンマ区切り値 (CSV) レポート出力の設定

レポートिंगと分析モジュールには、Excel スプレッドシートアプリケーションなどのアプリケーションで CSV レポート出力ファイルを簡単に使用できる設定があります。Oracle は、ホストされている環境にこれらの設定を適用しており、ご使用の環境にも適用することを推奨しています。

**注：**これらの設定を変更するには、サーバ管理権限が必要です。

- **【区切り記号】** - カンマ区切りファイルは複数のアプリケーションで広く使用されます。
- **【エンコード】** - UTF-8 文字エンコードを使用すると、CSV 出力を多様なアプリケーションで使用できます。
- **【終端記号】** - 改行コード (CRLF) 終端記号を使用すると、レポート出力が適切にカラムおよび行に配置されます。

### レポート用 CSV の設定

- 1 レポートと分析のホームページに移動します。
- 2 **【起動】** ▶ **【レポート管理】** をクリックします。  
    **【管理】** ページが表示されます。  
    デフォルトでは、**【ステータス】** タブが選択されています。
- 3 左側のペインで **【システム】** をクリックします。
- 4 **【スコアカード】** セクションでサーバ名をクリックします。  
    サーバのフル URL がサーバ名の下に表示されます。
- 5 サーバのフル URL をクリックします。  
    サーバで利用できるサービスが表示されます。
- 6 **【レポート サービス】** ▶ **【プロパティを設定】** を選択します。  
    **【プロパティを設定 - レポートサービス】** ダイアログボックスが表示されます。
- 7 **【設定】** タブを選択します。
- 8 **【カテゴリ】** ドロップダウンリストで、**【環境】** を選択します。
- 9 **【環境】** カテゴリの **【高度な設定】** 行で **【編集】** をクリックします。  
    **【詳細設定】** ダイアログボックスが表示されます。
- 10 **【親エントリから取得した設定を上書き】** チェックボックスをオンにします。

- 11 次のパラメータと値を入力します。

パラメータ	値	説明
RSVP.CSV.DELIMITER	,	レポート出力内の各データアイテムはカンマで区切ります。
RSVP.CSV.ENCODING	UTF-8	レポートデータに対して UTF-8 文字エンコードを指定します。
RSVP.CSV.TERMINATOR	CRLF	行が順にカラムに表示されるように、データの各行は改行コードで区切ります。

- 12 各パラメータの横のチェックボックスをオンにします。
- 13 **[OK]** をクリックします。
- [プロパティを設定 - レポート サービス] ページが表示されます。
- 14 **[OK]** をクリックします。



## 第 9 章

# スタディの展開

### この章の内容

スタディの展開 .....	126
---------------	-----

## スタディの展開

スタディ展開の詳細については、『スタディとレポート設定ガイド』を参照してください。  
『スタディとレポート設定ガイド』では、InForm スタディをセットアップし、  
レポートリングと分析モジュールをスタディ用に設定するために必要なタスクを実行する  
方法について説明します。

## 第 10 章

# ソフトウェアコンポーネントの アンインストール

### この章の内容

ソフトウェアコンポーネントのアンインストールについて .....	128
Cognos Customization for InForm および Cognos Gateway Customization for InForm ウィザードのアンインストール .....	129
Cognos 8・BI ソフトウェアのアンインストール .....	130
Oracle ディレクトリサーバ のアンインストール.....	131
InForm ソフトウェア のアンインストール .....	132

## ソフトウェアコンポーネントのアンインストールについて

このセクションでは、コア InForm ソフトウェアおよび Cognos 8・BI ソフトウェアをアンインストールする方法と Cognos レポーティングのカスタマイズについて説明します。レポートエレメントと InForm スタディの削除方法については、『スタディとレポート設定ガイド』を参照してください。

InForm と Cognos 8・BI ソフトウェアは、次の順序でアンインストールします。

- 1 Cognos Customization for InForm ウィザード、Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード、InForm Reporting Database スクリプト
- 2 Cognos 8 ソフトウェア
- 3 Oracle ディレクトリサーバ
- 4 InForm ソフトウェア

# Cognos Customization for InForm および Cognos Gateway Customization for InForm ウィザードのアンインストール

Cognos Customization for InForm ウィザードでロードされたファイルをアンインストールするには、Cognos Gateway Customization for InForm ウィザードをアンインストールします。

- 1 Cognos Gateway Customization ソフトウェア がインストールされているサーバで、  
[スタート] ➤ [コントロールパネル] ➤ [プログラムおよび機能] を選択します。
- 2 **Cognos Gateway Customization for InForm** のエントリを選択し、  
[アンインストール] をクリックします。

Cognos Gateway Customization for InForm インストールウィザードが起動します。

- 3 確認メッセージが表示されたら、[はい] をクリックします。
- 4 ウィザードが完了したら、[完了] をクリックします。

## Cognos 8・BI ソフトウェアのアンインストール

Cognos アンインストールウィザードでは、Cognos 8・BI コアソフトウェアと Cognos 8・BI SDK ソフトウェアをアンインストールできます。どちらのコンポーネントも同じサーバ上にある場合はまとめてアンインストールできます。それ以外の場合は、各コンポーネントを別個にアンインストールします。

- 1 Cognos 8・BI ソフトウェアをホストしているサーバで、[スタート] > [すべてのプログラム] > [IBM Cognos 8 - 64] > [IBM Cognos 8 をアンインストール] > [IBM Cognos 8 をアンインストール] を選択します。

アンインストールウィザードが起動します。

- 2 [Uninstall Language Selection] ページで、アンインストールの実行に使用する言語を選択し、[次へ] をクリックします。
- 3 次のページで、アンインストールするコンポーネントパッケージを選択し、[次へ] をクリックします。

アンインストールプロセスが開始されます。

- 4 ウィザードが完了したら、[完了] をクリックします。

**注：** アンインストールにより一部のフォルダとファイルがコンピュータに残る場合があります。それらのファイルは、**Windows** エクスプローラアプリケーションで削除できます。

## Oracle ディレクトリサーバ のアンインストール

Oracle ディレクトリサーバのアンインストール方法については、Oracle Directory Server Enterprise Edition ドキュメント、またはお手元の Oracle データベースドキュメントを参照してください。

## InForm ソフトウェア のアンインストール

- 1 すべての InForm サーバおよびスタディを停止します。
- 2 InForm サービスと InForm Sync サービスを停止します。
- 3 [スタート] ➤ [コントロールパネル] ➤ [プログラムおよび機能] の順に選択します。
- 4 [Oracle InForm 6.0] を選択し、[アンインストール] をクリックします。  
確認ダイアログボックスが表示されます。
- 5 [はい] をクリックします。
- 6 共有ファイルを削除するかどうかを確認するメッセージが表示された場合は、  
[すべていいえ] をクリックします。  
続行する前に、カスタマイズしたファイルのバックアップを促すメッセージが表示されます。
- 7 ソフトウェアのアンインストールを中止し、カスタマイズしたファイルをバックアップする場合は、[いいえ] をクリックします。  
または  
アンインストールを続行する場合は、[はい] をクリックします。  
アンインストールが完了すると、[Reboot] ページが表示されます。
- 8 [完了] をクリックします。  
コンピュータが再起動されます。



## 索引 **A**

# コマンドとスクリプトのリファレンス

### この付録の内容

admindb.....	134
configandcheckdiffdb.....	135
configdiffdb.sql.....	137
create_cap_table.sql.....	138
deinstall_reporting_diffdb.....	139
grant_dba_privs.sql.....	141
grant_user_privs.sql.....	142
informprepورا.vbs.....	143
install_reporting_diffdb.....	144
mtsora102.vbs.....	146
oramtsadmin.sql.....	148
pfadmin.....	149
pfcognosconfig.....	162
pfrinit.....	165
remove_streams_setup_info_diffdb.....	168

# admindb

## 目的

【Install Admin DB】チェックボックスが選択されて InForm コアソフトウェアがインストールされることにより InForm 管理データベースがセットアップされていなかった場合、この管理データベースを作成します。

## 場所

<Installation\_Directory>¥InForm¥bin¥DBOra folder。

## 使用法

admindb [connection string] [/accountparams:"path\_to\_password\_file"]

オプション	説明
/accountparams:"path_to_password_file"	指定された場合、コマンドの実行に必要なユーザ名とパスワードを含むテキストファイルへのパスが含まれます。
accountparams	オプションが指定されていない場合、コマンドは必要なユーザ名とパスワードを入力するよう要求します。
	パラメータファイルの形式は「パラメータ=値」です。パラメータごとに改行し、行中ではスペースを使用しません。

## パラメータファイルコンテンツ

admindb コマンドパスワードファイルには、次のパラメータが必要です。

- pfdbauid=*pfdadmin user*
- pfdbapid=*pfdadmin password*
- admindbuid=*informadmin user*
- admindbpid=*informadmin password*

## 例

admindb trial1 /accountparams:"E:¥scripts¥adminpwd.txt"

## configandcheckdiffdb

### 目的

スタディデータベースとレポーティングデータベースが異なるデータベースインスタンスにある環境で変数設定をチェックします。

### 場所

レポーティングソフトウェアが置かれているフォルダ（<Installation\_Directory>\InForm Reporting\DBOra など）。

### 使用法

configandcheckdiffdb [/accountparams:"path\_to\_password\_file"]

オプション	パラメータ
/accountparams:"path_to_password_file"	<p>指定された場合、コマンドの実行に必要なユーザ名とパスワードを含むテキストファイルへのパスが含まれます。</p> <p>accountparams オプションが指定されていない場合、コマンドは必要なユーザ名とパスワードを入力するよう要求します。</p> <p>パラメータファイルの形式は「パラメータ=値」です。パラメータごとに改行し、行中ではスペースを使用しません。</p>

### パラメータファイルコンテンツ

configandcheckdiffdb コマンドパスワードファイルには、次のパラメータが必要です。

- trial\_schema\_owner\_password=スタディスキーマ所有者のパスワード。
- dbauser\_trial\_password=スタディ DBA ユーザのパスワード。
- dbauser\_rep\_password=レポーティング DBA ユーザのパスワード。
- streams\_admin\_user\_rep\_passwd=レポーティングストリーム管理ユーザのパスワード。
- streams\_admin\_user\_trial\_pwd=スタディストリーム管理ユーザのパスワード。

スクリプトがエラーなく終了したら、変数が正しいことを示します。エラーがある場合は、修正してスクリプトを再実行します。エラーが解決するまでインストールに進まないでください。

**注：** InForm データベースのインストールスクリプトと管理スクリプトは、InForm アプリケーションサーバを使用して実行するように設計されています。これらのスクリプトはまた、**Windows** サーバにある InForm レポーティングサーバ上の **Oracle** データベースホームからも実行できます。別の **Windows Oracle** クライアント、**Windows** 以外の **Oracle** クライアントやデータベースホームでこれらのスクリプトを実行した場合については、サポート対象外です。

## configdiffdb.sql

### 目的

スタディデータベースとレポートデータベースが異なるデータベースインスタンスにある環境下でのレポーティング変数を含みます。レポーティングのインストールスクリプトとアンインストールスクリプトでは、configdiffdb.sql ファイルを使用してユーザ名、パスワード、表領域、および接続情報を取得します。

### 場所

レポーティングソフトウェアが置かれているフォルダ（¥¥Oracle¥InForm¥bin¥DBORA¥Reporting など）。

### ノート

configdiffdb.sql ファイルを使用するコマンド（例：configandcheckdiffdb）を実行する前に、ユーザ定義の各変数を評価し、適宜環境を反映するように値を変更してください。

**注：** configdiffdb.sql ファイルでは、パスワードは使用できません。

## create\_cap\_table.sql

### 目的

PFCAPAdmin ユーザの TRIAL\_URLS テーブルを作成します。

### 場所

レポーターティングソフトウェアが置かれているフォルダ  
(¥¥Oracle¥InForm¥bin¥DBORAY¥Reporting など)。

### 使用法

@create\_cap\_table.sql

### ノート

/nolog で SQL\*Plus から実行します。

エラーは create\_cap\_table.log ファイルに記録されます。

**注：**InForm データベースのインストールスクリプトと管理スクリプトは、InForm アプリケーションサーバを使用して実行するように設計されています。これらのスクリプトはまた、**Windows** サーバにある InForm レポーターティングサーバ上の **Oracle** データベースホームからも実行できます。別の **Windows Oracle** クライアント、**Windows** 以外の **Oracle** クライアントやデータベースホームでこれらのスクリプトを実行した場合については、サポート対象外です。

## deinstall\_reporting\_diffdb

### 目的

スタディスキーマとレポーティングスキーマが異なるデータベースインスタンスにある場合に、レポーティングスキーマを 1 つ削除します。このスクリプトは次のことを行います。

- スタディとレポーティングスキーマの 1 つの組み合わせに対応するレポーティングと分析モジュールに関連付けられているすべてのコンポーネントを削除します。
- 1 度に 1 つのレポーティングスキーマのみアンインストールします。複数のレポーティングスキーマをアンインストールするには、このスクリプトを必要な回数分実行します。
- レポーティング表領域を含む基となるレポーティングインフラストラクチャは削除しません。

### 場所

レポーティングソフトウェアが置かれているフォルダ (¥¥Oracle¥InForm¥bin¥DBORAY¥Reporting など)。

### 使用法

deinstall\_reporting\_diffdb [/accountparams:"*path\_to\_password\_file*"]

オプション	パラメータ
/accountparams:" <i>path_to_password_file</i> "	指定された場合、コマンドの実行に必要なユーザ名とパスワードを含むテキストファイルへのパスが含まれます。
	accountparams オプションが指定されていない場合、コマンドは必要なユーザ名とパスワードを入力するよう要求します。
	パラメータファイルの形式は「パラメータ=値」です。パラメータごとに改行し、行中ではスペースを使用しません。

### パラメータファイルコンテンツ

configandcheckdiffdb.sql コマンドパスワードファイルには、次のパラメータが必要です。

- trial\_schema\_owner\_password=スタディスキーマ所有者のパスワード。
- dbauser\_trial\_password=スタディ DBA ユーザのパスワード。
- dbauser\_rep\_password=レポーティング DBA ユーザのパスワード。
- streams\_admin\_user\_rep\_passwd=レポーティングストリーム管理ユーザのパスワード。
- streams\_admin\_user\_trial\_pwd=スタディストリーム管理ユーザのパスワード。

#### ノート

deinstall\_reporting\_diffdb.sql スクリプトを実行する前に、次のことを行ってください。

- configdiffdb.sql ファイル内のパラメータに、レポーティングスキーマのインストール時に使用した同じ値が含まれていることを確認します。詳細については、「**configdiffdb.sql**」(137ページ)を参照してください。
- スタディを停止します。

**注：** InForm データベースのインストールスクリプトと管理スクリプトは、InForm アプリケーションサーバを使用して実行するように設計されています。これらのスクリプトはまた、**Windows** サーバにある InForm レポーティングサーバ上の **Oracle** データベースホームからも実行できます。別の **Windows Oracle** クライアント、**Windows** 以外の **Oracle** クライアントやデータベースホームでこれらのスクリプトを実行した場合については、サポート対象外です。



## grant\_dba\_privs.sql

### 目的

インストールとアンインストールに使用される `rptinstall` ユーザに DBA 権限を付与します。

### 場所

レポーティングソフトウェアが置かれているフォルダ  
(`¥¥Oracle¥InForm¥bin¥DBORAY¥Reporting` など)。

### 使用法

@grant\_dba\_privs.sql rptinstall

### ノート

スタディデータベースに SYSDBA としてログオンします。

DBA ユーザ名は、**rptinstall** と指定する必要があります。

**注：** InForm データベースのインストールスクリプトと管理スクリプトは、InForm アプリケーションサーバを使用して実行するように設計されています。これらのスクリプトはまた、Windows サーバにある InForm レポーティングサーバ上の Oracle データベースホームからも実行できます。別の Windows Oracle クライアント、Windows 以外の Oracle クライアントやデータベースホームでこれらのスクリプトを実行した場合については、サポート対象外です。

## grant\_user\_privs.sql

### 目的

スタディスキーマを所有するユーザにデータベースユーザ権限を付与します。

### 場所

レポーティングソフトウェアが置かれているフォルダ  
(¥¥Oracle¥InForm¥bin¥DBORAY¥Reporting など)。

### 使用法

@grant\_user\_privs.sql <study schema owner>

<study schema owner> - スタディスキーマを所有しているデータベースユーザ名。

### 例

@grant\_user\_privs.sql pfst60uid

### ノート

/nolog で SQL\*Plus から実行します。

ユーザデータベース権限を付与する権限を持つユーザとしてスタディデータベースに接続します。

スクリプトは、grant\_user\_privs.log というログを作成します。

**注：** InForm データベースのインストールスクリプトと管理スクリプトは、InForm アプリケーションサーバを使用して実行するように設計されています。これらのスクリプトはまた、Windows サーバにある InForm レポーティングサーバ上の Oracle データベースホームからも実行できます。別の Windows Oracle クライアント、Windows 以外の Oracle クライアントやデータベースホームでこれらのスクリプトを実行した場合については、サポート対象外です。

# informprepora.vbs

## 目的

【**Prep Oracle**】チェックボックスが選択されて InForm コアソフトウェアがインストールされることにより pfdbadmin ユーザがセットアップされていなかった場合、pfdbadmin ユーザを作成します。

## 場所

<Installation\_Directory>¥InForm¥bin¥DBOra folder。

## 使用法

informprepora.vbs <oracle\_connection\_string> [/accountparams:"path\_to\_password\_file"]

オプション	パラメータ
/accountparams:"path_to_password_file"	指定された場合、コマンドの実行に必要なユーザ名とパスワードを含むテキストファイルへのパスが含まれます。
	accountparams オプションが指定されていない場合、コマンドは必要なユーザ名とパスワードを入力するよう要求します。
	パラメータファイルの形式は「パラメータ=値」です。パラメータごとに改行し、行中ではスペースを使用しません。

## パラメータファイルコンテンツ

informprepora.vbs コマンドパスワードファイルには、次のパラメータが必要です。

- orasys\_user=<sys\_userid>
- orasys\_user\_pass=<password\_for\_sys\_user>
- pfdbauid=<pfadbadmin\_userid>
- pfdbapid=<pfadbadmin\_password>

## 例

informprepora trialdb /accountparams:"E:¥scripts¥prep.txt"

## ノート

スクリプトホスト (Windows Script Host) を cscript に設定して、メッセージのポップアップを制御します。次のように入力します。

**cscript //H:cscript**

# install\_reporting\_diffdb

目的

スタディデータベースとレポートデータベースが異なるデータベースインスタンスにある環境でレポーティングと分析モジュールをインストールします。

場所

レポーティングソフトウェアが置かれているフォルダ (¥¥Oracle¥InForm¥bin¥DBORA¥Reporting など)。

使用法

install\_reporting\_diffdb [/accountparams:"*path\_to\_password\_file*"]

オプション	パラメータ
/accountparams:" <i>path_to_password_file</i> "	指定された場合、コマンドの実行に必要なユーザ名とパスワードを含むテキストファイルへのパスが含まれます。  accountparams オプションが指定されていない場合、コマンドは必要なユーザ名とパスワードを入力するよう要求します。  パラメータファイルの形式は「パラメータ=値」です。パラメータごとに改行し、行中ではスペースを使用しません。

パラメータファイルコンテンツ

install\_reporting\_diffdb.sql コマンドパスワードファイルには、次のパラメータが必要です。

- trial\_schema\_owner\_password=スタディスキーマ所有者のパスワード。
- rep\_schema\_owner\_password=レポーティングスキーマ所有者のパスワード。
- dbauser\_trial\_password=スタディ DBA ユーザのパスワード。
- dbauser\_rep\_password=レポーティング DBA ユーザのパスワード。
- streams\_admin\_user\_rep\_passwd=レポーティングストリーム管理ユーザのパスワード。
- streams\_admin\_user\_trial\_pwd=スタディストリーム管理ユーザのパスワード。
- rep\_proxy\_user\_password=指定されたトライアルスキーマへの読み取り専用アクセスを持つ、トライアルデータベースに存在するユーザのパスワード。

ノート

インストールスクリプトを実行する前に、configdiffdb.sql スクリプトでスタディ固有の変数設定が更新されていることを確認します。詳細については、「**configdiffdb.sql**」

(137ページ) を参照してください。

**注：** InForm データベースのインストールスクリプトと管理スクリプトは、InForm アプリケーションサーバを使用して実行するように設計されています。これらのスクリプトはまた、**Windows** サーバにある InForm レポーティングサーバ上の **Oracle** データベースホームからも実行できます。別の **Windows Oracle** クライアント、**Windows** 以外の **Oracle** クライアントやデータベースホームでこれらのスクリプトを実行した場合については、サポート対象外です。

## mtsora102.vbs

### 目的

Oracle XA トランザクションサポートをセットアップします。InForm コアソフトウェアのインストール時に [Prep Oracle] チェックボックスを選択した場合、Oracle XA トランザクションサポートがセットアップされます。インストール中に Oracle XA トランザクションサポートをセットアップしなかった場合、mtsora102.vbs スクリプトにより、Oracle のインストール中またはインストール後に手動でセットアップできます。

mtsora102.vbs ファイルでは、次の処理が実行されます。

- 1 XAVIEW.sql スクリプトを SYS ユーザで実行し、V\$XATRANS\$ ビューを作成します。このスクリプトは次の場所にあります。

```
%ORACLE_HOME%\RDBMS\ADMIN\XAVIEW.SQL
```

- 2 次のコマンドを入力して、Public ユーザにこれらのビューの SELECT 権限を付与します。

```
Grant Select on V$XATRANS$ to public
Grant Select on sys.dba_pending_transactions to public
```

**注：** この例では **SELECT** 権限が **Public** に付与されますが、ご利用の環境では **SELECT** 権限はデータベースに関連付けられたプロファイルに付与される必要があります。

- 3 HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥MSDTC¥Security にあるレジストリキーを次のように変更します。

```
"NetworkDtcAccess"=dword:00000001
"NetworkDtcAccessAdmin"=dword:00000001
"NetworkDtcAccessTransactions"=dword:00000001
"XaTransactions"=dword:00000001
"NetworkDtcAccessOutbound"=dword:00000001
"NetworkDtcAccessInbound"=dword:00000001
```

- 4 HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥MSDTC¥XADLL にあるレジストリキーを次のように変更します。

```
"mtxoci.dll"="C:\\WINDOWS\\system32\\mtxoci.dll"
```

### 場所

<Installation\_Directory>¥InForm¥bin¥DBOra folder。

### 使用法

```
mtsora102.vbs <oracle_connection_string> <oracle_client_home_key>
[/accountparams:"path_to_password_file"]
```

オプション

パラメータ

オプション	パラメータ
<code>/accountparams:"path_to_password_file"</code>	指定された場合、コマンドの実行に必要なユーザ名とパスワードを含むテキストファイルへのパスが含まれます。
	<code>accountparams</code> オプションが指定されていない場合、コマンドは必要なユーザ名とパスワードを入力するよう要求します。
	パラメータファイルの形式は「パラメータ=値」です。パラメータごとに改行し、行中ではスペースを使用しません。

### パラメータファイルコンテンツ

`mtsora102.vbs` コマンドパスワードファイルには、次のパラメータが必要です。

- `orasys_user=<sys_userid>`
- `orasys_user_pass=<password_for_sys_user>`

### 例

```
cscript mtsora102.vbs dev1 KEY_OraClient10g_CLIENT1
/accountparams:"E:¥scripts¥mtsora.txt"
```

### ノート

Oracle XA トランザクションサポートを手動でセットアップする場合は、`mtsora102.vbs` スクリプトと `oramtsadmin.sql` スクリプトの両方を実行します。詳細については、「[\*oramtsadmin.sql\*](#)」(148ページ)を参照してください。

スクリプトホスト (Windows Script Host) を **cscript** に設定して、メッセージのポップアップを制御します。次のように入力します。

```
cscript //H:cscript
```

詳細については、次の記事を参照してください。

- サポート技術情報 (Microsoft Knowledge Base) - Q193893 - 「Info:Using Oracle with Microsoft Transaction Server and COM+」
- MSDN ライブラリ - 「Setting up MTS to Access Oracle」
- サポート技術情報 (Microsoft Knowledge Base) : 文書番号 899191
- サポート技術情報 (Microsoft Knowledge Base) : 文書番号 817066 および 891801

## oramtsadmin.sql

### 目的

MTS 管理ユーザを作成し、自動トランザクション復元をスケジュールします。[**Prep Oracle**] チェックボックスを選択して InForm コアソフトウェアをインストールすることにより Oracle XA トランザクションサポートをセットアップしていない場合のみ、oramtsadmin.sql を実行します。Oracle XA トランザクションサポートを手動でセットアップする場合、mtsora102.vbs スクリプトの実行後、oramtsadmin.sql を実行します。

### 場所

%ORACLE\_CLIENT\_HOME%\¥oramts¥admin フォルダ

### 使用法

@oramtsadmin.sql

### ノート

SYSDBA として SYS ユーザを実行します。

InForm アプリケーションサーバに接続するすべての Oracle インスタンスに対してこのスクリプトを実行します。

**注：** InForm データベースのインストールスクリプトと管理スクリプトは、InForm アプリケーションサーバを使用して実行するように設計されています。これらのスクリプトはまた、Windows サーバにある InForm レポーティングサーバ上の Oracle データベースホームからも実行できます。別の Windows Oracle クライアント、Windows 以外の Oracle クライアントやデータベースホームでこれらのスクリプトを実行した場合については、サポート対象外です。



# pfadmin

## 目的

InForm サーバ環境をセットアップします。パラメータはレジストリに格納されます。このため、このユーティリティを実行するにはローカル管理者権限が必要です。

## 場所

<Installation\_Directory>\¥InForm¥bin¥DBOra folder。

## 使用法

```
pfadmin [ CHECKREG | CONFIG | CREATEREPORTINGMODEL | HELP | KILLSERVER
| PING | PUBLISHREVIEWSCHEMA | RECREATEREVIEWSCHEMA | REMOVE |
RECREATEREPORTINGSCHEMA | SETSERVER | SETUP | SETLANGUAGE | START |
STOP | UNINSTALL | VIEW ] [/accountparams:"path_to_password_file"]
```

### pfadmin コマンドオプション

#### オプション

#### 目的と構文

CHECKREG [/Del] [/DelAll]

NT レジストリに含まれる現在の InForm サーバの COM および MTS コンポーネントを表示します。

**注意：**次のいずれかの削除オプションを使用する場合は、その前に必ずサーバの削除またはサービスのアンインストールを行います。

- [/Del] - 使用しない設定を削除します。
- [/DelAll] - すべてのサーバの設定を削除します。

pfadmin コマンドオプション	
オプション	目的と構文
CONFIG Service [/AdminDB <i>DBServer</i> ]   [/AdminDSN <i>DsnName</i> ]   [/AdminDN] [/PfUser]   [/SysDBA]	<p>既存のサービスを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>[/AdminDB <i>DBServer</i> [SQL]] - InformAdmin データベースの ODBC DSN を設定します。 <i>DBServer</i>、<i>UID</i>、<i>PID</i> が InformAdmin データベースの作成に使用したものと同じであることを確認します。<i>UID</i> と <i>PID</i> には英字または英数字を使用し、先頭の文字は英字を使用してください。数字のみの文字列は使用できません。</li> <li>[/AdminDSN <i>DsnName</i>] - 指定したユーザ名とパスワードを使用し、デフォルトサーバで ODBC DSN InForm ソフトウェアを作成します。<i>UID</i> と <i>PID</i> には英字または英数字を使用し、先頭の文字は英字を使用してください。数字のみの文字列は使用できません。</li> <li>[/PfUser] - InForm ソフトウェア のインストール時に <i>PfUser_computername</i> アカウントを作成します。このアカウントは、InForm サーバが Microsoft MTS パッケージ用に使用します。通常、このアカウントを設定する必要はありません。NT ユーザ マネージャを使用してパスワードを変更する場合、InForm サービスにこの新しいパスワードを再設定する必要があります。</li> <li>[/SysDBA] - InForm のサービス DBA のユーザ名とパスワードを設定します。このコマンドを使用して、必要に応じて <i>pfdbadmin</i> パスワードを変更できます。</li> </ul> <p>InForm サービス DBA 名を変更する場合は、提供されている SQL スクリプト <i>InFormPrepORA.sql</i> の内容をこの新しいユーザ名とパスワードに変更し、SYS ユーザでこのスクリプトを実行します。スクリプトの実行後、このコマンドオプションを使用して、新しい InForm サービス DBA を使用するように InForm サービスを設定します。</p> <p><i>UID</i> と <i>PID</i> には英字または英数字を使用し、先頭の文字は英字を使用してください。数字のみの文字列は使用できません。</p>
CONFIG Server <i>ServerName</i> [Automatic Manual]	<p>既存サーバのスタートアップモードを Automatic (自動) または Manual (手動) に設定します。</p>

## pfadmin コマンドオプション

オプション	目的と構文
<p>CONFIG Trial <i>TrialName</i>          [Automatic   Manual]            [/TriDSN <i>DSN</i>            [/RndDSN <i>DSN</i>            [/RndDSN <i>DSN</i>            [/Rnd [<i>MDBFilePath</i>]            [/Rnd [<i>MDBFilePath</i>]            [/Host <i>ServerName</i>]</p>	<p>既存のスタディを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Automatic   Manual] - スタディのスタートアップモードを設定します。</li> <li>• [/TriDSN <i>DSN</i>] - スタディの ODBC DSN を設定します。UID と PID には英字または英数字を使用し、先頭の文字は英字を使用してください。数字のみの文字列は使用できません。</li> <li>• [/RndDSN <i>DSN</i>] - スタディの無作為割付ソースデータセット名を設定します。Microsoft 無作為割付ソースデータベースをセットアップする際に使用します。</li> <li>• [/RndDSN <i>DSN</i>] - スタディの無作為割付ソースデータセット名を設定します。Oracle 無作為割付ソースデータベースをセットアップする際に使用します。UID と PID には英字または英数字を使用し、先頭の文字は英字を使用してください。数字のみの文字列は使用できません。</li> <li>• [/Rnd [<i>MDBFilePath</i>]] - 指定した Microsoft Access データベースファイルを使用するためのスタディ無作為割付ソースデータセット名を作成します。</li> <li>• [/Rnd [<i>MDBFilePath</i>]] - 指定した Oracle データベースファイルを使用するためのスタディ無作為割付ソースデータセット名を作成します。UID と PID には英字または英数字を使用し、先頭の文字は英字を使用してください。数字のみの文字列は使用できません。</li> <li>• [/Host <i>ServerName</i>] - スタディを現在のホストサーバから InForm サービスの別のサーバに移動します。</li> </ul>

pfadmin コマンドオプション	
オプション	目的と構文
CONFIG CDD <i>TrialName</i> [Enable   Disable]   [DSN [Active   Inactive]]   [DSN <i>StudyLocale</i> ]	<p>既存の CDD を次のように設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Enable   Disable] - 特定のスタディの CDD を有効または無効にします。</li> <li>• [DSN [Active   Inactive]] - 特定のスタディの CDD DSN を有効または無効にします。</li> <li>• [DSN <i>StudyLocale</i>] - 単位のシンボル用 CDD カラムに格納されている単位のシンボル トランザクション用に使用されるスタディ ロケールを指定します。</li> <li>• <i>path_to_dsn_password_file</i> - 指定したユーザ ID とパスワードを既存の CDD DSN に設定します。UID と PID には英字または英数字を使用し、先頭の文字は英字を使用してください。数字のみの文字列は使用できません。</li> </ul>
CONFIG WEBSERVICE <i>TrialName</i> <i>WebServiceName</i> [Add   Remove]	<p>Web サービスをスタディと関連付けます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>WebServiceName</i> - ODMSubmitService</li> <li>• [Add   Remove] — スタディと Web サービス間の関連付けを作成または削除します。</li> </ul>
CREATEREPORTINGMODEL <i>TrialName</i>	レポーティングモデルを新たに最初から作成します。
HELP	pfadmin コマンドのすべてのオプションをリストします。
KILLSERVER <i>ServerName</i>	サーバ上でスタディを停止することなく、サーバの MTS パッケージを停止します。

pfadmin コマンドオプション	
オプション	目的と構文
PING <i>MachineName</i> 1   2   3: <i>ServerName</i>   4: <i>ServerName</i>   5: <i>ServerName</i> [Port#]	<p>InForm サービスまたは特定のサーバに ping を実行します。ping のレベルは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 1 - InForm サービスに ping を実行します。</li> <li>• 2 - InForm サービスとすべての InForm サーバに ping を実行します。</li> <li>• 3 - 指定したサーバに ping を実行します。</li> <li>• 4 - 指定したサーバに ping を実行し、そのサーバの情報を取得します。</li> <li>• 5 - 指定したサーバに ping を実行し、サーバ側のファイルにユーザセッションをダンプします。</li> <li>• [Port#] - エコーサーバが応答するポート番号を変更した場合は、ここに指定できます。</li> </ul>
PUBLISHREVIEWSCHEMA <i>TrialName</i> [/FORCE]	<p>レビュースキーマの臨床テーブルに対するすべてのスタディバージョン変更に応用されます。</p> <p>/FORCE オプションを使用した場合、InForm アプリケーション は適用されていないスタディバージョンがあるかどうか、あるいはすべてのスタディバージョンの変更が適用されたかどうかを確認しません。</p> <p><b>注：</b> /FORCE オプションは臨床テーブルを破棄または再作成せず、臨床テーブルをスタディバージョンに一致させます。/FORCE オプションは、Oracle から推奨された場合にのみ使用してください。</p> <p>これは同期操作であるため、操作中はスタディを使用できません。</p>
RECREATEREVIEWSCHEMA [TrialName StudyLocale_ISO_name]	<p>レビュースキーマスタディロケールを変更します。</p> <p>レビュースキーマスタディロケールは、トライアルが最初にインストールされるときに自動的に選択されますが、このコマンドを使用して変更できます。</p>

pfadmin コマンドオプション	
オプション	目的と構文
REMOVE [Server <i>ServerName</i> ]   [Trial <i>TrialName</i> [/DSN]]   [CDD <i>TrialName</i> [/All   <i>DSN</i> ]]	<p>既存のサーバ、スタディ、または CDD を削除します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• [Server <i>ServerName</i>] - InForm サービスから InForm サーバを削除します。このコマンドを実行する前に、スタディを他のサーバに対して再設定するか、削除する必要があります。</li><li>• [Trial <i>TrialName</i> [/DSN]] - 指定したスタディを InForm サービスから削除します。スタディの Web 仮想ディレクトリおよびフォルダは物理的に削除されます。スタディに関連する DSN を削除するには /DSN オプションを使用します。</li><li>• [CDD <i>TrialName</i> [/All   <i>DSN</i>]] - 指定したスタディのすべての CDD DSN、または DSN で指定した特定の CDD を削除します。</li></ul> <p>注：PFADMIN REMOVE コマンドを使用する前に、IIS が実行中であることを確認します。</p>

pfadmin コマンドオプション	
オプション	目的と構文
SETSERVER [Site <i>TrialName MachineName</i> ]   [MedMLInstaller <i>TrialName MachineName</i> ]   [Reporting <i>TrialName ReportingUrl</i> ]   [ReportingAN <i>TrialName AuthenticationNamespace</i> ]   [ReportingUR <i>TrialName UserRoot</i> ]   [ReportingInt <i>TrialName ReportingInternalURI</i> ]   [pfreportinguserpw <i>TrialName</i> ]   [systempw <i>TrialName</i> ]	<p>MedML と施設サーバを変更し、レポーティング構成の設定値を設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>[Site <i>TrialName MachineName</i>]—サポートされていません。</li> <li>[MedMLInstaller <i>TrialName MachineName</i>]—サポートされていません。</li> <li>[Reporting <i>TrialName ReportingUrl</i>] - スタディの Cognos 8・BI URL を設定します。</li> <li>[ReportingAN <i>TrialName AuthenticationNamespace</i>] - スタディの Cognos 8・BI AuthenticationNamespace を設定します。</li> <li>[ReportingUR <i>TrialName UserRoot</i>] - スタディの Cognos 8・BI UserRoot を設定します。</li> <li>[ReportingInt <i>TrialName ReportingInternalURI</i>] - InForm サーバが Cognos 8・BI サーバとの通信に使用する内部 URI を設定します。</li> <li>[pfreportinguserpw <i>TrialName</i>] - InForm ユーザインターフェースを介して pfreportinguser のパスワードを変更したら、この pfadmin コマンドを実行し、モデル作成用 pfreportinguser ユーザの認証情報を必要とするときに Reporting で使用されるプロパティを設定します。</li> </ul> <p>pfreportinguser は、pfrinit を実行して各スタディの Cognos を設定する優先スタディユーザです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>[systempw <i>TrialName</i>] - 指定したスタディのシステムユーザのパスワードを設定します。このコマンドはまた、システムユーザを有効にします。</li> </ul> <p><b>注：</b>SETSERVER コマンドを実行するには、InForm サーバの [既定の認証レベル] プロパティを [接続] に設定しておく必要があります。</p> <p>このプロパティを設定するには、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 [管理ツール] &gt; [コンポーネント サービス] &gt; [マイ コンピュータ] ・ [プロパティ] の順に選択します。</li> <li>2 [既定のプロパティ] ・ [既定の分散 <b>COM</b> 通信プロパティ] ・ [既定の認証レベル] を [接続] に設定します。</li> </ol>

pfadmin コマンドオプション	
オプション	目的と構文
SETUP Server <i>ServerName</i> [Automatic]	<p>InForm サービスに新しい InForm サーバを作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• [Automatic] - サーバと InForm サービスは自動的に開始されます。デフォルトは手動スタートアップです。</li></ul>
SETUP Trial <i>TrialName ServerName</i> [/DB <i>OracleConnStr</i> ]   [/DSN <i>TriDSN</i> [Automatic]	<p>指定した InForm サーバに、新規 ODBC DSN を作成するか、既存 ODBC DSN を使用するオプションを指定してスタディを作成します。指定するサーバは作成する必要があります。スタディのデフォルトのスタートアップモードは手動（Manual）です。スタディをホストする InForm サーバの開始時にスタディを自動的に起動させるには、自動（Automatic）オプションを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• [/DB <i>OracleConnStr UID PID</i>] - 指定されたサーバ名（<i>ServerName</i>）、<i>UID</i>、<i>PID</i> で、ODBC DSN のトライアル名（<i>TrialName</i>）を作成します。<i>UID</i> と <i>PID</i> には英字または英数字を使用し、先頭の文字は英字を使用してください。数字のみの文字列は使用できません。</li><li>• [/DSN <i>TriDSN UID PID</i> [Automatic]] - 作成したスタディ <i>TrialName</i> が指定したスタディデータセット名（<i>TriDSN</i>）、<i>UID</i>、<i>PID</i> を使用するよう設定します。スタディが ODBC DSN に存在している必要があります。<i>UID</i> と <i>PID</i> には英字または英数字を使用し、先頭の文字は英字を使用してください。数字のみの文字列は使用できません。</li></ul> <p>注：/DSN コマンドを使用する前に、IIS が実行中であることを確認します。</p>



pfadmin コマンドオプション	
オプション	目的と構文
SETUP CDD <i>RefName TrialName</i> /DB <i>OracleConnStr DSN</i> [/TBSP <i>OraTBSP</i> ] [Active] [NoSchema]	<p>指定した CDD Refname に関連付ける新しい CDD DSN を設定します。UID と PID には英字または英数字を使用し、先頭の文字は英字を使用してください。数字のみの文字列は使用できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [/TBSP <i>OraTBSP</i>] - CDD スキーマの Oracle 表領域を定義します。</li> <li>• [Active] - DSN がトランザクションであることを指定します。</li> <li>• [NoSchema] - セットアップ中に新しい CDD スキーマを作成しないことを示します。既存のデータベースに影響はありません。デフォルトで、ユーザは削除され、Oracle データベースは破棄されます。その後、新しいスキーマが作成され、スキーマを定義する RefName に基づいて内容が設定されます。</li> </ul> <p>注： このコマンドを正常に実行するには、スタディが開始されている必要があります。</p>
SETUP CDD <i>RefName TrialName</i> /DSN <i>DSN</i> [/TBSP <i>OraTBSP</i> ] [Active] [NoSchema]	<p>指定した CDD RefName に関連付ける既存の DSN をセットアップします。UID と PID には英字または英数字を使用し、先頭の文字は英字を使用してください。数字のみの文字列は使用できません。</p> <p>[/TBSP <i>OraTBSP</i>] - CDD スキーマの Oracle 表領域を定義します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Active] - DSN をトランザクションにします。</li> <li>• [NoSchema] - セットアップ中に新しい CDD スキーマを作成しないことを示します。既存のデータベースに影響はありません。デフォルトで、ユーザは削除され、Oracle データベースは破棄されます。その後、新しいスキーマが作成され、スキーマを定義する RefName に基づいて内容が設定されます。</li> </ul> <p>注： このコマンドを正常に実行するには、スタディが開始されている必要があります。</p>
SETLANGUAGE [ <i>IsoLanguageName</i> ]   en-US   ja-JP	<p>InForm 製品言語を設定します。現在 en-US および ja-JP がサポートされています。</p>

pfadmin コマンドオプション	
オプション	目的と構文
START [Server <i>ServerName</i> ]   [Trial <i>TrialName</i> ]	<p>既存の InForm サーバまたはスタディを開始します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Server <i>ServerName</i>] - サーバ名を指定して既存の InForm サーバを開始します。</li> <li>• [Trial <i>TrialName</i>] - スタディ名を指定して既存のスタディを開始します。</li> </ul>
START [Trial <i>TrialName</i> [/Design]]	<p>スタディを Design Mode で開始します。デザインが完了していないスタディコンポーネントをインストールできます（厳密なチェックが強制的に行われることはありません）。デフォルトでは、スタディは Production Mode で開始します。</p>
STOP [Server <i>ServerName</i> [/Trials]]   [Trial <i>TrialName</i> [/Anyway]]	<p>既存の InForm サーバまたはスタディを停止します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Server <i>ServerName</i> [/Trials]] - サーバ名を指定して既存の InForm サーバを停止します。デフォルトでは、実行中のスタディがなく、他のアプリケーションが接続していない場合に、実行中のサーバを停止できます。キーワード Trials を指定すると、実行中のすべてのスタディが停止してから、サーバが停止します。</li> <li>• [Trial <i>TrialName</i> [/Anyway]] - 指定したスタディを停止します。キーワード Anyway を指定すると、接続や HTTP 要求の有無にかかわらず、スタディが停止します。</li> </ul>
UNINSTALL	<p>すべての InForm サーバとスタディを削除してから、InForm サービス設定 PfUser_computername と MTS ライブラリパッケージを削除します。</p> <p>注：このコマンドを動作させるには、InForm サービスが実行中である必要があります。</p>

pfadmin コマンドオプション	
オプション	目的と構文
VIEW [Languages]   [Service]   [Server <i>ServerName</i> ]   [Trial <i>TrialName</i> ]   [CDD <i>TrialName</i> ]   [Reporting <i>TrialName</i> ]	<p>InForm サービスのすべてのサーバ、サーバのすべてのスタディ、またはスタディに設定されている CDD DSN のすべての RefName の監視リストを表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Languages] - InForm サービスを開始せずにインストールされた言語の一覧。</li> <li>• [Service] <ul style="list-style-type: none"> <li>▪ InForm サービスのすべてのサーバとスタディのリストを表示します。</li> <li>▪ 実際にインストールされた製品の言語と共に、インストールされた製品言語のリストを表示します。</li> </ul> </li> <li>• [Server <i>ServerName</i>] - サーバ名を指定した各サーバと、そのサーバでホストされているスタディのリストを表示します。</li> <li>• [Trial <i>TrialName</i>] - スタディ名を指定してスタディのリストを表示します。</li> <li>• [CDD <i>TrialName</i>] - 指定したスタディに対して設定されている CDD DSN ごとに RefName のリストを表示します。</li> <li>• [Reporting <i>TrialName</i>] - レポーティングの現在のステータスのリストを表示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>▪ スタディにレポーティングが構成されているかどうかを示します。</li> <li>▪ レポーティングのセットアップのタイプ (samedb または diffdb) を指定します。</li> <li>▪ レポーティングユーザ名を指定します。</li> <li>▪ Cognos モデルを最後に更新した日付を指定します。</li> <li>▪ レポートデータベースが最新かどうかを示します。</li> <li>▪ Oracle Streams が適切に動作していることを示します (該当する場合)。</li> </ul> </li> </ul>

pfadmin コマンドオプション	
オプション	目的と構文
/accountparams:" <i>path_to_password_file</i> "	指定された場合、コマンドの実行に必要なユーザ名とパスワードを含むテキストファイルへのパスが含まれます。  accountparams オプションが指定されていない場合、コマンドは必要なユーザ名とパスワードを入力するよう要求します。  パラメータファイルの形式は「パラメータ=値」です。パラメータごとに改行し、行中ではスペースを使用しません。

パラメータファイルコンテンツ

pfadmin コマンドパスワードファイルには、次のパラメータが必要です。

コマンド	パラメータ
• pfadmin setup trial	uid=ユーザ名
• pfadmin setup cdd	pid=パスワード
• pfadmin config cdd	
• pfadmin config service /sysdba	
• pfadmin config service /admindsn	
• pfadmin config service /pfuser	
• pfadmin config trial	
• pfadmin setserver reportingdiffdbpw	pid=パスワード
• pfadmin setserver pfreportinguserpw	
• pfadmin setserver systempw	

例

InForm Reporting のステータスを確認します。

```
pfadmin view reporting pfst60
```

InForm サービスの InForm サーバとスタディのステータスを確認します。

```
pfadmin view service
```

demo InForm サーバを開始します。

```
pfadmin start server demo
```

pfst60 スタディを開始します。

```
pfadmin start study pfst60
```

demo InForm サーバ上で実行されているすべてのスタディを停止し、次に demo サーバを停止します。

```
pfadmin stop server demo /Trials
```

パスワードを設定してシステムユーザアカウントを有効にします。

```
pfadmin setserver systempw pfst60 /accountparams:"E:\scripts\pwd.txt"
```

ノート

カンマ、等号記号、またはスペースが含まれる引数は二重引用符で囲む必要があります。

# pfcognosconfig

## 目的

Cognos 8・BI と連動するように InForm スタディを設定します。PFCognosConfig ユーティリティは、**InForm Reporting Configuration ウィザード**の代替コマンドライン ユーティリティです。

PFCognosConfig は、レポートパラメータを変更するために何度でも実行できます。レポートスタディユーザのパスワードが変更された場合は、PFCognosConfig.exe を実行して InForm に新しいパスワードを伝える必要があります。

スタディに対して PFCognosConfig を何度でも実行する場合、2 回目以降は、実行するたびにすべてのパラメータを指定しなくてもよく、変更したパラメータのみ指定する必要があります。

## 場所

<Installation\_Directory>\¥InForm¥bin¥DBOra folder。

## 使用法

pfcognosconfig "path\_to\_password\_file"

オプション	パラメータ
path_to_password_file	指定された場合、コマンドの実行に必要なユーザ名とパスワードを含むテキストファイルへのパスが含まれます。  パラメータファイルが指定されていない場合、コマンドは必要なユーザ名とパスワードを入力するよう要求します。  パラメータファイルの形式は「パラメータ=値」です。パラメータごとに改行し、行中ではスペースを使用しません。

## パラメータファイルコンテンツ

pfcognosconfig コマンドパスワードファイルには、次のパラメータが必要です。

オプション	説明
trialname=<studynome>	InForm スタディの名前。  <b>注：</b> Central Designer 展開パッケージでスタディを作成したときと同じ症例を使用します。
log_file=<outputlog>	出力ログの名前。 <b>例：</b> nocreatorgcap.log（オプション）。

オプション	説明
namespace=<cap_namespace>	<p>カスタム認証プロバイダ（CAP）ネームスペース。デフォルトは informcap です。ここで入力する値の大文字と小文字の区別は、Cognos Configuration ユーティリティのエントリと同じにする必要があります。たとえば、Cognos Configuration ユーティリティのエントリが小文字 (informcap) になっている場合は、&lt;namespace&gt;オプションも必ず informcap にしてください。</p> <p>Cognos Configuration ツールを使用し、手動で追加のネームスペースを作成できます。この場合、新しく作成したネームスペースの名前をこのフィールドに使用する必要があります。</p>
gateway_uri=<gateway_uri>	<p>エンドユーザのブラウザから Cognos 8・BI ゲートウェイサービスと通信する外部パブリック URI。この Cognos パラメータは、Cognos 8・BI Gateway Customization for InForm ウィザードで設定されます。パラメータ設定は、cogstartup.xml ファイルに格納されます。</p> <p><b>例：</b> http://appsru02.north.pf.com/cognos8</p>
dispatcher_uri=<dispatcher_uri>	<p>InForm サーバが Cognos 8・BI サーバとの通信に使用する内部 URI。この Cognos パラメータは、InForm CRN ウィザードで設定されます。パラメータ設定は、cogstartup.xml ファイルに格納され、InForm アプリケーションの [管理] &gt; [システム構成] ページの [レポーティング内部 URI] の値に対応します。</p> <p><b>例：</b> http://appsru02.north.pf.com:9300/p2pd/servlet/dispatch</p>
root_folder=/ <i>&lt;content&gt;</i> / <i>&lt;folder&gt;</i> [@name='<studynome>']	<p>企業のトップレベルのレポーティングフォルダ。デフォルト:</p> <p>/content/folder[@name='&lt;studynome&gt;']</p>
reporting_samedb=<true   false>	<p>スタディデータベースと Reporting データベースが同じサーバ上にある場合、true とします。</p>
reporting_diffdb_server=<servername>	<p>Reporting データベース接続文字列（TNS 名）。Reporting データベースと InForm スタディデータベースが異なる場合に使用します。</p>

オプション	説明
reporting_diffdb_pass=< <i>rptpid</i> >	Reporting トライアルパスワード (Reporting データベーススタディユーザ名は InForm データベーススタディユーザ名と同じでなければならないため、ユーザ名を指定する必要はありません)。スタディデータベースと Reporting データベースが異なる場合に使用します。
trial_web_service=< <i>URL</i> >	InForm 認証 Web サービスの URL。このパラメータは必須です。
register_db_server=< <i>ServerName</i> >	スタディが Cognos に登録されているサーバの名前。
register_db_user=< <i>UserName</i> >	Cognos に登録されているスタディデータベースユーザ。
register_db_pass< <i>UserPassword</i> >	Cognos に登録されているデータベースユーザのパスワード。

例：

Reporting DiffDB をセットアップするためのパラメーター式を指定したコマンドラインの例：

```
pfcognosconfig "E:\scripts\pfconfigparams.txt"
```



# pfrinit

## 目的

次のタスクを実行します。

- デフォルトの Cognos 8・BI の機能を InForm レポーティング環境に合わせて変更する。
- InForm レポーティング要件を満たす Cognos 8・BI グループを新しく作成する。
- 共有フォルダへのアクセス権を設定し、Publishers のみがパブリック領域に書き込めるようにする。
- スタディ固有のレポーティンググループを Cognos 8・BI のグループと役割にマッピングする。
- スタディ固有のデータ接続を作成し、アクセス権を設定してスタディのメンバだけが使用できるように制限する。
- InForm フォルダにある InForm トライアル管理 (ITM) パッケージをコピーし、スタディ固有の ITM パッケージとして名前を変更する。
- スタディフォルダを作成し、スタディ固有のパッケージを参照する標準フォルダとレポートすべてを含める。レポート内の相対パスは、新しい場所に従って変更されます。
- コピーしたすべてのレポートを検証し、正常に検証されたレポートが構文的に正しく、スタディ固有のパッケージに対して実行できるようにする。

## 場所

Cognos アプリケーション層コンポーネントがインストールされているサーバの InForm アプリケーションサーバフォルダ。たとえば、<Installation\_Directory>\InForm\bin などです。

## 使用法

pfrinit "path\_to\_password\_file"

オプション	パラメータ
path_to_password_file	<p>指定された場合、コマンドの実行に必要なユーザ名とパスワードを含むテキストファイルへのパスが含まれます。</p> <p>パラメータファイルが指定されていない場合、コマンドは必要なユーザ名とパスワードを入力するよう要求します。</p> <p>パラメータファイルの形式は「パラメータ=値」です。パラメータごとに改行し、行中ではスペースを使用しません。</p>

pfrinit の実行に推奨される InForm スタディユーザは、**pfreportinguser** です。このユーザのパスワードは、他のユーザと同様に、InForm ユーザインタフェースを使用して変更できます。ただし、パスワードを変更したら、次の構文で PFADMIN コマンドを実行する必要があります。

#### PFADMIN SETSERVER PFREPORTINGUSERPW<studyname>

入力を求められたら、pfreportinguser のパスワードを入力します。

このコマンドでは、**pfreportinguser** の認証情報を必要とするときに Reporting で使用されるプロパティが設定されます。

詳細については、「**pfadmin**」(149ページ)を参照してください。

#### パラメータファイルコンテンツ

pfrinit コマンドパスワードファイルには、次のパラメータが必要です。

- sysadmin\_namespace=Oracle ディレクトリサーバ管理者ネームスペース。「**ORACLEHS**」(大文字と小文字が区別されます)と入力します。
- sysadmin\_uid=Oracle ディレクトリサーバ管理者ネームスペースのユーザ名。「**crnsysadmin**」と入力します。
- sysadmin\_pass=<crnsysadmin\_password> crnsysadmin ユーザの作成時に選択したパスワード。
- publisher\_namespace=カスタム認証プロバイダ (CAP) ネームスペース。デフォルトは informcap です。

**注:** ここで入力する値の大文字と小文字の区別は、**Cognos Configuration** ユーティリティのエントリと同じでなければなりません。たとえば、**Cognos Configuration** ユーティリティのエントリが小文字 (**informcap**) になっている場合は、<namespace> オプションも必ず **informcap** にしてください。

- publisher\_uid=InForm\_study\_user> 以下のレポーティンググループのメンバである InForm スタディユーザ。
  - Publishers
  - Sponsor Users または Site Users

**pfreportinguser** は、pfrinit を実行する推奨スタディユーザです。このユーザは、レポートイングと分析のインストール時に作成されます。

- publisher\_pass=InForm スタディユーザのパスワード。
- dispatcher\_url=InForm サーバが Cognos 8・BI サーバとの通信に使用する内部 URI。この Cognos 8・BI パラメータは、InForm CRN ウィザードで設定されます。パラメータ設定は、cogstartup.xml ファイルに格納され、InForm アプリケーションの [管理] > [コンフィギュレーション] ページの [レポートイング内部 URI] の値に対応します。

例： http://<machine\_FQDN>:9300/p2pd/servlet/dispatch

- trial\_name=InForm スタディの名前。

**注：** **Central Designer** デプロイメントパッケージでスタディを作成したときと同じ文字（大文字と小文字を区別）を使用します。

- reportdb\_pass=レポートイングスキーマユーザのパスワード。

例

pfrinit "E:\scripts\init.txt"

# remove\_streams\_setup\_info\_diffdb

**目的**  
スタディおよびレポーティングのデータベースからストリーム情報を削除します。

**場所**  
レポーティングソフトウェアが置かれているフォルダ (<Installation\_Directory>¥InForm Reporting¥DBOra など)。

**使用法**  
remove\_streams\_setup\_info\_diffdb [/accountparams:"path\_to\_password\_file"]

オプション	パラメータ
/accountparams:"path_to_password_file"	指定された場合、コマンドの実行に必要なユーザ名とパスワードを含むテキストファイルへのパスが含まれます。  accountparams オプションが指定されていない場合、コマンドは必要なユーザ名とパスワードを入力するよう要求します。  パラメータファイルの形式は「パラメータ=値」です。パラメータごとに改行し、行中ではスペースを使用しません。

**パラメータファイルコンテンツ**  
remove\_streams\_setup\_info\_diffdb コマンドパスワードファイルには、次のパラメータが必要です。

- streams\_admin\_user\_rep\_passwd=レポーティングストリーム管理ユーザのパスワード。
- streams\_admin\_user\_trial\_pwd=スタディストリーム管理ユーザのパスワード。

**例**  
remove\_streams\_setup\_info\_diffdb /accountparams:"e:¥scripts¥streampwd.txt"

## 第 11 章

# トラブルシューティング

### この章の内容

インストールの問題 .....	170
アンインストールの問題 .....	172

## インストールの問題

### Oracle MTS 設定が無効

Oracle レジストリ設定が間違っている場合、インストールプロセス中に次の InForm コアインストーラエラーが表示されることがあります。

- Oracle MTS 設定が無効です (Oracle MTS configuration is invalid)。
- レジストリ設定：無効 (Registry Settings:INVALID)
- XA ビュー：無効 (XA Views:INVALID)

考えられる解決策：

- インストールウィザードがまだ開いている場合は、次の手順を実行します。
  - 1 [戻る] をクリックして [データベースコンフィギュレーション] ウィンドウを表示します。
  - 2 [Prep Oracle] チェックボックスを選択します。
  - 3 [次へ] をクリックして次に進みます。

詳細については、『インストールガイド』を参照してください。

これにより、informprepora.vbs スクリプトと mtsora102.vbs スクリプトが実行されます。

- インストールウィンドウが既に閉じている場合は、コマンドラインから mtsora102.vbs を実行します。mtsora102.vbs ファイルは、InForm インストールイメージの InstallSupport フォルダ内にあります。

### XA ビュー：無効 (XA Views:INVALID)

「Oracle MTS 設定が無効」で推奨されている解決策を実施した後も引き続きこのエラーが表示される場合、またはコマンドラインから mtsora102.vbs を実行して警告が表示された場合は、xaview.sql ファイルがインストールされていない可能性があります。

**注：**これは、Oracle クライアントのみのインストール環境（多層セットアップ）の一部で発生する可能性があります。

考えられる解決策：

- 1 xaview.sql ファイルを（同じバージョンの Oracle を実行する）別のマシンから Oracle rdbms¥admin ディレクトリにコピーします。
- 2 SYS ユーザーで xaview.sql のあるマシンにログインします。
- 3 InForm コアインスタンスに対して xaview.sql を実行します。
- 4 コマンドラインから mtsora102.vbs を実行します。

## データベース接続

データベース接続に関する警告が表示された場合、次の内容をチェックします。

- 接続文字列の値が正しいか
- pfdbadmin パスワードが有効であるか

pfdbadmin ユーザが存在しないというメッセージが表示された場合は、次のいずれかを実行することによってユーザを作成します。

- InForm インストールウィザードで **[Prep Oracle]** チェックボックスを選択します。
- InForm インストールイメージの InstallSupport フォルダ内にある informprepora.vbs スクリプトを実行します。

## InForm サービス起動時のパスワードエラー

InForm インストールウィザードは、ローカルマシンユーザ (pfUSR) の [アカウント設定] ウィンドウに入力されたパスワードがそのマシンに設定されたパスワード要件を満たしているかどうかを確認できません。Windows のパスワード要件に準拠しないパスワードを入力した場合、エラーが発生し、InForm サービスは起動しません。

- 1 pfUSR パスワードを変更するには、次の DOS プロンプトを入力します。
- 2 pfUSR のパスワードを入力するよう要求されたら、パスワード要件を満たすパスワードを入力します。
- 3 次のコマンドを実行して InForm サービスを起動します。

```
new start pfservice
```

pfadmin view service コマンドを使用して、InForm サービスが起動されたことを確認します。

## アンインストールの問題

### レポーティングスキーマの削除時にエラーが発生する

**deinstall\_reporting\_diffdb.sql** スクリプトを実行して、レポーティングスキーマを削除しようとしたときに、「**Reporting deinstallation aborted**」というメッセージが表示された場合、アンインストールは失敗しており、レポーティングオブジェクトは削除されていません。

**configdiffdb.sql** ファイルの設定に問題があることが原因として考えられます。

**configdiffdb.sql** ファイルをチェックして、削除するレポーティングスキーマに対する設定が正しいことを確認します。特に、アンインストールスクリプトは表領域の有無を確認します。**configdiffdb.sql** ファイルに、存在していない表領域を参照する変数が含まれている場合、ファイルを更新して、アンインストールスクリプトをもう一度実行してください。



索引 **B**

# サイレントモードでの **Cognos** **Customization** ウィザードの実行

この付録の内容

サイレントモードで Cognos Customization ウィザードを実行する手順.....174

## サイレントモードで **Cognos Customization** ウィザード を実行する手順

複数のマシンが Cognos Content Manager および Cognos Report サーバ、Cognos ゲートウェイサーバを実行する実装では、Cognos Customization をサイレントモードで実行できます。

CRNConfig および CRNGatewayConfig セットアップウィザードをサイレントモードで実行するには、次の操作を実行します。

- 1 製品イメージから、**CRNConfig** および **CRNGatewayConfig** フォルダを、ウィザードを実行するマシンからアクセス可能な場所にコピーします。
- 2 各フォルダ内の **setup.iss** ファイルに、CRNConfig ウィザードと CRNGatewayConfig ウィザードで指定するオプションを入力します。

setup.iss ファイルを手動で編集するか、各カスタマイゼーションウィザードを記録モードで実行することができます。

詳細については、次を参照してください。

- **記録モードでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行** (174ページ)
- **記録モードでの Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig\setup.exe) の実行** (175ページ)

- 3 サイレントモードで設定ウィザードを実行します。

詳細については、次を参照してください。

- **サイレントモードでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行** (175ページ)
- **サイレントモードでの Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig\setup.exe) の実行** (176ページ)

## 記録モードでの **Cognos Customization for InForm** ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行

- 1 Cognos Content Manager サーバまたは Cognos Report サーバのカスタマイゼーションをインストールするには、Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) を実行します。

詳細については、「**Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行 - Cognos Content Manager/Cognos Report サーバ**」(99ページ) を参照してください。

- 2 コマンドプロンプトウィンドウを開き、次のコマンドを使用して記録モードで Cognos Customization for InForm を実行します。

この手順は、インストールオプションを記録し、他のマシンに対しウィザードをサイレントモードで再実行するのに使用する setup.iss レスポンスファイルを作成し

ます。

```
CRNConfig\setup.exe -r
-f1<path_to_configuration_files>\CRNConfig\setup.iss
```

パラメータ	説明
-r	記録モードでウィザードを実行します。ウィザード実行時に選択したオプションが -f1 パラメータによって指定されたレスポンスファイル (setup.iss) に保存されます。
-f1	レスポンスファイルの場所を指定します。-f1 フラグとレスポンスファイルの場所の間にはスペースを入れません。 例: -f1E:\ReportingInstallFiles\CRNConfig\setup.iss

## サイレントモードでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行

- 1 製品イメージから、CRNConfig フォルダを、ウィザードを実行するマシンからアクセス可能な場所にコピーします。
- 2 フォルダ内の setup.iss ファイルに、Cognos Customization for InForm ウィザードで指定するオプションを入力します。  
  
setup.iss ファイルを手動で編集するか、カスタマイゼーションウィザードを記録モードで実行することができます。詳細については、「**記録モードでの Cognos Customization for InForm ウィザード (CRNConfig\setup.exe) の実行**」(174ページ)を参照してください。
- 3 コマンドプロンプトウィンドウを開き、次のコマンドを実行します。

```
CRNConfig\setup.exe -s
-f1<path_to_configuration_files>\CRNConfig\setup.iss -f2<path_to_configuration_files>\CRNConfig\setup.log
```

パラメータ	説明
-s	サイレントモードでウィザードを実行します。
-f1	ウィザードのオプションを含むレスポンスファイルの場所を指定します。-f1 フラグとレスポンスファイルの場所の間にはスペースを入れません。  例: -f1E:\ReportingInstallFiles\CRNConfig\setup.iss
-f2	ウィザードのログファイルの場所を指定します。-f1 フラグとログファイルの場所の間にはスペースを入れません。  例: -f1E:\ReportingInstallFiles\CRNConfig\setup.log

## 記録モードでの Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig\setup.exe) の実行

- 1 Cognos ゲートウェイサーバのカスタマイゼーションをインストールするには、

Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGateway Config¥setup.exe) を実行します。

詳細については、「**ステップ 3 : Cognos ゲートウェイサーバーでの Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig¥setup.exe) の実行**」 (87ページ) を参照してください。

- 2 コマンドプロンプトウィンドウを開き、次のコマンドを使用して記録モードで Cognos Gateway Customization for InForm を実行します。

この手順は、インストールオプションを記録し、他のマシンに対しウィザードをサイレントモードで再実行するのに使用する setup.iss レスポンスファイルを作成します。

```
CRNGatewayConfig¥setup.exe -r -fl<path_to_configuration_files>CRNGatewayConfig¥setup.iss
```

パラメータ	説明
-r	記録モードでウィザードを実行します。ウィザード実行時に選択したオプションが -fl パラメータによって指定されたレスポンスファイル (setup.iss) に保存されます。
-fl	レスポンスファイルの場所を指定します。-fl フラグとレスポンスファイルの場所の間にはスペースを入れません。  例： -flE:\ReportingInstallFiles\CRNConfig¥setup.iss

## サイレントモードでの Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig¥setup.exe) の実行

- 1 製品イメージから、CRNGatewayConfig フォルダを、ウィザードを実行するマシンからアクセス可能な場所にコピーします。
- 2 フォルダ内の setup.iss ファイルに、Cognos Gateway Customization for InForm ウィザードで指定するオプションを入力します。

setup.iss ファイルを手動で編集するか、カスタマイゼーションウィザードを記録モードで実行することができます。詳細については、「**記録モードでの Cognos Gateway Customization for InForm ウィザード (CRNGatewayConfig¥setup.exe) の実行**」 (175ページ) を参照してください。

- 3 コマンドプロンプトウィンドウを開き、次のコマンドを実行します。

```
CRNConfig¥setup.exe -s  
-fl<path_to_configuration_files>\CRNConfig¥setup.iss -f2<path_to_configuration_files>\CRNConfig¥setup.log
```

パラメータ	説明
-s	サイレントモードでウィザードを実行します。

パラメータ	説明
-f1	ウィザードのオプションを含むレスポンスファイルの場所を指定します。-f1 フラグとレスポンスファイルの場所の間にはスペースを入れません。  例：-f1E:\ReportingInstallFiles\CRNConfig\setup.iss
-f2	ウィザードのログファイルの場所を指定します。-f1 フラグとログファイルの場所の間にはスペースを入れません。  例：-f1E:\ReportingInstallFiles\CRNConfig\setup.log